
モンスターハンター～大海の剣～

風の双剣使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター〜大海の剣〜

【Nコード】

N0273I

【作者名】

風の双剣使い

【あらすじ】

この小説はMH3で、双剣や弓（後、ガンランスと狩猟笛も）などの武器を使いたいと言う願いを基に書かせていただくモンスターハンターファンフィクションです。MH3にはない武器を使うため、オリジナル要素満載（主にオリジナル武器など）になります。後、一応ストーリー重視で、コメディやラブコメなどの要素も入れる予定です。拙い文章ですが、よろしく願います。

00・オープニング（前書き）

はじめまして！ 風の双剣使いと申します！

この小説が、僕の初投稿小説となっております。

ですので、拙い文章が目立つだろうと思いますが、どうか温かい目で見守って下さい。

それでは、モンスターハンター〜大海の剣〜始まります！

00・オーブニング

広い大海原……そこに一艘の大型船がある村に向かって進んでいく……。

その船の上から話し声が聞こえてきた……。

「おお！ あそこがツヴァイ村か……。」

少年が望遠鏡片手にウンウンとうなずきながらそう言った。　　する
と……。

「すつご〜い！ 本当に家が海の上に浮いてる〜！」

「ふ〜ん……あれがツバサとナギサの拠点となる村ニヤのか……
けっこういい村だニヤ〜。」

そう言つて望遠鏡を持った少女とアイルーが甲板に出て来た。

「おい！なんでお前が他人事みたいに言ってるんだよ。ついて来たからからには、お前もこの村に住むんだぞ！……はあ、なんでお前もついて来たかな〜……。」

少年が頬を掻き、苦笑いを浮かべながら言つと……。

「ニヤ、ニヤんだと〜！　せつかくツバサ達を心配してついて来てやったのに、なんて言い草ニヤ〜！」　　と、アイルーが顔を真っ赤にしながら、毛を逆立て怒ってる。

今にも少年に飛び掛かりそうだ。

「スト〜プ！　ツバサもエドガーも喧嘩しない！　まったく……エドガーはツバサが、照れ隠しで言ってるのも分からないの？」

「その位僕だつて分かるけど、さすがにあれは言いすぎニヤ〜！」

「まあ、確かにそうだけど……。」

「つて、二人してなに話てるんだよ！　つか、俺が悪い事になつてないか!？」

少年が危険な気配を感じて、慌てて言い返した。

「いや、あれはツバサが悪いでしょ……。」

「そのとおり！ ニヤ！」
どうやら二人の意見を覆す事はできないようだ。
「いやいや！俺は悪くないって〜！」
と、少年の叫びが木魂した。

少年は海のような深い青髪に、森林の様に深い翠眼。髪質は柔らかだが、クセ毛なのか後ろ髪が少しハネている。その隣に居る少女は、髪は少しピンク掛かった紅いポニーテール、瞳は澄んだ大空のような蒼。しかし二人の服装……いや、姿は普通の洋服ではなかった。

二人の姿は、鉄製の鎧の所々に毛皮や鱗などで装飾された物、ハンターシリーズと呼ばれる防具だ！
そう、二人はハンターなのだ！

ハンターとは、人々の脅威となる生物……モンスターを倒す事で生計を立てている人達の事だ。人々がハンターになる理由は様々だ。富や名声が欲しい者、純粹に人々を助けたい者、武器や防具を集める事に生きがいを感じる者……など、様々だ。

「……にしてもナギサ、お前いくら望遠鏡使ったからって、よくあんな遠くの村の様子がわかるな〜？……エドガーはアイルーだからいいとして。」

そう言った少年、名前はツバサ・ブルーソウル。17歳だ。

「え〜？ こんなの大した事ないよ〜。だってあたしガンナーだし。」

ツバサの問いかけに答えた少女の名前は、ナギサ・チュリーハート。同じく17歳だ。

そこに……。

「でもナギサはすごいニヤ！ 人間にしては視力がかなりいいニヤ。」

「そう言ったのはアイルーのエドガー。」

アイルーとは、モンスターの一種で、二足歩行する人間の子供ほどの大きさのネコだ！

モンスターではあるが、知能が高く人語を解するので、人間と共存し助け合う存在だ！ ……中には自分達本来の暮らしがいと、自然界で暮らしている者も居るが……。

「ありがと、エドガー。」

と、ナギサが嬉しそうに言った。

「まあ、ナギサは視力だけはいいからな……。」
ツバサが少し頬を赤くしながら言う……。

「あ〜〜！！ ひつど〜い！！ それじゃあ、あたしが視力以外いいとこなしの女だって言うの〜〜！！」

今度はナギサが怒り出した。

「まあまあ、今のもツバサの照れ隠しだニヤ……、あんまり怒らないニヤ。」

と、エドガーがナギサをなだめ始めた。 ……さつきとは逆の光景だ。

「う〜……わかってるけど、今のひどくない！」

「まあ、それは僕も分かるけど……」
エドガーも追従する。

「………（やばい！危険な気配がする………なにか話題になりそうなもの………お、）………な、なあ。そろそろ村に着くぞ！………」

「あ、ほんとだ！ これからはここがあたし達の故郷になるのか〜。」

ツバサ！ いっしょにがんばる！」

「………あ、ああ………（ふう………なんとか気をそらせたか………）」
こんな感じの一向が、今、ツヴァイ村にやって来た……。

00・オープニング（後書き）

いかがでしたか？ 個人的にはうまく書けたと思うんですが…

…。

だめですかねえ？

物語はまだまだ始まったばかりですので、これからがんばらせていただきます！

評価・感想などありましたら、どしどしお寄せ下さい！

あ！荒しやめてください。 たぶん凹むので……。

01・村、到着！（前書き）

こんにちは……。

はじめに一言言っておきます………すいません………。

この謝罪が何にたいしてかは、後書きをお読みください………。
それでは、「01・村、到着」が始まります！

01・村、到着！

どこまでも続く、広大な大海原。

そこに小さな島、そして小さな村があった……。

村の名前はツヴァイ村……海の上の小さな村だ！

その村の港に、一隻の船が入港してきた。結構大きな船だ！

「ツヴァイ村到着。お降りの方はお早めに。」

船内スピーカーから、気だるそうな男の声が響いた。声は船長の声なのだが……やる気がなさそうなのは、たぶん、ここに降りる予定の客が三人……いや、二人と一匹だけなので、正直面倒くさいのだろう。

「……おい！急げ！たぶん、船長の機嫌が悪いのは、俺達のせいだ！」

そう言つて少年……ツバサは幼馴染の少女……ナギサを急かしながら、自分の荷物を持ち上げる。

「ちよつとまってよ……あれ？あたしの武器がない！あれ……？？」

「……ちよつと待て……じゃあ、お前の背中にあるそれは何だ？」
そう言つて呆れ顔のツバサは、今にも泣き出しそうなナギサの背負っている物を指刺す。

それを見て、ナギサは慌てて自分の背中を見た。

「あ！あつた〜！あたしのハンターボウ2！」

「ハア……お前どんだけドジなんだよ……。どうやってそんな大ドジ踏めるんだ。俺に教えてくれ……。」
そう言つて嘆くようにナギサを見る

「えつと……あの……。アハ、アハハハ……。」「
と、苦笑いを浮かべ、明後日の方を見るナギサ。
すると……。」

「なに二人でイチャついてるニヤ〜！時間ないニヤ〜！急ぐニ

ヤー！」

と、エドガーが急かす。

「「イチャついてなんかねえ〜！」

ないって〜！」

ふたりの絶叫が重なる。

「今はそんなのどうでもいいニヤー！ 早くするニヤー！」

そう言つて3人はやっと船を降りた！

時間は数分さかのぼる。

ツヴァイ村の港には、村人のほとんどが集まっていた。 まあ、

ほとんどといつても、三十人やそこらなのだが……。

このような事態になつてるのはわけがある。

この村にハンターが来るからだ！

ハンターはモンスターを狩る。 そうする事で人々の脅威なくすのだ

普通、大きな街ならともかく、こんな僻地にはハンターはあまり来ない。

このような僻地には、ハンター用の物資が十分でなかったり、狩場での動きなどが確立されていない。

ハンターは職業である。 誰だつてそんな危険な場所で仕事はしたくない。

「いや〜……。 とうとう新しいハンターさんが、うちの村にくるのか〜。 楽しみですなえ村長。」

村人の一人がそう言った。

「ああ、そうだな。 本当に楽しみだ。 特に今回来る二人は、この辺りでは見たこともないような武器を使つらしいからな〜。 武器の名前は確か……えつと、シャルナ！ なんだつたかなあ？」

そう言つのは少し変わった姿の青年だ。 彼は竜人族だ！

竜人族と言つるのは人間にしているが、異国風の服に身を包み、大きな鼻とがった耳を持った、人間より遥かに優れた技術を持った種

族だ。

「今日来る二人は確か……双剣と弓だったはずだよ。村長！」
そう言ったのは、煤だらけの服を着て鉄製の小さなハンマーを持った、気の強そうな顔の女性だった。

「そうだった、そうだった。しかしシャルナ、その二人はお前と同じ、ドンドルマ出身らしいが……。やっぱりお前も楽しみだろ！」

「まあね。もしかしたら、知ってる奴かもしれないし……。」

「そうか……。」

と、村に楽しげな雰囲気の流れる……。

「……………」

「……………」

「……………」

「遅いな、船はもう着いてるのに、なかなか出てこないな……。」
村長が心配そうに言った。

「ほんとに、来るんですよねえ……村長……。」
村人が不安そうに聞いてくる。

「……来るはずなんだが……遅いなあ……。」
今度は不安な雰囲気村に流れた……。
すると……。

「急げ……!!！」

「ニヤ……!!！」

「ま……!!！」

と、いう声が出て、少年と少女とアイルーが、船から降りてきた。彼らが着ているものが、防具である事を確認し、村人達から安堵の息が漏れた。

「ようこそ！ツヴァイ村へ！君達が新しくこの村にきてくれる予定のハンターだね。」

村長が聞くと、

「はい……!!！」

と、元気な返事が返ってきた。

（ふう）……。一瞬本気で来ないかと思った……。
村長は安堵した。

01・村、到着！（後書き）

と、言う訳で後書きですが……すいません。

実質第二話なのに、まだ村に着いただけです……。

当初の予定では、依頼を受注する所まで行く予定だったんですが……話を転がすうちに気がついたら、ここまでしか進みませんでした……。

これからもがんばって書きますので、どうか応援してください！
コメントも募集してしますので、どしどしお寄せ下さい！

02・ツヴァイ村(前書き)

すこし遅れてすみません……。

本当は今日のお昼ごろには投稿するつもりだったのに……。

僕は元々パソコンが苦手で、文字を打つのも、ものすく〜く〜く遅いんですよ。

こんな駄目作家ですが、どうか見捨てないでください！

お願いします！！

それでは「02・ツヴァイ村」スタートです！

02・ツヴァイ村

ここはツヴァイ村、海上にある小さな村だ。

ここには今日、新たに二人のハンターが移住してきた。

「初めまして。俺は今日からこの村のハンターになる、ツバサ・ブルーソウルだ……です。」

「あたしはナギサ・チュリーハート！ 今日から村のためにがんばりま〜す！」

と、二人のハンターはあいさつをした。

「おい、なんで普通にしゃべってるんだよ！ 打ち合わせでは敬語のはずだろ！」

ツバサが小声で注意する。

「ごめんごめん、忘れてた。……でもツバサも言えてなかったよね。」

「うっ、」

そんな風に二人は雑談している。

ザワザワ

しかし村人達は二人の様子には気づかず、二人の背中を見ながら何か話している。

「なあ、君達の背中の中はもしかして
村長が何か言おうとした。」

その時、

「い、今、ブルーソウルにチュリーハートって言ったかい!?」
村長の言葉は遮られた。 ある女性の声によって……。

「あ、ああ、そう名乗ったが……」

ツバサが少し驚きながらそう答えた。

「じゃあ、アンタらもしかして、《撃龍の風》の……」
「……!……!」

女性の言葉にツバサ達は心底驚いた。

ここではその名前は知られてないだろう、と思っていたからだ。その名前は

「ああ、《撃龍の風》は俺の両親とナギサの両親のチーム名だ。」ツバサがそう答える。

「……!……やっぱりか。いやー、まさかこの村に来てくれるのが、ブルーソウル夫妻の息子にチユリーハート夫妻の娘だとはねえ……。」

女性が「ふふふ」と笑いだした。

「おいシャルナ、今の話はなんなんだ？俺にはさっぱりわからんぞ?」

村長が女性に疑問をぶつけた。

「《撃龍の風》と言うのは、ドンドルマ最強とまで言われるハンターのチームさ、この子達はそのハンター達の子供さ。」

と、女性が言った。その言葉を聞き、村中が驚きで包まれた。

「な、なるほど……。そう言う事か……。」

「ところで村長、この人は誰なん……ですか!？」

ツバサが言いすらそうにそう聞く。

「無理して敬語を使わんでいいぞ。それと、こいつの名前はシャルナ・クリフォード、この村の工房の鍛冶職人だ。元々は、ドンドルマの工房で働いていたんだが、こっちの大陸の技術を学びに来ている。」

「なるほど、それで《撃龍の風》の名を知っていたのか……。」

ツバサが村長の言葉に納得して、ウンウンと頷く。

「ふふふ、ツバサ君にナギサちゃん、よろしくね。ドンドルマに居たから、こっちの素材での双剣や弓の造り方も、考えてるわよ。」と、シャルナがあいさつした。

「よろしく……。」

「よろしく〜!」

二人も返事を返した。

「おっと、そうだったそうだった。君達の背中にあるそれ……も

しかして、それが双剣と弓なのかい？」

村長が訪ねてくる。

「ん？ああ、これが……。 そうだ、これが俺の双剣 ツインダガー改 だ！ 荷物の中には ボーンシックル改 つつう双剣もある。」

「あたしのは、ハンターボウ？ っていう弓なの！」
そう言つて、二人はそれぞれの武器を構えた。

「おお、これが……。 他の大陸にはすごい武器があるもんだな。」

村長が感心したように頷く。

村中に歓迎の明るい雰囲気か漂う。

ただ一ヶ所を除いて……。

「酷いニヤ……。 僕をわすれてみんな楽しんでそうにして……。」
1匹のアイルーから黒いオーラのようなものが出ている……。 気がする。

「ん？ お、おわ！ エ、エドガー！？……あ！（やべ！忘れてた！）。 ……そ、村長！まだ一人紹介が終わってなかった！紹介してもいいか？」

ツバサが大慌てで村長に聞いた。

「お！そう言えば、アイルー君の紹介がまだだったな。」

村長の言葉で、村人達の視線が一斉にアイルーに向く。

そのアイルーは服を着ていた。 紺色の前掛けに紺色の半被、紺色の帽子も被っている。

この服は、板前スーツと呼ばれるものだ。

「えっへん！ 僕の名前はエドガー、ツバサの親に雇われていた、キッチンアイルーだニヤ！ 料理の腕は超一流なのニヤ！ ツヴァイ村のみなさん、よろしくなのニヤ！」

エドガーが自己紹介した。

「自分で超一流とか言うか？ 普通……。」

ツバサがその自己紹介にツツ込む。

「ニヤ……いいじゃニヤいか！ うそじゃニヤいし……。」

「いや、だからってなあ……ま、いいか。」

結局ツバサがあきらめた。

それから数時間して……。

「さて、村のみんなも戻ったし、君達の荷物も自分の家に置いてきたし、君達三人はどうする？ 今夜は君達の歓迎パーティをしようと思っっている。 長旅で疲れたるうし、家で休んでるか？」

村長がそう聞いてきた。

しかし……。

「いや、船の中にずっといて暇だったんだ。 体を動かしたいから、ちよっと狩りに行って来る。」

「ほんと大変だったよ。 三週間もずっとトレーニング以外ほとんど何もしてないし……。」

二人はものすごく疲れた顔をしながら言った。

「そうか……じゃあ、ジユデイの所に行く必要があるな…… よし

！案内しよう。」

「「ジユデイ？」」

二人は頭の上に疑問符を浮かべた。

「この村ギルド出張所の受付嬢だ。」

「「ふ……ん。」」

そう言つて四人……三人と一匹で進んで行く。

「ニヤ！！あれは……。」

エドガーが急に止まった。

「ど、どうしたのエドガー！？」

ナギサが心配そうに聞いた。

「ニヤ！？ いや、その……あ、村長さん！ あそこにいる娘は誰

かニヤ？」

エドガーは顔を赤くしながら聞いた。

「あそこにいる子?……ああ、ツミキのことか!たぶんあのメラルの事だろ? あいつはこの村の雑貨屋だ。」
村長が聞いてきた。

「ツミキちゃんっていうのニヤ、かわいい名前だニヤ……。」
エドガーが嬉しそうな顔でウンウンと頷いた。

「??? (どうしたんだ……、エドガーの奴?)」
ツバサが頭に疑問符を浮かべる。

そうこうしていると、ツミキがこちらに気づいて、笑顔を送ってきた。

「はう、ニヤ……!」

エドガーが呻き声をあげた……嬉しそうに。

「…… (あれ、エドガーこの感じ……もしかして……) エド
ガ……!がんばって捕まえなよ! フフフフ……」

ナギサが意味ありげな顔で、エドガーの肩をポンと叩いた。

「ニヤ……! 別にそんなんじゃないニヤ!」

エドガーが赤くなった顔をさらに真っ赤にする……。

「そんなのって何の事……? あたしわかんない?」

ナギサが意地の悪そうな笑みを浮かべながらそう言った。

「????? (二人とも何の話してるんだ……? わけわかんね……?)」

ツバサの頭に浮かぶ疑問符がさらに増えた。

「そんな事より依頼を受けに行くんじゃないのか?」

村長が困惑しながら聞いてきた。

「え? あ、はい! お前らもふざけてないで早く来い!」

「はい。」

「ニヤ……。」

そう言つて三人はまた、村長に着いて行った。

「ハ……イ! 私が受付嬢のジュディです! ハンターさん達、ここにちわ……!」

酒場に入ると、妙にテンションの高い少女が出迎えた。

「あんたがこの村の受付嬢か……今から行って、今日中に帰ってこれる依頼を紹介してくれ。」

ツバサがそう聞く。

「えーと、それなら……あ！この依頼はどうですか？ 孤島でモンスターのキモを取ってくる依頼です。」

「「孤島!?!」」

こうしてツバサとナギサのハンターとしての日々が始まった……。

02・ツヴァイ村（後書き）

まだ狩りに出てません！

「おい、双剣！ いつになったら戦闘シーン書くんだよ！ いいかげんしろ！」

と言う読者の声が聞こえてきそうです……（苦笑）。

ですが会話はがんばって書きました！（おいおい開き直るなよ）

一応、次回からは狩場に行く予定です。

コメントも募集中なのでどしどしお寄せ下さい。

03・モンスターのキモを手に入れる！そして……（前書き）

ついに狩場にやってきました！

いや〜……長かった。ほんとうに長かった……。

正直、狩場に行くまでにここまで掛かるMH小説もあんまりないですよねえ。

後、サブタイトル「そして……」とは一体？

かなり（狩場に来るまで）遅くなりましたが、
第3話、始まります！

03・モンスターのキモを手に入れる！そして……

ここはツヴァイ島……通称 孤島 と呼ばれる狩場だ。

ツヴァイ村のすぐ目の前にある、小さな島だ。

緑の木々が生い茂り、川が流れ、洞窟や海などもある美しい狩場だ。正直、モンスターさえ居なければ、家族や友人とキャンプなどして楽しみたいと思うほどだ。

「ツバサ！ 海だよ！ この狩場、ほんとに海があるよ！ 綺麗」

ナギサが、長いポニーテールを海風に揺らしながらそう言ってきた。「おい、そんなにはしゃぐな！ つつかよくそんな元気があるなあ。

さっきランポスみたいなモンスターと散々戦りあっただろ！ 確かに狩場に海があるのは珍しいけど……。」

ツバサ達がいた大陸の狩場は大抵、水があっても川か湖だったからだ。……まあ、二人とも実際に行った事はあまりないのだが。

「ところでさあ、そのエピソードってモンスターは何処？ はやく狩って帰ろうよ」。エドガーや村のみんなが待ってるよ！」

ナギサが急かす。

「ちよつと待って。 え〜と……海の中って書いてあるけど……どやって狩ろうか？」

時間は二時間ほど遡る……。

「「孤島!?!」」

二人の言葉が重なる。

「そうです！ 正式名称《ツヴァイ島》……この村の目の前にある狩場です！ 平地に洞窟、海など色々なフィールドがある狩場ですよ。」

受付嬢のジュディが二人の疑問に答えた。

ここはツヴァイ村の酒場……もといハンターズギルド出張所だ。
ハンターの殆どはハンターズギルドに所属している。

普通、ハンターに対する依頼は、このような辺境の村に対する物も含めて、すべてハンターズギルドが統括している。

そのためハンターは、ツバサ達のような村付きのハンターも、ギルドを通じて依頼を受ける。

そして、ハンターズギルドは基本的に酒場にある。

これは、依頼を達成したハンターが打ち上げなどをする時のための配慮らしい。

「ふん……海ねえ……。」

ツバサは少し考えた。

「依頼の品であるモンスターのキモは、エピオスと言うモンスターから取れます。」

「エピオス??」

また、声が重なる。

「はい、エピオスです！ 水中にいる、おとなしい草食モンスターです。ちなみにこの依頼のモンスターのキモは、今日の歓迎会に出す予定の物です。村にも蓄えがありますが、新鮮な方がおいしいですよ。」

ジユデイがそう答えた。

「そうか……なら行つといた方がいいな。ナギサ、ちょっと行って狩ってくるか！」

「うん！ そうだね、やっぱりモンスターの素材は、新鮮な方がいいもんね。」

二人の意見が纏まった。

どうやら、この依頼を受けるようだ。

そこに……。

「しかしだいじょうぶか？ はじめての狩場と言うのもあるが、君達は水中戦はやった事あるのか？」

それまで事の成り行きを見守っていた村長が、急に話に割って入っ

てきた。

「水中戦はやった事ないけど……あたし達、泳ぎは得意だし、たぶん大丈夫だと思うよ。」

ナギサはそう答えた。

「そうか……まあ本人達がそう言うなら止めはしない。がんばって来いよ。」

村長が納得し、激励の言葉をかけた。

「じゃあ、あとはエドガーがどうするかだけ……。」

ツバサがエドガーの方を向きながらそう言った。

「ニヤ！ 僕はここに残って料理を作るのを手伝うニヤ！ 船の中では料理できなかったから、こいつを使いたいニヤ。」

そう言つて、エドガーはシヤランと、M.Y包丁を取り出した。

船の中では、暇さえあれば研いでいたので、その刃はピカピカだ。

「そうか、お前も頑張れよ。」

ツバサがエドガーの頭を撫でる。

「それでは話もまとまったようですし。狩りに行って来て下さい！

では、生きて帰ってきてくださいよ〜！」

シヤルナが満面の笑みでそう言ってきた。

「……おいおい！！」「……」

それから狩場に来て、モンスターと戦いながらどうにかここまでできた。

「……で、どうするんだナギサ。確かに俺達は泳ぎに自信はある。

だが、水中で武器を振るう事ができるかどうかは別の話だろ。」

ツバサはナギサに疑問を問いかけた。

「いや〜、つい勢いで……でも、なんとかなるんじゃない？」

ナギサはアハハハと苦笑した。

「……ハア……。やっぱりか……。まあ、なんとかするしかないか

……。とりあえず水の中に入るか。」

「うん。」

そう言つて二人は海に飛び込んだ。

「にしてもこのマスクすげーよなあ。水中でも息ができるうえに、会話もできるなんてなあ。」

「でも、息はずつと続く訳じゃないから気を付けなきゃ。」
海の中で二人の会話が聞こえてきた。

二人は顔には、病院の酸素マスクのような物が付いている。

これは エラマスク というアイテムだ
口と鼻を覆うマスク状の物だ。

このマスクの中には エラチューブ草 という植物が入っていて、その植物が魚のエラのような作用をして、水中の酸素取り込む。ただ、限界もあり、数十分ごとに空気中の酸素を取り込まなくてはならない。

「ところでエピオスは……お！いた！ 依頼書に書いてあつた絵にそっくりな奴だ！ たぶんあいつだ。」

ツバサ達の前には、小さな首長竜のようなモンスターが五匹いた。

ツバサは泳ぐスピードを上げ、一気に近づいた。

そしてツバサは背中にある ツインダガ 改 を抜き放つた！

「おりゃ！」

ツバサが一番手近にいたエピオスを切りつける。

「クオオオオオオ！」

エピオスが痛みで声をあげる。

「よし！ あたしも！」

そう言つてナギサは ハンターボウ？ を展開した。

「シユート！」

ナギサが矢を放つた。

放つた矢がツバサが狙っている奴ではないエピオスに刺さる。

「クオオオオオオ？」

離れた場所からの一撃に、エピオスが驚きの声をあげる。

「おりゃりゃりゃりゃりゃー！！！」

「ハッ！ヤッ！ハッ！シユート！！」

二人の連撃を受け、エピオス達は成す術なく倒れた。

「さて、じゃあ早速剥ぎ取るうか。」

そう言つて二人はエピオスから剥ぎ取りをはじめた。

「フウ……大体剥いだな。必要数以上取れたな。そろそろ帰るか。」

「うん！そうしょ！それにしてもいっぱい取れたね。」

そう言いながら二人は陸に上がった。

「……あれ？ ツ、ツバサ！！ 何か近づいて来るよ！！」

ナギサがそう言つと海の中から巨大な影が現れた！

「グオオオオオオ！！！」

二人は一体どうなるのか？

03・モンスターのキモを手に入れる！そして……（後書き）

すみません……。

戦闘描写あんまり書けませんでした……。

さて、水中設定ですが……どうでしょうか？

水中で話せない、小説として困るし……。

かと言って、普通に話したら、読者様から突っ込みが来そうだし……。

なのでこうさせて頂きました！

ちなみに分かっているとは思いますが、 エラマスク と エラチ

ユーブ草 は、板仕方なく登場した、オリジナルアイテムです。

そして最後に出てきた影は……フッフ。

それでは、まだまだコメント募集中なので、どしどしお寄せ下さい！
待ってます！

04・イナズマ登場！！だぜ！！（前書き）

どうも、風の双剣使いです！

みなさま、いかがお過ごしでしょうか？

今回はある先生から、「一話一話が短め」と言つ指摘を受けましたので、

今までより長めに書いてみました！

どうでしょう？

後、前回の話で書き忘れたんですけど、ナギサが謎のモンスターに気づくシーン……。

あれはナギサに《自動マーキング》のスキルがついているからなんです。まあ、別に言わなくてもよかったですけど、一応言つところかな

くと思ひまして。

それと、サブタイトルで見て貰った通り、新キャラがでます！

それでは第五話、始まります！

04・イナズマ登場！！だぜ！！

そいつは蒼い鱗を持った、見た事のないモンスターだった……。
「いったい何なんだ？……このモンスターは……。」

まず目につくのは、長い首に長い尻尾。
背中には棘の様な物があり、なにより変わっているのは翼が無く、
代わりに前足が有るのだ。

ツバサはそのモンスターを見た時、古龍なのでは？と、考えた。

ツバサ達は一月ほど前まで、ドンドルマのハンター養成学校に
いた。

その頃のツバサは、モンスターの生態などを調べるのが好きで、
よく図書室に行っていた。

その時たまたま手に取った本に、古龍の事が記されていた。

【古龍とは、太古の昔からこの世界でひっそりと暮らしていて、そ
の生態について分かっていない部分が多く、天災級の力を持つモン
スターの事をそう呼ぶ。特徴は、
・飛竜のような翼を持ち、そ
の上四本の足を持つ
・体に風を纏ったり、姿を消す事ができるな
どの特殊能力がある
・他のモンスターに類を見ないほどの巨体を
誇る、などである。しかし上記の事柄には例外もある。】
そう記されていた。

その文章から推測すると、このモンスターは古龍である可能性が
高い、とツバサは考えた。

そして、もしその推測が正しければ、ツバサ達はほぼ確実にただで
は済まないと言う事だ。

「ナギサ！！ 逃げるぞ！！ たぶんこいつは古龍だ！ 俺達じゃ
……すぐに殺される！！」

「死」……それは以外と近くに存在する。

「えっ！？ 古龍！？ う、うん、わかった。」

二人は全速力で走った。

しかし、

「グウウウウ、グギヤアアアア!!」

謎のモンスターが、口から青白い光を飛ばしてきた。

「え? きゃああああ!!」

発光体がナギサを襲う。

その光景を見てツバサが足を止める。

「ナギサ!? おい! ナギサ! ナギサーー!!!」

ツバサの絶叫が響き渡る。

「……ふう、あぶなかつた」

どうやらギリギリで避けていたようだ。

「おい、大丈夫か? ケガとかないか?」

ツバサが心配そうに聞いてきた。

「う、うん、大丈夫。 てか今の一体?」

「そ、そうか、大丈夫か……。 あと、今のはたぶん電気ブレスだ。

フルフルとかが使うつて習っただろ?」

ナギサの無事に安堵しながらそう答えた。

「えつと……あ、ああ……う、うん。 お、覚えてるよ!」

ナギサがシドロモドロしながらそう言った。

「お前なあゝ……つて、やばい! またブレスだ!」

謎のモンスターがブレスの溜を始めた。

「グウウウ……。」

「ヤバイヤバイヤバイヤバイ!!」

「死ぬ死ぬ死ぬ!!」

二人が必至で逃げようとした。

「グギヤアア!!」

謎のモンスターがブレスを放つために口を開けた。

その時、

「目を閉じる!!」

と、誰かの声が聞こえてきた。

「えつ!?」

二人は突然の事に驚いたが、声の通り目を閉じた。すると、目蓋の向こうで光が弾けた。

「グ、グギャアアアアア!？」

その光に目を妬かれた謎のモンスターは苦しみ始めた。その光の正体は閃光玉だ。

閃光玉とは、強烈な光を放ち、モンスターの視覚を潰す効果があるアイテムだ。

「助太刀に來たぜ!!」

そう言つて二人の前に一人のハンターが現れた。

ハンターだと分かつたのは、土色の甲殻で出来た防具を纏つていたからだ。

「あ、あなたいつたい?……。」

ナギサが疑問を口にする。

「話は後だぜ! 奴は閃光玉を使つても暴れまわる。だから早く逃げないと巻き込まれるぜ!」

そう言うがいなや、謎のモンスターは誰もいない所に向かつて突進しだした。

謎のモンスターの突進が当たつた岩壁に、大きなヒビが入る。

「ゴク……。」

二人はその光景に息を飲んだ。

「わかつた。今すぐ逃げよう。」

「よし! じゃあついて来い! 話それからだぜ!」

二人とそのハンターは急いでその場から離れた。

それからしばらくして……。

三人は現在、細い小川が流れる河原があるエリアにいた。

ハチミツやキノコなどがあり、ベースキャンプのすぐ近くにあるエリアだ。

アプトノスが草を食べている様子を見ると、現在このエリアは安全なようだ。

「ふう〜……ここまで来れば安心だぜ。 奴はここまでは来ない。」

土色の防具を纏ったハンターがそう言った。

「ハア…ハア…そうか……。 まあ、この様子なら危険はないな…。」

息も耐え絶えの二人に対して、このハンターは殆んど息は上がっていない。

「フウ……さて、そろそろ話して貰おうか。 お前は誰だ？ なぜ俺達を助けた？ そしてあのモンスターは一体何なんだ！」

ツバサが自分の疑問をすべてぶつけた。

「おいおい、そんなに一辺に聞くなよ……じゃあ、まずはオレが誰かだけど……。」

そう言つて、そのハンターは兜をはずした。

その下から現れた顔は…鼻筋は通り、髪はさらさらした長くもなく短くもない金髪、少し吊り上がった力強い瞳は炎の様に真っ赤だ。

「オレの名前はイナズマ！ イナズマ・ライトニング、ツヴァイ村のハンターだぜ！」

イナズマと名乗ったハンターは、そう言いながら笑顔で親指を立てた。

「なるほど、お前が村長の言っていたもう一人ハンターか……なら俺達を助けたのも納得いく。 同じ村の仲間を助けるのは当然だからな……。」

実はツバサ達はツヴァイ村にもう一人、ハンターがいる事を聞いていた。

しかし、ここで会うとは思ってなかったのですっかり忘れていた。

「まあ、そう言うこつた。 別に村の奴じゃなくても助けたけどな！」

そう言つてイナズマは「ニシシ」と笑った。

「ところで今のアイツ一体何なの？ ツバサは古龍とか言ってたけど……。」

そこにナギサが話に割って入ってきた。

「古龍！？ いやいや、そんなんじゃないって！」

イナズマは驚いた様に否定してきた。

「？……じゃあイツー体何なんだ？ 四本足の竜型モンスターは古龍しか居ないはずだろ？」

ツバサの疑問はもつともだった……ツバサ達のいた大陸では！

「……ハア……そう言えばお前ら違う大陸からきたんだっけ？ アイツの名前はラギアクルス……海竜種に属するモンスターだ！」

「海竜種？」

「ラギアクルス？」

二人はそれぞれ疑問を口にした。

「ああ、ラギアクルスは背中に発電器官を持つモンスターで電気を使うんだぜ！」

「だぜ！ って……まあいいけど……。ところで海竜種って何だ？ 初めて聞いたけど……。」

ツバサが質問する。

「ん！ ああ、海竜種な……奴らは海や川みたいな水の中に生息するモンスターだ！ そんでさっきの話だけど、四本足のモンスターはこつちの大陸では結構いるぜ。」

イナズマはそう答えた。

「ふ〜ん……例えばなんだ？」

「例えば……オレが今着ているこれは ボロスシリーズ つつう防具なんだけど、この防具の元になったモンスター……ボルボロスは獣竜種つつうのに分類されてるモンスターだぜ！」

イナズマはそう言う。

「獣竜種……それも四足歩行するモンスターなのか？」

ツバサが聞く。

「ああ、正確には四本足で二足歩行なんだけどな！」

イナズマがそう答えた。

「ふ〜ん……。」

二人は今の話をしつかりと肝に命じた。

「ツバサ、とここでさ、腹減らねえ。」
イナズマがそう言った。

「どうやらツバサ達の自己紹介はもう済んだようだ。」

「うん……じゃあ肉でも焼くか！」
ツバサがそう答えた。

「やった」 ツバサが焼く肉は絶品だからね！ 肉焼きだけは
エドガーでも勝てないからねえ。」
ナギサが楽しそうに言った。

「エドガーって料理作るアイルーだろ！ アイルーの一流が作る料理は、人間の一流料理人の料理よりもうまいって聞くけど……それより上って相当すごいんじゃないか？」

イナズマが驚いた様に言った。
「うん！ほんとにすごいよ！ だって普通の肉焼きセットでもこんがり肉Gが作れるんだよ！」

それを聞いた瞬間、イナズマの態度が変わった。
「こ、ここに、こんがり肉G……！！ マ、マジで！？ 話には聞いた事あるけど、食った事はねえぜ！！ ってか、今も作れるか……！」

イナズマは興奮気味にそう聞いた。

「えっ！！ ……あ、ああ、作れるが…… っつかそんなに珍しいか？ これ使えば簡単に作れるだろ。」

そう言っつてツバサは金属製の棒の束を出した。

「？ それは……肉焼きセットか？ でも色が違うぜ……。」
イナズマの言うとおり普通、肉焼きセットは赤色の棒だ、しかし目の前にあるのはピンク色だ。

「ん？ これか？ これは 高級肉焼きセット だ。」
ツバサは肉焼きセットを組み立てながらそう答えた。

「へえ……これが……このあたりでは見た事ねーな。」

「ふ〜んそうか……よし、できた！　じゃあ焼くぞ！」
そう言つてツバサは肉を焼き始めた。

「タン！タタ〜、タタタ　タン！タタ〜、タタタ　タタタ！
タタタ！　タタタ！　タタタ！　タンタンタタタン！　…………ウル
トラ上手に焼きました〜」

ツバサが【肉焼きの歌】を口ずさみながら肉を焼いた。
普通のハンターは歌わないし、ツバサも歌わなくても作れるが、ツ
バサは歌っていた。

ツバサ曰く、「歌つた方が気分が乗る。」だそうだ。

「お〜〜！　それがこんがり肉Gか〜…………見た目は普通のと変わら
ね〜けど、どことなくうまそう感じがするぜ！」

イナズマがヨダレを垂らしながらそう言った。

「おい！　ヨダレ！ヨダレ！　今やるから少し落ち着け！」

ツバサがそう言いながら、イナズマにこんがり肉Gを手渡した。

「いったただつきま〜す！！……………う、うんめえ〜！！
何コレ！？　これマジで焼いただけなの！？　めちやくちやうめ〜
〜！！」

一口食べた瞬間、ジュワ〜と肉汁が溢れ出した。

そしてその旨さにイナズマは絶叫した。

そのまま食べ進めて行き、こんがり肉Gは骨だけになった。

「いや〜…………うまかつた〜！！　なあ！　もう一個作ってくれねえ〜
……………」

そう言ったイナズマの前で肉を食べていたツバサは少し怪訝な顔を
した。

イナズマが食べている間にもう二つ肉を焼き、一つをナギサに渡し、
もう一つは自分で食べている。

相変わらず、作る時には肉焼きの歌を歌っていた。

「いや、ちょっと待て！　今日はパーティーがあるんだから、あん
まり食べない方がいいんじゃないか？」

「そうだよ！　こんがり肉Gもおいしいけど、やっぱりエドガーの

料理の方がおいしいし……。」

ツバサ達はそう言った。

「えっ？マジ！？ 料理アイルーの作ったのが食べるのか！？ だったら話は別だぜ！！ 急いで帰ろうぜ！！」

そう言っつてイナズマは、まだ食べてる二人を置いて走り出した。

「いや待て！ 俺達はまだ食ってる！」

「そっだよ！ て言うか置いてかないで〜」

二人の声が狩場に木魂した。

04・イナズマ登場！！だぜ！！（後書き）

どうでしょうか？

新キャラのイナズマ・ライトニングです！

僕的には明るく元気で、ツバサ達のアニキ分って感じにしようか思っているのですが……読者の皆様にどう映りましたか？

後、ツバサの地味な特技登場！

僕自身、肉焼きや肉焼きの歌はかなり好きで、こんがり肉はP2Gでも3でも百個以上持ってます！

では、次回は村に戻って歓迎パーティーのシーンから書くこうと思ってるので楽しみにして待っててください。

……え？ そんなのより戦闘シーン書けって!？

……うん?……がんばってみます……。

05・チーム結成!! (前書き)

お待たせしました!!

モンスターハンター〜大海の剣〜最新話です!

ところで皆様、今までタイトルの 剣 はなんと読んでいましたか?

作者的には ツルギ と読んで貰おうと思っっているんですが……

けん って読んでいた人も多いですよ……

でも、今度からは ツルギ と読んでください!

それでは、最新第5話始まります!!

05・チーム結成！！

肉を食べ終わった3人は、その足ですぐに村へ戻った。村は島のすぐ真横にあるので、一時間もしない内に着いた。

「はあ……疲れた……やっと村か……。」

ツバサ汗を拭いながらそう言った。

「ほんと疲れた……。」

ナギサも村に着いた途端へなへたと座り込んだ。

「ツバサもナギサも大丈夫か？ さすがに村に着いて最初の狩りで、いきなりラギアは大変だったな！」

イナズマはそう言っつて屈託のない笑みを浮かべる。

「……………」

ツバサ達は冷やややかな顔をイナズマに向ける。

「なっ、なんだよ！ オレ、何かまずい事言っただか！？」

二人の視線を見て焦るイナズマ。

「まあ、確かにそれもあるが……。」

「それ以上にイナズマさんが全速力で走って行くからでしょ……？」
実は三人はさつきまで全力で走ってきた。

いや、ツバサとナギサは全力で、イナズマは少し急いだけなのだが……。

ツバサ達とイナズマでは、走力にも体力にも差が有る。

「えっと……その……あつ！村長！ おゝい！！」

イナズマが追い詰められている時、幸か不幸か村長がやって来た。

「おお！ イナズマじゃないか！ どうしたんだ？ 帰ってくるのは明日の予定だったろ！？」

村長がそう聞いた。

「いや、助かりました！……じゃなくて、オレがなんで早かったかっすよね！ 今回はガルベルト熱帯林にルドロス狩りしに行っただんすけど、思ったよりルドロスの数が少なかったんす。それで十

五匹位狩ってこれ以上は狩らない方がいいなって思ったんスよ！
だから早かったんス！」

イナズマがそう言った。

ハンターはモンスターは好き勝手に狩ってはいけない。

ハンターが好き勝手にモンスターを狩れば、生態系のバランスが崩れる。

そのためハンターはモンスターを必要以上狩らないのだ。

「そうか……なんでツバサ君達と一緒にいるのかは知らないが、とりあえず酒場に行こうか。村のみんなも待っている。二人と一緒にいる経緯は酒場に行きながら聞こう。」

「……って訳なんスよ！ ホント大変だった……。」

「ほう……そんな事があったのか！ 君達も大変だったな。」

イナズマは村長にこれまでの事を話しているようだ。

その後ろで、ツバサ達も何か話している。

「イナズマ急に口調が変わったよな。」

「うん、たぶん目上の人には、ああ言う風に話すようにしてるんじゃない？」

「それにしても変わり過ぎだろ。口癖まで変ってるぞ！」

そんな話をしている内に一向は酒場に着いた。

酒場に入ると料理のおいしそうな香りと、酒が飲めない者には少々辛いアルコールの匂いなどがした。

どうやら歓迎パーティーは、主役も来てないのにすでに始まっているようだ。

これで 歓迎 パーティーと言うのだろうか？……否、言わないだろう。

そこに……、

「ニヤッ！ ツバサにナギサ！ お帰りニヤ！ キモはどうだったニヤ？」

エドガーがそう言いながらツバサの顔に跳びついた。

「ただいま、エドガー。 モンスターのキモはた〜くさん採れたよ

ね！ツバサ」

ナギサが嬉しそうに、そう答えツバサの方を見た。

しかし……、

「ふえ！ざぬえ〜！！ ふぁりやふふぁふへ〜！！！」

（ね！じゃね〜！！ はやくはずせ〜！！）

と、ツバサが真っ赤な顔で言ってきた。

どうやらエドガーが付いているせいで息がしずらいようだ。

「ニヤ！？ ご、ごめんニヤ……。」

そう言つてエドガーが顔から降りた。

「……フウ……さて、じゃあ精算に行くか。」

ツバサがそう言つと、

「その心配はないニヤ！ キモは今から調理するから僕に渡すニヤ。

ジュディさんもその方がいいて言つてたニヤ！」

エドガーがそう言つた。

「そうなの？ じゃあ……はい！ 予定数は3個だつたけど5個採

つて来たよ」

そう言つてナギサがモンスターのキモを取り出した。

「わかつたニヤ！ 腕によりを掛けておいしい料理を作るニヤ！

それまでそこにある、今まで作った料理を食べて待つてるニヤ！」

そう言つてエドガーは厨房に戻つて行つた。

「さて、じゃあ早速座つて何かつまむか。」

そう言いながら、ツバサ達は近くの空いている席に座る。

ちなみに、イナズマと村長とは店に入った時に別れた。

目の前には数々の料理が並べられていた。

ガブリブロースのステーキオニオニオン添え・大巻貝の猛牛バター

炒め・オンプウオのポピ酒蒸し・ワカメクラゲの酢の物・くの字エ

ビと激辛ニンジンの子リソース・骨タコとふたごキノコのスープな

ど、様々だ。

料理を食べていると、

「こんにちは！ ツバサさん、ナギサさん。」
透き通るような声が聞こえてきた。

声のした方を向くと、一匹のメラルーがいた。

メラルーとは、アイルーの仲間の黒い毛の猫のようなモンスターだ。アイルーと違い手癖が悪く、狩場で会うと道具盗むなどやっかいな相手だ。

ツバサ達はこのメラルー見覚えがあった。

「ああ、あなたは確か雑貨屋のツミキちゃん！」

ナギサが思い出した様にそう言った。

「私の事知っていたんですか？ では、改めて……私はツミキと申します。今は給仕の仕事を手伝っていますが、ふだんは雑貨屋で色々な物を売っています。お二人の使うようなアイテムも売っているのでご利用の時はよろしくお願いします！」

ツミキはそう言うのと深々とおじぎをした。

「いやいや、そんなに礼儀正しくしなくても……もうちょっと楽に話してくれないか？」

ツバサがオドオドしながらそう言う。

「す、すみません！ でも私、昔からこんな風にしゃべっていたので……。」

ツミキがもう一度おじぎをした。

「ちょっと待って、それは分かったから謝らないでくれ！ ちょっと気まずいから。」

ツバサがさらに焦る。

「そ、そうですね……あ！ そうだ！ お二人は何を飲みますか？ 私は元々それを聞きに来たんです。」

そう言うてメニューと思しき物を渡してきた。

「ありがとね え〜と……じゃあ、あたし達はこのハチミツ入り塩ミルクで！」

ナギサがそう答えた。

「お酒じゃなくていいんですか!? 皆さんはモガビールなどを飲んでいらっしやいますか……。」

ツミキが不思議そうに尋ねてきた。

「ああ! いいのいいの。 あたし達お酒苦手だから。」

そんな言う事なのだ。

「かしこまりました! では少々お待ちください。」

そう言うツミキは厨房に向かった。

「……ツミキちゃん、いい娘ね。 エドガーとうまくいくといいなあ。」

ナギサがしみじみとそう言った。

「まあ、確かに……。 (猫仲間同士仲良くしてほしいもんな!) どうやらツバサは勘違いしているようだ。」

「おまたせしたのニヤ〜! 今回のメイン料理、エピオスのキモのパニーズ酒蒸しなのニヤ〜!」

そう言うエドガーが料理の乗った皿を持ってきた。

ちなみにツバサ達はさっきツミキが持ってきてくれたハチミツ入り塩ミルクを飲んでいた。

「おお! できたか! じゃあ早速……。」

ツバサが手を近づけると……。

「スト プー! ちょっと待つニヤ! 料理は逃げないから席に座ってるニヤ! まったく…… ツバサがつまみ食いしようとするのは昔から変わってないニヤ。」

エドガーがそう言って皿を逃がす。

「悪い悪い!」

ツバサが謝る。

そこに……、

「よっ! ツバサ、ナギサ! 話があるから来たぜ! ……ん? おお! うまそうなモン発見! じゃあ早速、いただきま〜す!」

そう言つてイナズマがキモの酒蒸しをスリ盗つていった。

「ニヤツ！ ニヤにするニヤ！ て言ーかあんだ誰ニヤー!?」

エドガーが怒りながらそう聞くと、

「ん？ オレか？ オレはイナズマ・ライトニング！ これからツバサ達とチームを組むハンターだぜ！」

イナズマはそう答えた。

「ニヤツ!?」

「へっ??」

「ハア!?」

突然の事にツバサ達は驚いた。

「「「」

なの!?

い、一体どー言う事だ!?

ニヤ!?」「」

三人の絶叫が重なる。

「んあ？ どう言う事つて……言つた通りの意味だけど……。」

イナズマが不思議そうな顔をした。

「いや、急にそんな事言われたから……っつか何でいきなりそんな話が出てきたんだ!?」

ツバサがそう聞いた。

「さっきまで村長と相談しててな、そんな時に決まった。」

「はあ??」

ツバサは困惑したような顔になった。
すると、

「君達、今日ラギアクルスとあつたんだってな。今後もし、そんな風になつたら君達じゃ対処できんだらう。だからイナズマとチームを組んでもらう事にした。」

そう言つて近づいてきたのは村長だった。

「ま、まあいいけど……。 なっ！ナギサ！」

「う、うん、いいよ……。 イナズマがいい人なのは知っているし。」

「

二人はどこかぎこちない感じで答えた。

「よし！ じゃあ決まりだぜ！ これからよろしくな！！」

イナズマがそう言っただけで二人に握手を求めた。

「お、おう！ よろしくな……。」

「よ、よろしくね……。」

ツバサ達もぎこちないながらも握手に応じた。

こうして、三人はチームを組んだ。

05・チーム結成！！（後書き）

いかがでしたか？

今回は料理を出してみました。

正直、料理を考えるのにけっこう時間が掛かってしまいました。

そして、雑貨屋メラルーのツミキちゃん……どうでしょう？

僕的にはかなりがんばってキャラを考えたんですが……

まあ、とりあえず次回は狩りに行く予定なので、

楽しみにしてください！！

06・孤島にて、（前書き）

皆さん！

このサイトのリニューアルに伴い、テンションが下がっている作者です。

まず……遅れてすいません！

リニューアルで戸惑ったり、文化祭の練習（部活）などで思った様に執筆が進まず……

この様な事になりました。

その代わり、戦闘描写を本格的に書きました。

それでは、第6話始まります！

06・孤島にて、

チーム結成から一週間……ツバサ達はツヴァイ島に来ていた。

「ベースキャンプはこんな感じで……よし！できたぜ！ お〜い！
ベースキャンプ完成したぜ〜！」

イナズマが大声でそう言った。

「っるせ〜……。今、そんな大声出さなくてもいいだろ。遠
くにいる訳でもないし……。」

ツバサが耳を押さえながらそう答えた。

「まあ、テンションが上がるのはわからないでもないけど……。
依頼は久々だし。」

ナギサが言った通り、実はツバサ達が依頼でこの狩場に来るのは一
週間ぶりだったりする。

それまでは依頼なしでここに来て、特産品を採ったり小型モンス
ターを少し狩ったりして村の資源を増やしていた。

資源が増えるとハンターに資源ポイントと言うものが発行される。

村の中ではこの資源ポイントが第二通貨となるらしい。

「でもほんとに大丈夫かなああたし達、今回の相手のドスジャギ
イって大型モンスターなんですよ！正直ちょっと不安……。」

ナギサがそう言った。

「確かに……まあでも多分大丈夫だろ。大型モンスターなんて言
うが実際は中型ぐらいらしいし。」

ツバサがそう答えた。

ドスジャギイと言うのは鳥竜種と言うモノに属している大型モンス
ターだ。

しかしこの大陸では、モンスターの分類は大型モンスターと小型モ
ンスターの二種類しかない。

なのでツバサ達の居た大陸では本来、中型モンスターに分類される
筈のモンスターなのだ。

「しかもイナズマは今まで何度も一人で狩っているらしい。それに今回は基本的に俺達だけで狩らないとならないらしいが、ヤバくなったら助けてくれるって言ってたしな！」

今回の狩りはイナズマと村長がツバサ達に出した課題だ。

ツバサ達はほとんど新人のハンターだ。

さつきナギサも言っていたが、大型モンスターを狩るのも初めてだ。その状態でどこまでの力を持っているのか確認しようと言う訳だ。

「さて……じゃあ早速行こうぜ！ ナギサ！ドスジャギイがどこに居るか分かるか？」

イナズマが聞いてきた。

「うううんと………西北西の方角に大型モンスターの気配を感じる。かなり遠いから多分洞窟あたりじゃないかなあ。」

ナギサがそう答えた。

ナギサとツバサの装備　ハンターシリーズ　には《自動マーキング》のと言うキルが付いている。

聴覚や視覚や聴覚などの感覚器官が強化され、少し集中すると大型モンスターの位置がわかると言う物だ。

ただ、二人とも頭は防具の代わりにピアスの様な物が付いている。そのため本来このスキルは発動しない。

だがそこは千里珠と呼ばれる装飾品を防具に付けているため問題なく発動していた。

「洞窟か……よし！　じゃあ先に河口付近に行こうぜ！」

イナズマがそう提案した。

「は？　なんでだよ！？　今回の相手はドスジャギイだろ？　狩りに行かなくていいのかよ！」

ツバサが反論する。

「あのな………今回はドスジャギイの他に、ジャギイとジャギノスの間引きも依頼されてるんだぜ。もし、ボスの統率で連携でもされたら少々厄介だ。だから先に少しでも狩っというて、連携しずら

いようにする……そう言うことだぜ！」

イナズマが身振り手振りを交えて説明する。

「なるほど……分かった。その作戦で行こう！」
そう言つてツバサ達は拠点^{ベースキャンプ}を出た。

ツバサ達の目の前には、この間肉を焼いたエリアから続く小さな川が海と交わる手前で広がる光景が見える。

この二つ隣のエリアはエピオスがよく出てくるエリア……そしてこの間ラギアクルスに襲われたエリアだ。

そんな事を考えていると、

「ギヤア！ギヤア！」

鳥竜種独特の鳴き声がエリアに響く。

目の前には五匹の紫色とオレンジ色の体にエリマキの様な物がある頭をした鳥竜がいる。

「いたぜ！ ジャギイだ！ 早速狩るぜ！」

イナズマの号令で三人はそれぞれの武器を構える。

ツバサは双剣 ツインダガ 改、ナギサは弓の ハンターボウ？

そしてイナズマは……、

自らが纏う防具と同じ土色の巨大な斧の様な武器を構えた。

イナズマの武器は『スラッシュアックス』と呼ばれる種類の武器、

アサルトアックス ……防具と同じでボルボロスと言うモンスター
の素材を中心にして作った物だ。

スラッシュアックスとは、斧型と剣型の二種類のモードに変形する
事ができる。

斧モードは移動が速いが攻撃のモーションが遅い。

剣モードは逆に移動が遅い代わりに攻撃モーションが速く、内臓さ
れたビンの力で属性が追加される。

アサルトアックスの場合は麻痺属性が追加される。

その様な精密設計のため大剣のようにガードする事はできないが、

剣モードにはもう一つ能力があるそうだ……。

「まずは俺から行く！」

そう言つてツバサはツインダガ 改を構えながら走り出した。

狙うは一番奥のジャギイだ！

「わかつたぜ！ じゃあ俺は手前の奴を狙う！ ナギサは俺達の援護を頼むぜ！」

「うん！ わかつた。まかせて。」

そうしてジャギイとの戦いが始まった。

まずツバサが一对の剣を自分の胸の前で構え斬り払いを放った。

「ギヤア！？」

ジャギイが斬りつけられた事に驚きのけ反った。

「まだだ！」

斬り上げてそれから斬り下ろし 回転斬りと流れる様に連携を繋げる。

「グ、グウ……。」

その怒涛の連撃を前にジャギイは成す術なく力尽きた。

「ナイスだぜ、ツバサ！」

そう言いながらイナズマは目の前のジャギイを縦斬りで斬りつけた。続けて横斬りを放つ。

「ギヤツ……グウ……。」

横斬りによつて吹っ飛んだジャギイはそのまま動かなくなった。

「お前もな！ イナズマ！」

そう言いながらツバサは他のジャギイに近づく。

しかしその後ろには、ジャギイが今にも飛び掛かるうとしている。

「おいツバサ！ 後ろ！ 後ろ！」

その警告の声も虚しく、ジャギイはツバサに向かって飛び掛かった。

……しかしその攻撃がツバサに当たる事はなかった。

「シューート……！」

ジャギイがツバサに飛び掛かる直前、ナギサはそれを一早く察知し

矢をつがえて放っていた。

「ギャツ!!」

その矢が飛び掛かったジャギイに当たり、それに驚いたジャギイはバランスを崩して落ちた。

「サンキューな、ナギサ。」

「いいって、いいって。それより集中しよ!」

「ああ、分かった。」

それから数分ほどして……。

「これで終わりだー!」

そう言いながらツバサは連続して斬り下ろしを放った。

「……フウ……他には……出てくる気配はないな……。」

その言葉で三人は武器をしまう。

「じゃあ、早い所剥ぎ取ろうぜ! ジャギノスはまだ狩ってないんだ、急がないとドスジャギイに見つかる。」

イナズマの言葉に頷きながら二人は剥ぎ取り用ナイフを取り出した。

「……………」

「……………」

「……………」

三人は黙って剥ぎ取りする。

……しかしこの沈黙に耐えられない者が一人いた。

「……なあ、何か喋れない? こう静かだとちよっとキツいんだけど……………」

そう言っているのはイナズマだ。

「なんでだよ……………。今まで一人だったんなら剥ぎ取り中は黙ってただろ?」

ツバサがもつともな意見を言う。

「ま、いいからいいから! 所で少し思ったんだけど、その弓ってどういう構造になってるんだ? なんか矢の数が増えたり横に広がったりしてたけど……………」

イナズマがツバサの意見を無視して自分の疑問を口にする。

「ああ、それはね……」
ナギサが説明を始める。

「それは弓の能力なの！ 詳しく説明すると、弓にはハンマーとか大剣みたいに力を溜める事で威力を上げる能力があつて、その能力で力を溜めると撃てる矢の数が増たり打ち方が変わったりするの！」
ナギサが説明する。

「補足すると、本来ハンターボウ？は普通拡散矢……つまり横に広がる矢の事なんだけど、これは普通は使う事ができないんだ。」
ツバサが補足を始める。

「えっ？ じゃあなんで使えるんだよ！ 確かナギサは使ってたぜ？」

イナズマが疑問を口にする。

「ああ、その事が……ほら、俺達ピアスしてるだろ？ このピアスは俺のが『剣聖のピアス』、ナギサのは『増弾のピアス』って言うんだけど、ナギサはこれによって発動する『装填数UP』つつうスキルで撃てる矢の数を増やしているんだ。」

ツバサが説明した。

「ちょ、ちよつと待て！ 今何て言った！？ そのピアスって防具なのか？」

イナズマが驚いきながら聞いてきた。

「ど、どーしたの？イナズマ？」

ナギサもイナズマの反応に驚きながら聞き返す。

「いや、ピアス系の防具って初めて見たから……て言うかどうやって手に入れたんだ？ ピアス系は何か特別な事しないと手に入らないってきいたぜ？」

イナズマがそう言った。

「これか？ まずなにかから話そうか……俺達の両親がハンターだって話は聞いたか？」

ツバサが話し始める。

「ああ！ 聞いているぜ！ 凄腕のハンターチームらしいな！」

イナズマが頷きながらそう答えた。

「そうか……ならその話は飛ばして……俺達がここに移住するって話を聞いてその親が餞別につてくれたんだ。」

ツバサがそう話した。

「なるほどな……さて剥ぎ取りも終わったし、そろそろ次のエリアに行くか。」

そう言つてイナズマが歩き始めた。

「待て！ 剥ぎ取りはもうとつくに終わっているのにお前が勝手に話をさせたんだろ！ それなのにそれはないだろ！」

「そうだよ！ さすがにそれはひど過ぎるよ！」

そう言つてツバサ達が詰め寄っていた……。

この後イナズマが二人の言葉攻めにあつたのは言うまでもない。

06・孤島にて、（後書き）

いかがでしたか？

今回は色々と衝撃（？）事実が満載になりました！

特に僕としてはピアスの話が結構衝撃……て言うか皆様に怒られるのでは、とヒヤヒヤしながら書きました。

今回は少し遅れましたが、次回はもっと早くお届けできるようにがんばります！

07・必殺！！ 属性解放突き！！（前書き）

どうも

またまた少し遅れ気味の作者です

…… すいません…… 少し調子にのりました……
ほんと何してるんでしょうか？

さて、話はかわりますが…… ついにユニークアクセス数が1 / 50
0人を超えました！

やった

これも応援してくださる皆様のお陰です！！
本当にありがとうございます！！

では早速…… モンスターハンター～大海の剣ツルギ～第7話、始まります！
今回はイナズマが活躍します！
なのでイナズマファン必見です！！
でもいるのかな（苦笑）

07・必殺！！ 属性解放突き！！

鬱蒼と生い茂る樹木の葉や枝により空の大半が覆われ薄暗くなつており、下は木の枝や何かの骨などが地面を埋め尽くすエリア。

ここはこの狩場の中の森の最深部……鳥竜種の巣と呼ばれる場所だ。その名の通りジャギイ達が巣として使っている。

そこに三つの足音が聞こえた。

「おっ！ ジャギノスいたぜ！ やっぱ巣の辺りにいたか……ナギサ！ ドスジャギイ今、丘の上の辺りにいるんだよな！」

イナズマが聞いてきた。

「う…ん……うん！ 大丈夫！ 今はここからほぼ真南の方角に気配を感じるからかなり余裕があると思うよ。」

ナギサがそう答えた。

「じゃあ、さつさと狩って今度こそドスジャギイに行くぞ！」

「そう簡単にはいかねーと思うぜ……。なんせこの数だ。」

三人の前にはジャギイが六匹ジャギノスが三匹いた、ジャギイ六匹ならば先ほどより一匹増えただけなので問題ないが、ジャギノスは違う。

ジャギノスとはジャギイ系のメスでジャギイより一回りほど大きくエリマキが犬の耳の様に垂れ下がっている特徴の薄紫色をしたモンスターだ。

その力・体力共にジャギイよりも強力でタツクルなどの攻撃は破壊力抜群だ。

「ジャギノス以外にもここまでジャギイがいるとは……さすがにやべーぜ……。」

イナズマの溜息が聞こえた。

「オレが全部倒してもいいけど、今回はツバサ達の為の狩りだからさすがに自重した方がいいだろうし……。」

イナズマが悩んだ様に考えこんだ。

「え〜？ その割にはさつきガンガン攻撃してたよね〜？ あれはなんだったの〜？」

ナギサが意地の悪そうなか笑みを浮かべながら聞いてきた。それを見てイナズマはボロスヘルムの中の灼眼をキョロキョロさせる。

「ナギサ、あんまりイジメてやるなよ……さつき色々言いまくったしき。つかもう来たぞ！ 話は後だ！」

ツバサがそう言うるとツインダガ 改を構えた。

ジャギイ達がこちらに気づいて走り出したからだ。

それを見て他の二人もそれぞれの武器を構えた。

「まずジャギイを狩ろうぜ！ ジャギノスは戦闘は基本的にジャギイに任せるから、あんまり攻撃してこないはずだぜ！」

「わかっただ！」

イナズマの作戦に二人も頷く。

「じゃあまずはこいつだ！」

そう言うってツバサが一匹のジャギイに狙いを定めた。

斬り払いのために剣を自分の胸の前に構える。

「おりゃ……あれ？」

「ギャウ」

ジャギイはツバサの放った斬り払いをバックステップをして避けた。そして嘲笑う様な鳴き声をあげた。

「こんの……逃げんじゃねー！」

ツバサの怒りの声が虚しく響く。

「ツバサ！ 後ろ！」

その声に反応して後ろを見る。

そうしたら後ろに矢で撃たれ落ちるジャギイが見えた。

声の主はナギサで、どうやらツバサに飛び掛かるジャギイに気付き援護射撃をしてくれたようだ。

「もー！ なんでツバサは後ろを気にしないかなあ。あたしがいなかっただらどうなる事か……。」

ナギサが呆れ顔で言う。

「わりいわりい。でも俺はナギサが後ろにいるから前だけを向ける、お前といっしょだからがんばれる。」

ツバサが笑顔で何気なく言った恥ずかしいセリフにナギサは顔を赤くする。

「いいから前見て！ ほら！また来たよ！」

ナギサは赤くなった顔を隠しながらそう言った。

「おう！ じゃあ早いトコ狩るか。」

そう言つてツバサが真剣な顔になる。

「おりゃあー！！」

雄叫びをあげながらツバサは走り出した。

それからしばらくして

「ハア……ハア……一体どれだけいるんだよ……。」

ツバサが思わず呻き声を上げた。

巣に着いてから3・40分ほど経過した。

しかしジャギイ達の数は殆んど減っていない様に見える。

本当はツバサ達はここに来てから今までにジャギイを十数匹、ジャギノスは八匹ほど狩っている。

しかしそのたびに新手が現れるので一向に数減らないのだ。

ツバサ達もこれまでに喰らった攻撃による傷が見える。

「ハア……ハア……でも……新手ももう……出なくなってきたし……そろそろイケるんじゃない？……。」

ナギサも少し苦しそうにそう答えた。

（そろそろか……それはこっち……つーかこの二人も同じだぜ！
そろそろ限界だな……）

イナズマの考えている通りツバサとナギサは精神的に限界に達していた。

余り経験の無い新人ハンターがこれだけの長時間、どれだけ続くか解らない状態で集中力を切らさずにモンスターと対峙し続けるのは

正直かなり精神的に参るだろう。

この二人を見てイナズマは、

「二人ともそろそろ限界だろ？ 後はオレに任して少し休んだ方がいいぜ。」

イナズマはツバサ達にそう問いかけた。

「いや……俺達はまだイケる……余計な心配はするな！……」

ツバサが息を整えながら言う。

「そんな状態でよく言うぜ。それにツバサが大丈夫でもナギサはもう無理だろ？」

言われてツバサが振り向くと、そこには少し空ろな眼をしたナギサがいた。

仲間と狩りをする時、ガンナーは他の者を誤射しない様に常に気を張らないとならない。

新人のナギサであれば尚更だ。

その為ナギサの精神はの中で最も擦り減っていた。

「つー事だからツバサ達は休んどけ！ 来たるドスジャギイ戦の為にもな！」

イナズマはニカツと笑いながらそう言った。

「……解った……任せる……。」

ツバサの言葉を聞いてイナズマは気を引き締めた。

目の前にはジャギイが五匹、ジャギノスが二匹……少々キツイが問題はない。

「さて……じゃあ、いくぜ！」

そう言ってイナズマは向かって来たジャギイに斬り上げ放つ。

「ギャツ……グウ……」

そのままジャギイは吹っ飛び壁に激突、そのまま動かなくなった。

「まず一匹！ 次、いくぜ！」

そう言ってイナズマはアサルトアックスを右へ左へと振り回しはじめた。

「ギヤア！ギヤア！ グウウウ……」

振り回される刃に警戒してジャギイ達が密集した状態で動きが止まった。

(今だ!!!)

そう考え、イナズマは振り回しを止めて前に突進した。
そのまま斬り上げる。

「ギャツ??? ギャウ!?!」

「グ、グウ……」

イナズマの予想外の動き驚いたジャギイ達は、大抵はバックステップで避けたりしたが一匹だけ避けきれずに攻撃を食らった。

(いっくぜー!!!)

突進斬りの勢いのまま斬り下げた。

ガチャ、ガチャ…ガコン!!!

斬り下げると同時にアサルトアックス形状が斧型から大剣のような形状に変わった。

この変形斬りによりジャギノスが吹っ飛ぶ。

「ヤッ!!! ハッ!!!」

そのまま斬り上げ 縦斬りと連携を繋げる。

それによりジャギイが一匹ずつ動かなくなる。

「ラストー!!!」

その掛け声と同時に突きを放つ。

アサルトアックスが残ったジャギノスに突き刺さる。

「ハアアアアア……」

すると剣身が輝き出した。

同時にアサルトアックスから ギュウンギュウン と音がする。

「ハアッ!!!」

雄叫びと共にアサルトアックスから「ドカンッ!!!」と何かが打ち出された。

ガンランスと言う武器の竜撃砲という攻撃に似ているがそれとも少し違う感じた。

「ギアアアアア……」

周りに残っていたジャギイ諸共吹っ飛んでいく。
この一撃でジャギイ達は全滅した。

ガチャガチャ、ガコン!!!

その一撃が決まった直後、アサルトアックスは元の斧型に戻った。

「これが……属性解放突き……か……？」

「す、すごい威力……話には聞いていたけど……まさかここまでな
んて……。」

ツバサ達は目を見開いた。

「おーし、終わったぜー！」

イナズマが武器を背中に戻しながらツバサ達の方に歩いてきた。

「うーん……他のが現れる気配はねーなあ……。おい！二人とも、
もう大丈夫か？」

イナズマがそう聞いてきた。

「あ……もうちょっと待って貰った方が良さそうだと思う……。」「
ツバサが答える。

「そっか……じゃあ少し待たせて貰うぜ……。」
そう言っつてイナズマは腰を下ろして兜を脱いだ。

「……で、さっきのは何なんだ？ やっぱりあれが話に聞いていた
属性解放突きつてやつなのか？」

ツバサが聞いてきた。

「ああ！ そうだぜ！ すげーだろ？」

イナズマが誇らしげに答えた。

「うん！ほんとにすごいよ！ まるで大砲を撃つみたいだった
よー！」

ナギサが興奮気味にそう言った。

「だろ！ このドカーンつてのがいいんだぜっ！……」
イナズマも興奮して言う。

「二人ともちょっと落ち着け！ つーかなギサはもう大丈夫なのか
？」

ツバサがナギサとイナズマの暴走を止めながら聞いた。

「うん……まだもうちょっと休みたいけど一応大丈夫。」

「そうか……よかった……。」

ナギサの答えに安堵するツバサ。

「でも、まだキツイならもう少し休め！」

「えっ？　で、でも……。」

ツバサは早くドスジャギイと戦いたいと言っていた。

それなのに自分は休んでいいのかとナギサは問いかけた。

「いいんだよ！　さっきも言ったろ？　お前がいるからやれるんだ

！　だからちゃんと休んどけ！」

「う、うん……解った……。」

そう言いながら真つ赤な顔隠す様に俯くナギサ。

「そうか……よかった。　なら安心だ……。」

ツバサはそんなナギサの様子に気づかず再び安堵する。

そんな二人の様子をイナズマなりにやらニヤニヤしながら見ていた。

それから数分後……

「うし！　じゃあナギサ、そろそろドスジャギイの居場所を調べてくれねーか？」

イナズマが聞いてきた。

「うん！　ちよっと待ってね！　……うんと……あれ？　こ、これはない？」

ナギサの表情が少し強張る。

「ど、どうした！？　ナギサ！」

ツバサが少し不安そうに聞いてきた。

「こ、ここに来てる……。」

ナギサの言葉で三人の表情が凍った。

07・必殺！！ 属性解放突き！！（後書き）

と、言う訳で……

今回はイナズマの活躍に、ツバサとナギサの甘酸っぱい青春劇（のつもり）など、盛り沢山でしたねえ

そして次回！

ついに出来ますドスジャギイ！！

ここまで引っ張ってすいません……

こいつ（ドスジャギイ）そんなに強くないのに（笑）

では、次の更新も楽しみに待っててください！

がんばりますから！！

……まあ、また遅れるかもしれないですけど……（苦笑）

08・出現！！ 群れの長！！（前書き）

更新しました！！

どうも　風の双剣使いです

いや〜……ちょっと遅れました

……え？　ウザい？

……すみません……

でもこんなにテンションが高いのには理由があるんですよ！

先ほどついにファミ通文庫の「モンスターハンター - 紡がれし絆」
ついに買ったんですよ〜

今まで売り切れなどでなかなか買えなかったのが！

と言う訳で、僕はこれからこつちを読みま〜す

作者の雑談は置いて……それでは！

最新第8話始まります。

08・出現！！ 群れの長！！

「グオ、グオ、ギアアアアア！！」
威嚇の鳴き声がエリア中に響き渡る。

「来たか！ ドスジャギイ……。しかもご丁寧にジャギイも連れてるぜ……。」

イナズマが苦笑を浮かべた。
ツバサ達の前には六匹ほどのジャギイ達が出た。
そのジャギイ達を率いる一際大きな個体がいる。

こいつがドスジャギイだ。

姿形はジャギイと似ているがジャギイよりも立派なエリマキ、体色はジャギノスの様に薄紫色。

そして何よりの違いはその大きさである。

通常体のジャギイはツバサ達より一回りか二回りほど小さい位でジャギノスはその倍位なのだが、ドスジャギイはジャギイの4倍、ジャギノスと比べると2倍ほどと言う巨体なのだ！

「さすがにこれはキツいかもなあ……。ツバサ！ ナギサ！ いくぜ！ まずはジャギイ共を蹴散らす！」

イナズマが兜を被りながらそう言う。

しかし、

「待て！ この依頼は俺達二人への試験なんだから？ だったら俺は俺達に任せてくれないか！ なつ！ ナギサ！」

「うん！ ドスジャギイはあだし達に任せてくれない？ イナズマには他のジャギイ達の相手をしてほしいしね。」

確かに今回依頼は二人の為の物だ。

それに今の二人ではジャギイ軍団とドスジャギイを同時に相手にするのは困難だろう。

それを理解したイナズマは、

「分かった……。奴は二人に任せるぜ！ けど、無茶はするなよ！」

と、申し出に応じた。

「よし！ じゃあいくか！ ナギサ！」

「うん！ ツバサ！」

そう言つて二人は駆け出した。

「まずはオレが斬りこむぜ！ さっき決めた様にドスジャギイは二人に任せる！ いつも通り剣士のツバサが前衛でいくぜ！ ナギサは主にオレが取り逃がしてツバサに向かうジャギイの迎撃を頼む！」
二人を追い抜きながら指示を出す。

「OK！」

「了解だよ！」

それにナギサとツバサが答えた。

「ハアツ！」

イナズマは背中からアサルトアックスを抜き、そのままジャギイ達に向かつて斬りかかる。

「ギャア、ギャア」

それをジャギイ達はバックステップで避ける。

しかしそれによってジャギイ達がドスジャギイから離れた。

「（おし！ 狙い通り！） 今だぜツバサ！ 突っ込め！」

イナズマが叫ぶ。

「よし！ 任せる！」

それに応じるようにツバサが走る速度を上げて突っ込んでくる。

狙うはドスジャギイだ。

「おりゃ！」

ツインダガー改を抜き放ち、そのまま斬り払いと繋げる。

「ギャウ！？」

ドスジャギイは突然斬りつけられた事に驚き仰け反った。

「よし！ まず一撃！」

ツバサが軽くガッツポーズをする。

しかし、

「ギャウ！！」

ドスジャギイがツバサに向かって噛みついてきた。

「うお！ 危ね！」

間一髪で避ける。

「ギャツウ！」

そこにドスジャギイが回りながら尻尾を振り回してきた。

ツバサはその攻撃を避けきれずに喰らった。

「ぐはっ！」

その攻撃で吹っ飛ぶツバサ。

「ツバサ！？ だ、大丈夫！？」

ナギサが心配そうに聞いてきた。

「…………んあ…………大丈夫だ…………。 問題ない…………。」

少々キツそうではあるが一応大丈夫そうだ。

「よかった…………。」

ナギサはホッとして胸を撫で下ろす。

しかしドスジャギイが今度は安心して油断したナギサに向かって突っ込んで行く。

そのまま一度止まって体の向きを横向きに変える。

その状態から横に向かって跳ぶ様にタツクルを繰り出した。

「え？…………きやああああ！！！」

ドスジャギイの胴体がナギサを捉えた。

ナギサが石ころの様に吹き飛んで倒れた。

「ナギサー！！！」

ツバサの絶叫がエリア中に響く。

「……………………。」

返事がない。

気が付いた時にはナギサに駆け寄っていた。

そのまま座って抱きかかえる。

「う…………う…………ん…………。」

ナギサの目は覚えました。

どうやら気絶していただけなようだ。

「ナギサ!? おい!!! ナギサ!!! 大丈夫か!？」
ナギサが目覚ましたらツバサの顔が目の前にあつた。
「……うん? えっ!? きゃあ!!! 近い近い!!!」
そう言つてツバサを突き飛ばした……真つ赤な顔をして。
「ぐは! ……お、おい! 何すんだよ!!! まったく……まあ、
その様子なら大丈夫そうだけだよ……。」
ツバサが起き上がりながら文句を言う。
「あ! ゴメン、ゴメン。ところでドスジャギイは？」
ナギサが聞いてきた。
「ん? あれ!? そ、そう言えば一体何処に……」
ナギサの言う通りあたりにはドスジャギイ気配はない。
「ああ! ドスジャギイだったら残つたジャギイを連れてどっかに
行つたぜ。ツバサ達がイチャついてる間にな!」
イナズマが何やらニヤついた顔で答えた。
「イチャついてなんかねえ!!!」
ツバサが否定する。
ただ、ナギサはまた顔を真つ赤にしながら、この空気を変えようと
何か考えている。
そして思いついたのは……、
「ね、ねえ! ド、ドスジャギイは追わなくていいの?」
正直苦しい切り返した。
だが、
「お! そう言えばそうだなあ。 ナギサ! 探してくれね? か?」
イナズマが頼んできた。
「う、うん……、わ、分かった!」
どうやら気づいてないようだ。
「おい!!! 俺の話はまだ終わつてね〜ぞ!!! 俺達のどこがイチ
ヤついて……」
「ナギサ、どうだ?」
「聞けつて〜!!!」

否、気づいていて敢えて無視しているようだ。

「よし！ 次こそ絶対決めてやる！！」
意気込みと共に「オー！」と雄叫びあげるツバサ。

ツバサ達は現在エリアとエリアの間にある木々の隙間の細い道を歩いていた。

どうやらドスジャギイは先ほどジャギイ五匹を狩った河口付近に移動した様だ。

それを追いかける為に通っているのだ。

「けどそんなに力まない方がいいぜ……。一応応急薬で回復したとは言え二人ともダメージは残ってるんだしよ……。」

イナズマが宥める。

「ああ……。だからこそそろそろ全力で行く！」

ツバサの眼には決意の色が覗える。

「もしかしてアレやるの！？ でもアレはまだ完全に使いこなせないからやめとくって言ったじゃん！！ それに消耗した今じゃ余計難しいんじゃないの？」

ナギサが少し心配そうに言う。

「いや、消耗した今だからこそ使うんだ！ これ以上消耗したら使えなくなる！ ツー訳で残った携帯食料をくれ！」

ちなみに応急薬と携帯食糧と言うのは依頼を受けるとギルドが支給してくれるアイテムで、応急薬は小瓶に入った傷の治療能力を高め体力を回復できる緑色の液体状薬品、携帯食糧はパサパサとした触感で味もほとんどないが腹に溜まり易くスタミナが回復する食べ物だ。

「うーん……。どうなっても知らないよ……。」。そう言っただけでナギサは携帯食糧を差し出した。

「？ どう言う事だよ？ ツバサ、お前一体何する気なんだ？」

イナズマが不思議そうに聞いてきた。

「ああ、ツバサのやるうとしてるのは……。」

ナギサが説明を始めた。

「グオ、グオ、ギヤアアアアア！」

エリアに入った瞬間、先ほどと同じ様にドスジャギイが威嚇してきた。

周りには二匹のジャギイもいる。

「アレをやる前に少しでもダメージ与えておいた方がいいな……」。

イナズマ！ 今度は俺と一緒にドスジャギイの相手してくれないか？」

ツバサがツインダガー改を抜きながら聞いてきた。

「分かったぜ！ まかせとけ！ だったらオレとツバサのでドスジャギイの相手、悪いけどナギサはジャギイ達の相手をしてくれ！」

イナズマがツバサの意見を聞き指示を出す。

「分かった！ 任せて！」

ナギサも了承する。

「おりゃー！！！」

そうやってツバサが駆け出した。

そしてドスジャギイの前で斬り払いの構えをする。

「おりゃ！ おりゃりゃりゃりゃー！」

そこから斬り払いをしてそのまま斬り上げ 斬り下ろし 1 2 3

回転斬りと連携を放つ。

ドスジャギイはその連携に堪りかねてバックジャンプをして逃げた。しかし逃げた先には……、

「おし！ 次いくぜ！」

そうやってイナズマはドスジャギイはに向かって縦斬りを放つ。

「ギヤアー！！！」

ドスジャギイがその衝撃に耐えかねて仰け反った。

「まだまだいくぜ！！！」

そこから横斬り 斬り上げ連携を放つ。

「ギヤウー！！！」

ドスジャギイが吹っ飛んだ。

起き上がったドスジャギイはそのままバックジャンプをする。

これにより一番近くにいるイナズマでも数メートル程の距離が空く。

「ウォー！ー！ウオウ、ウオウ、ウオウ！」

その状態からドスジャギイは頭を持ち上げて鳴き出した。

「ヤバイ！ 遠吠えした！」

イナズマが警戒の声をあげる。

「な、何だ！ 遠吠え？」

「何してるの？」

ツバサ達は頭に疑問符を浮かべながら聞いた。

「遠吠えっつーのはあー言う風に鳴き声を上げて他のエリアにいる仲間を呼ぶ力の事だぜ。本来なら無防備になるから攻撃のチャン

スなんだけどこんだけ距離があるとな……。」

イナズマが悔しそう言う。

「ギャア！ ギャア！」

その時、イナズマの言う通りジャギイが数匹現れた。

ドスジャギイは仲間が来たのを確認すると、反転して逃げ出した。

「えっ？」

「はあ？」

ツバサ達はドスジャギイの予想外の行動に驚いた。

鳥竜種のリーダー個体は不利と見ると逃げると言うのは知っていたが、まさかその為に仲間を呼んだとは思わなかったからだ。

「待てー！！ 逃げるなー！！」

ツバサはそう言って追いかける。

しかしそれは出てきたジャギイ達に阻まれる。

「畜生！！ 待てー！！」

ツバサの絶叫がエリア中に響いた。

08・出現！！ 群れの長！！（後書き）

こんな感じでどうだったでしょうか？

結局また引きずった……、

でも次回はついにドスジャギイ編完結です！

ところで相談なんですけど……活動報告を見た人は知っているかも知れませんが、

次のシリーズにはツバサ達に私服を着せようと思っているんですが

……、

僕はこう言う物（ファッション）にはまったく縁がないのでどうすればいいか迷っています……。

そこで！

読者の皆様にツバサ達の服についてアドバイスを頂きたいと思えます！

何か意見がありましたら、感想の方に書いて頂きたいです！！

よろしく願います！！

09・決める！！ 双剣奥義・乱舞！！（前書き）

ついに来ました！！

ユニークアクセス数2、000人突破！！

これも読んでくださる皆様のお陰です！

ありがとうございます！！

それでは第9話始まります！！

そして僕は今から自転車を全力で漕いで学校に行きます！

間に合うかな？（汗）

09・決める！！ 双剣奥義・乱舞！！

ここはツヴァイ村の酒場……。

木造で吹き抜けになった大きな窓などがあり、20人…少し無理をすれば30人は入る事のできるこの村の中では最大の大きさの建物だ。

「うん……それにしてもなかなか帰ってきませんね？ ねえ、村長さん、エドガー君。」

この村のギルド受付嬢であるジユデイがそう言った。

「いや、ジユデイ……この村からベースキャンプまででも歩いて1・2時間は掛かるのにそんなに早く帰ってこれる訳がないだろうが……。」

「そうニヤ！ 朝早くから行って大体7・8時間たつたから……多分まだ掛かると思うニヤ！ 後2・3時間は帰ってこないんじゃないニヤいかニヤ？」

村長とエドガーが答えた。

ギルドとの規定により依頼で制限時間の10時間以上狩場にいるとその依頼は失敗する。

逆に言えば、ここからツヴァイ島の狩場行って帰ってくるのには最長で14時間は掛かると言う事だ。

「え……！！ そんなに掛かるんですかね……？ 4・5時間は戦^やりあつてるんだからそろそろ帰っても……、

あ！ 来ました来ました！ イナズマさん達が帰ってきましたよ。」

ジユデイの言う通りツバサ・ナギサ・イナズマの三人がこの酒場に来た。

ただ少し様子がおかしい。

「ど、どうしたんだ！？ ツバサ君？ 大丈夫か！？」

村長が心配そうに聞いてきた。

帰って来た三人の格好は……ナギサとイナズマの間にツバサが入り肩を貸して貰っている、と言う状態だったからだ。

「いや、一応もう大丈夫なんだけど……まだちよっとキツイからなあ……。だから肩貸して貰ってるんだ。」

ツバサが弁解する。

「そうか……。でもどうしたんだ？ ……まさかドスジャギイにやられたのか……！」

村長が再び慌てた様子聞いてきた。

「いや……。その……。これは……。」

ツバサが言い淀む。

「それはツバサが無理した代償だから気にしなくてもいいよ、村長！」

ナギサが代わりに答えた。

「代償??」

村長が頭に疑問符を浮かべる。

「ナギサ！ 言うなよ！」

ツバサが少し恥ずかしそう言う。

「え〜？ でも言った方がいんじゃない？ どうせなら自分で言いなよ！」

ナギサが少し意地の悪い顔で言った。

「うっ……。ま、まあ確かにな……。 ……分かった！ 何があったかって言うとな……。」「
そう言うってツバサが話し始めた……、

話は二時間程遡る。

「くっそ〜……。今度こそ狩ってやる〜!!」

現在ツバサ達は再度鳥竜種の巣に向かっていた。

先ほど逃げたドスジャギイを追っているのだ。

ちなみにジャギイは遠吠えで出てきたのが四匹、残っていた手負いの一匹の計五匹だったが三人で難なく倒した。

「だから力むなって……。 ……で、さっき言ってたアレっつーのはやるのか？」

イナズマが聞いてきた。

「ああ！ もちろんだ！」

ツバサが何故か自信有り気に言う。

「でも大丈夫？ さすがに止めた方がいいと思うよ？ もう少し練習してからにしよう。」

ナギサが呆れ顔で言う。

「でもこれからも双剣を使っていくなら絶対できるようになった方がいいだろ？ それには実践練習が一番だ！」

ツバサがまたも自信満々な様子で答えた。

その自信は一体何処から来るのだろうか？

「はあ……。分かった！ もう止めない！ ……でも連続ではやらないですよ？ さすがに限界超えるだろうから。」

ナギサは諦めながらも一言付け足す。

「OK！ まかせとけ！」

ツバサはそう言って走り出した。

「ね？ほんとに聞いているの？」

そう言いながらナギサも後を追う為に走り出す。

「やれやれ……。だぜ……。」

イナズマもそう言って呆れ顔で走り出した。

「グオ、グオ、ギアアアアアア！」

この狩場に来てもう何度か聞いた鳴き声が響く。
ドスジャギイが威嚇してきたようだ。

「もう自分はいないみたいだぜ！ ツバサ、後は任せるぜ！」

そう言いながら何が起きてもいいようにアサルトアックスの柄に手を添える。

「おう！ 俺が終わらせて来る！」

そう言ってツバサは駆け出した。

「ツバサ！ 援護は任せて！」

そう言つてナギサはハンターボウ2を展開してドスジャギイに向かつて矢を放つ。

「ああ！ 頼む！」

そう言つてツバサはツインダガー改を抜き放ち、すぐさまドスジャギイに向かつて斬り払いを放つ。

「ギャア！！」

ツバサの攻撃にドスジャギイが悲鳴を上げて仰け反つた。

「今だ！」

そのスキにツバサは天高くツインダガー改掲げると「シャラン」と対の刃を擦り合わせ小さく何か呟いた。

「鬼人化……」

そう言つとツバサの全身から赤色のオーラの様なものが溢れ出す。

鬼人化

それは双剣使いのみが使う特殊な状態の事を言う。

鬼人化は集中力を極限まで高める事により脳のリミッター外し、それにより一定の間攻撃力などの身体能力が飛躍的に上昇した状態だ。集中力を高めるだけなら他の武器でもできそうな気がするが実際はそう簡単ではない。

両腕で剣を振るうという特殊な武器・双剣だからこそ脳がリミッターを外す事が出来るらしい。

「ハッ！ ヤッ、ハッ、ヤア！ セイヤッ！」

ツバサが流れる様な連撃を放つ。

ドスジャギイは攻撃しようとしている様だがツバサの連撃に押されてうまくいかないようだ。

（そろそろ決める！！）

そう考えるとツバサは左右の剣をさらに力を込めて握つた。

そこから一気に力を解き放ち両手を限界ギリギリの速度で動かし斬りつける。

「乱舞……」

ナギサがぼそりと呟く。

「これが……乱舞なのか……？」

それを聞き逃さなかったイナズマが聞いてきた。

「うん、これが双剣使い最強の奥義・乱舞よ。鬼人化によって限界まで高めた筋力を使って音速で斬りつける手数なら最強の技よ。」
ナギサが説明する。

「ヤアアアアアア！」

ツバサの雄叫びと共に乱舞が終わる。

それと共にツバサが纏っていた赤いオーラが消える。

鬼人化が解けたようだ。

ツバサの目の前には大量の斬り傷がある満身創痍のドスジャギイがいた。

しかしドスジャギイは突然走りだした。

どうやらナギサ狙っているように見える。

「きゃあああああ！」

「させるかー！！！」

そう言うとツバサはドスジャギイに駆け寄り、再度鬼人化して乱舞を放つ。

「グギヤアアア……」

呻き声と共にドスジャギイは崩れ落ち動かなくなった。

時間を現在に戻す

「……つー事があつた訳だ。そのあとどーなったかは、俺は気絶したから知らないんだけどな！」

ツバサが語り終える。

「へ……そんな事があつたんですか……もぐもぐ……」

受付嬢のジュディが何かのお菓子の様な物を食べながら言う。

と、言うよりいつの間食べはじめたのだろうか……。

「なるほど、そんな事があつたのか……しかし何で気絶したんだ？」
村長が聞いてきた。

「ああ！ 鬼人化つっーのはさつきも言った様に脳のリミッターを外す技だ。その分脳にもかなりの負担が掛かるから慣れてないと動けなくなったりするんだ。多分連続で使ったりしたからだろ？」ツバサがそう言う。

みんな納得したようだが一人だけ様子が違う。

「ウツ、クフウ……アーハッハッハッハ 無理だ！もう限界

！」

イナズマが突然笑い出した。

「はあ？ どーしたんだよイナズマ？ 何がそんなにおかしいんだ？」

ツバサが少し怒り気味に言う。

「いや、ちよつと……なあ、ナギサ」

自分に振られてビクツとするナギサ。

「ナギサ？ どうしたんだ？」

ツバサが聞いてきた。

「いや……その……あ、あの……いや……うーんと……」

ナギサが少し慌てた様子で何か言おうとしている。

そこに、

「さつき気絶して記憶がないって言ってたろ？ そんなになあ……。」

「

イナズマが話し出した。

「ツバサ、お前あの後すぐに気絶したと思ってるだろ？ でも

実はあの時すぐは気絶してなかったんだぜ。」

イナズマがそう言った。

「どーいう事だよ？」

ツバサが聞く。

「そっからはナギサに聞いた方がいいんじゃないか？」

と、イナズマがニヤつきながら言った。

「どーいう事だ？ ナギサ？」

ツバサが聞く。

「うつ……。いや……。その……。あの時ツバサが約束破ったから……。つい……。」

ナギサが申し訳なさそうに言う。

「約束？」

ツバサが頭に疑問符を浮かべる。

「連続で鬼人化するなって奴だぜ、ツバサ」

イナズマが教える。

（ああ！ あれか……。）

思い出し少し罪悪感を感じるツバサ。

「それにしたってあんな、ボロボロのツバサに向かってフルボッコだもんなあ……。」

イナズマの言葉で罪悪感が吹き飛ぶ。

「ナギサ、それはどう言う事だ？」

ツバサがナギサに詰め寄る。

「いや……。その……。ごめん!!」

ナギサの声が村中に響いた。

09・決める！！ 双剣奥義・乱舞！！（後書き）

今回は少し短めですね。

さて、鬼人化の設定どうでしょうか？

話を盛り上げる為にあのような設定にしました！

話は変わりますがついにはコラボができました！！

「アンのハンター生活危機一髪」とです！！

やった〜（喜）

まあ、個人的には少しキャラ崩れしている様な気もしますが……

（別に攻めてる訳ではありませんよ〜SIBA 翔太郎先生）

よかったですら見に行ってください！

では、次回から新シリーズです！！

がんばって書くので、少し待っていてください！！

10・カラクルト砂原（前書き）

ついに二桁!!!

どうも！ 作者の風の双剣使いです

ついに投稿話数が二桁になりました（喜）

これも応援して下さる読者の皆様のお陰です!!

本当にありがとうございます！

さて、その第10話ですが……、

……

すいません!!

待たせてしまったのに、めちゃくちゃ短いです!!

今回は新シーズの導入編と言う事で敢えて短めにしたんですが……、

正直短すぎますよね……。

本当に申し訳ないです……（ペコリ）

では第10話、「カラクルト砂原」が始まります……。

10・カラクルト砂原

強い日差しに乾燥した空気、周りを見渡せば地上に露出した
岩石や所々ひび割れた地面など一見荒れ果てた様子だが、その過酷
な環境でも力強く根を張る木やその他の植物などが点々と生えてい
る。

奥の方へ行くとさらに強い日差しにどこまでも続く広い砂の海が見
渡せる。

手前の荒れ地部分とは違い朽ち果てた倒木や何かの骨の様な物など
が在り、生物の気配も殆ど感じられない砂漠部分だ。

その他にも真つ暗でたいまつやランプの様な物がないと周りが見え
ない洞窟や、数少ない水気がある泥沼などもある。

ここはカラクルト砂原、

ツヴァイ村から船で半日、そこから歩いて半日ほどで着く狩場だ。

バサ、バサ、バサ、バサ

そこに翼が飛ばたく音がした。

ドスン、と音がして何かが降り立った。

その姿は……、

まず目につくのは朱あかくて巨大な長いクチバシだろう。

他にも大空を飛ばたく翼には石の様な物が付いていたり、黄緑色を
中心に朱や藍などの色のカラフルで派手な体色も目を引くだろう。

「クウォォー……！！ クルルル……」

現れたモンスターは頭を持ち上げ、甲かんだか高い音で鳴き出した。

良く見てみると先ほど巨大なクチバシの先端がラッパの様に広がり、
紅い胸が風船の様に膨らんでいたようだ。

きつとさっきの音はクチバシの先端から出たのだろう。

しかし次の瞬間……、

「ウォォー……！ ウォウ、ウォウ、ウォウ！」

再び頭を持ち上げたかと思うと今度はドスジャギイの遠吠えの様な音で鳴き出した。

するとどう言う訳かドスジャギイが手下のジャギイを連れて現れた。さっきの音に反応して現れたようだ。

「クウオーーーーー！！　クルルルル……」

再び先ほどの鳴き声がかラクルト砂原に轟く。

このモンスターは一体何なのだろうか……

10・カラクルト砂原（後書き）

と言う訳で如何だったでしょうか……。

……やっぱり短いですよね……。

ほんとすいみせん……（凹）

ですが新しい狩場、カラクルト砂原はどうでしょうか？

フィールド事態は本家3の砂原と同じ様な場所と思って頂ければと
考えてます。

ですが一応違う場所にあります！

3の狩場で名前が分かっているのは孤島Ⅱモガの森だけなので、こ
うちは違う狩場と言う設定にして名前を付けました！

そして出て来たモンスターの正体は……？

まあ、3やってる人にはバレバレですよ（笑）

では、次回はなるべく早く更新する様に努力します！

11・今回は護衛依頼（前書き）

ど〜も〜！ 風の双剣使いです！

第十一話、更新で〜す

前回より少し早めにできました！

前回出て来たモンスターの正体が遂に判明します！！

……まあ、殆どの人が分かっているようですが（汗）

それではど〜ぞ〜！！

11・今回は護衛依頼

「護衛依頼!？」

「彩鳥クルペッコ!？」

ツバサとナギサの声が重なる。

あのドスジャギイ討伐から二ヶ月……。

二人は村長に呼びだされて酒場に来ていた。

ちなみにこの一ヶ月半、ツバサはツヴァイ島で甲虫・オルタロスの討伐に海中のベニサンゴ採り、ガルベルト熱帯林で飛行虫・ブナハブラや水生獣・ルドロスの討伐。

カラクルト砂原では草食竜・リノプロスの討伐に卵運び、その上ドスジャギイを捕獲までした。

しかし今回は今までの依頼とは違ったものらしい。

「え〜と……村長、二人ともあんまり分かってないみたいっすよ……。もうちょっと詳しく教えてやった方がいいんじゃないっすか?」

イナズマがそう言ってくれた。

「ん? そうだな。すまん、折角の休日に呼んで突然こんな事言いだして……。」

村長が言う通り今日は元々三人共狩りは休みの予定だった。

最近は依頼をいくつもこなし、依頼がなくてもツヴァイ島のパトロールもとい資源集めをしていて休む暇がなかったからだ。

なので三人共今は私服を着ている。

ツバサは赤いTシャツにケルビの皮で作った半ズボンとラフな格好、ナギサは白でフリルの付いた可愛いワンピース。

イナズマは青いポロシャツとジーンズ、普通そうな格好だが整った顔立ちのせいかカジュアルに見える。

「村長、そんなのはいいから教えてくれ! 護衛とかクルペッコ

「ってどー言う事だ？」

ツバサが聞く。

「ああ！ そうだな順を追って説明しよう……。」「
村長、が話し出す。

「まずは……護衛依頼についてだが……。二人とも商隊は知っているか？」

村長が聞く。

「もちろん知ってるよ。えつとね……。商隊って言うのは商人達が他の村や街に向かう時に、大人数で移動してモンスターに襲われにくくする為の隊……。でしょ？」

ナギサが答えた。

「へ……。意外だな。ナギサが答えるなんて……。てっきりツバサが言うのかと思っていたぜ！」
イナズマが作者も考えている事を言った。

「その位あたしだって知ってるよ！ あたしってそんなに頭悪そうに見えるの？」

ナギサが怒り気味に言う。

「……。まあ、そんな事ぐらい簡単に分かるよな……。こんな物を使ったらなあ！」

そう言つてツバサはテーブルの上にあつた手を下に持つていく。そしてナギサの手から何かを引^ひつ手^{たく}繰^くつた。

「ああ！ ……。それは……。」「
ナギサが悲鳴の様な声を挙げる。

ツバサの持つてるのは一冊の本だった。

表紙には《ハンター基本知識学》と書いてあつた。

「それは……。？」
村長が聞く。

「ん？ ああ！ これな！ この本はハンター養成学校の教科書だ！ ハンターになる為に必要な諸々の常識なんか書いてある。」「
ツバサが村長の問いに答えた。

「つつーかナギサ……。 お前なに見栄張ってるんだよ。 お前は無理しなくていいだろ。」
ツバサ諭す様に言う。

「いや……。あんまりバカだと思われるのも嫌だな……。」
ナギサが「ニヤハハハ」と苦笑いした。

「はあ……。ま、いいか……。 話が逸れたな……。村長、続きを頼む。」

ツバサが疲れた様に言う。

「ん？ ああ、そうだったそうだった！ さて、どこまで話したか……。」

そう言つて村長が話の続きをし始めた。

「商隊について言った所か、思ったより話進んでない……。 で、その商隊が今こつちの方面にむかつていて、その時にカラクルト砂原を通るらしいんだ。」

「ふ〜ん……。 でもなんで護衛依頼なんか出したんだ？ さつきまでの話だとかかなり大きな商隊なんろ？ だったら別に狩場を通る位で依頼を出す必要はないだろ？」

ツバサが疑問を言う。

「ああ、普通ならそうなんだがちょっと厄介な事になっててな……。

実はつい最近、カラクルト砂原にはある大型モンスターが住み着いたらしいんだ。 そのモンスターが彩鳥・クルペッコだ！」

村長が難しい顔をしながら疑問に答える。

「彩鳥・クルペッコ？ さつきから出て来る名前だけど一体どんなモンスターなの？」

ナギサが頭に疑問符を浮かべながら聞く。

「ああ！ クルペッコつつーのはなあ……。」
これまでほとんど黙っていたイナズマが口を開く。

「クルペッコは鳥竜種に分類されるモンスターだぜ！ つつってもジャギイやドスジャギイみたいなのじゃなく、翼を持っていて空を

飛ぶ事ができる奴だ！」

イナズマがクルペッコについて説明する。

「翼を持った鳥竜種か……イャンクックとかヒブノックみたいな奴だな……。」

ツバサがイナズマの説明の感想を言う。

「イャンクックにヒブノック？　なんだそいつは？」

村長が聞いてきた。

「ん？　ああ！　こいつらはさっき言ったクルペッコみたいに翼を持った鳥竜モンスターだ。　イャンクックは鱗や甲殻に覆われていて、ヒブノックは主に羽毛で覆われたモンスターだ！」

ツバサが疑問に答える。

「なるほどな……。　じゃあ、クルペッコはそのヒブノックつーモンスターに近い感じだぜ！　まあ、奴には鱗もあるけどな！」

イナズマが言う。

「分かった、覚えとく！　お前も覚えとけよ、ナギサ！」

「わかったよ……。　ああ、除々にバカキャラが定着していく……。」

ナギサがすこし凹み気味に言う。

「大丈夫だ！　お前は初めから馬鹿だからな！」

「はう、……。」

ツバサが容赦なくトドメの一言を言い放つ。

その直後ナギサ倒れこむ音が聞こえた。

「おいツバサ……さすがに言いすぎじゃねえか？　なんか力尽きてるし……。」

イナズマが言う。　が、

「いいんだよほっといて……どーせすぐに復活するから……。」

ツバサは面倒くさそうに言った。

「で、また話が逸れたが……まあ、大体の事は分かった。」

ツバサが話し出した。

「つまりツヴァイ村の近くを通る商隊がカラクルト砂原を通るタイミングで、運悪く大型モンスターが現れたからそのモンスターから商隊を守るっつー依頼だな。」

ツバサがこれまでの話を一言にまとめて言った。

「ああ、そう言う事だ。カラクルト砂原に最も近い村はうちだな！」

村長がその言葉に感心しながら言う。

「じゃあ早速準備しなきゃ！ で、いつまでに準備しなきゃいけないの？」

ツバサの言葉通りすぐに復活したナギサが聞いてくる。

「商隊がカラクルト砂原に着くのは明後日だから今日一日は余裕がある。でもついてすぐに護衛ではキツいだろうから今日の夜にまでは準備して貰った方がいいな。」

村長が答える。

「うん！ わかった！ じゃあ急いで準備しよう！」
そう言ってナギサは酒場から飛び出て行った。

「あんまり急ぎ過ぎて持つてく物間違えるなよー！！」
酒場の方からツバサが注意の声を飛ばした。

11・今回は護衛依頼（後書き）

こんな感じになりました……（汗）

今回は笑いの為、ナギサに犠牲になっていただきました……。

ナギサ……ごめん（謝）

では、次回より遂にカラクルト砂原に行きます!!

これからツバサ達はどー言う風に商隊を守るのでしょうか？

僕自身も楽しみです！（おいおい）

12・砂原の護衛と砂の魚

ここはカラクルト砂原の奥地、リア砂漠地帯と呼ばれる場所だ。

普段は何もない場所だが現在この砂漠にはアプトノスが引く竜車が数台、その周りに三人の護衛ハンターの姿があった。

「……………」

「……………」

「……………あゝもう！ あつっ！い！！ ほんとなんなの！？ この暑さは！！」

その中の一人の少女が沈黙を破り声を上げる。

この砂漠の黄色っぽい砂色の中ではかなり目立つ蒼と白のドレス？の様な防具に身を包んでいる。

「うるせえよ…………。 お前もクーラードリンクは飲んだろ？ それなら体に異常は起きないから問題ない！」

その声に少年が答える。

こちらは金属製の軽装鎧に紫色の皮や鱗などで補強した防具を纏っている。

「だって暑いモノは暑いんだもん！ はあ……………何とかならないかな……………」

少女…………ナギサがだるそうに言う。

「何を言っても意味ないから諦めろ…………。 つつーかお前砂原に来たの何回目だよ…………いい加減慣れろって……………」

ナギサの愚痴に少年…………ツバサは面倒くさそうに答える。

「まあ、確かにオレも暑いとは思っぜ。 でもしっかり集中してるよ！ 今回は護衛なんだからいつも以上に気をつけて観てないかな！」

イナズナがそう言う。

「OK……………」

「ああ…………分かってる……………」

二人が力なく答えた。

今回ツバサとナギサは装備を新調してきていた。

実は先日の休暇も元々はこの為である。

ツバサは鉱石とジャギイの皮や王者のエリマキなど使った防具・ジャギイシリーズに、ドスジャギイの爪や烏竜種の牙などを使った双剣・ジャギイフアングスを背負っている。

ナギサの防具は飛甲虫・ブナハブラの素材を中心にした一見すると服の様に見える防具・ブナハシリーズを着ていた。ただしこの防具には腕と頭の防具が存在しない為今まで使っていたハンターガードと増弾のピアスはそのままで。

そして武器は水生獣ルドロスの皮を貼ってあり展開するとごく標準的な造りの弓・ルドロスボウ？だ。

それから少し進むと……、

「あれ？ 何かヒレみたいなのこっちに来てるけど……ねえイナズマ！ アレは何？」

ナギサが聞く。

「ん？ ああ！ アレね！ アレはデルクス！ 砂漠にいる魚つて感じのモンスターだぜ！ 大して強くなーけど群れでくるから気をつけるよ！」

イナズマがそう説明した。

「ふ〜ん……。まあガレオスみたいなモンだろ……」

ツバサがそう考えているとデルクスが砂中から飛び跳ねた。

「は！？」

「何アレ！？」

その姿を見てツバサとナギサはギョツとした。想像していた姿とかなり違ったからだ。

まず出て来たのは二人の想像していたガレオスの様な三角形に点が二つの頭ではなく、のっぺりとした細長い口と顔から飛び出した様に付いている小さく真っ赤な目だ。

次に体だが胸ヒレはガレオスの物より小さく代わりにかなり大きな背ビレが付いている。

その上ガレオスには足があるがデルクスにはない。さすがに尾ヒレはほぼ同じで普通の魚の様なヒレだが。

ガレオスは飛竜種のモンスターが進化して魚の様なモンスターになったモノだと言う話だが、このデルクスは魚がそのまま巨大化してモンスターになったと言う感じだ。

「あたし……なんかちよつと苦手かも……。」

「ああ……俺もアレはちよつと嫌だな……。」

二人の感想はそんな感じだった。

多分砂色の体から飛び出ている赤い目が嫌悪感を与えるのだろう。

「そんな事言ってる場合じゃないぜ！ 数が多いからこいつらがいくら雑魚でも気をつけるよ！ 魚だけにな！」

イナズマがしょーもないギャグを言った。

「キャウウウウツウ!!!」

デルクスが怒りの声を上げながら突っ込んできた。

しかし……、

「なんでオレだけ!!!」

イナズマがデルクス達から必死で逃げてる。

どうやらデルクスが突っ込んで行ったのはイナズマのみだった。

先ほどのくだらないボケにブチ切れたのだろうか。

「はあ……。 ナギサ、とりあえず助けるぞ……。 運転手、悪

いけど先に行ってくれ、すぐ戻るから」

そう言ってツバサはジャギイフアングスを抜き駆け出した。

「うん……まあ助けなきゃね……。」

そう言ってナギサはルドロスボウ？を展開し、弦を引絞ってから矢を放つ。

「キャウ!!!」

放った矢が全て一匹のデルクスに突き刺さり仰け反った。

「ハッ、ヤッ、シュート!!!」

ナギサは続けざまに矢を放ちデルクスを沈黙させる。

これで一匹、ちなみに残っているデルクスは九匹ほどだ。

「逃げてばっかって訳にもいかねえぜ！ そろそろオレもやるか！」
そう言つてイナズマがアサルトアックスを振り抜き刃を横向きして
抜刀斬り放つ。

「キヤアウ……。」

その一撃で先頭にいたデルクスが力尽きた。

「いくぜー！」

そこから腕を入れ替えてアサルトアックスを振り上げる様に斬り上げる。

「キヤウウウウー！」

一匹のデルクスが吹っ飛ぶ。

「まだまだー！！」

そう言つと斬り上げたアサルトアックスを振り下ろしそのまま右へ
左へ振り回す。

「キヤウウウウウウウー！！！」

そんな事には構わずに突っ込むデルクス。

その後イナズマの周りにはデルクスの死骸の山ができたのは言うまでもない。

「おい！ 折角助けに来たのにそれはないだろ……。」

ツバサが苦笑しながらイナズマに近づいて行く。

「ああ！ あれは逃げた訳じゃなくてオレに向かったデルクスを引きつけていただけだぜ！ あの位なら簡単に倒せるからな！」

イナズマが頭防具を外しながら爽やかに言う。

イナズマ曰く実は作戦だったらしい。

だが……、

「だったらあの悲鳴はなんなの？ 別に必要無かったと思うけど……。」

……。

ナギサの言葉を聞いたイナズマの顔には大粒の汗をかき出した。

「おい？ イナズマさん？ さっきのは作戦なんだよな〜！」

「……………」

イナズマは答えない。

「イナズマ」

二人が嫌な笑みを浮かべながらイナズマを呼ぶ。

この後どうなったかは……、

まあ、ご想像にお任せしよう。

12・砂原の護衛と砂の魚（後書き）

ツバサ：「今回はついに俺達のオリジナル武器が出て来たな！」

ナギサ：「あたしのはルドロスボウ1でツバサはジャギイファングスだったよね」

そうそう二人とも新しい装備だね

ツバサ&ナギサ：「出た！ テキトー作者！」

テキトーって酷いな！！

ナギサ：「だって本当の事でしょ！？ いつも殆どその時の勢い書いているじゃん！」

いや！ そんな事ない！

ツバサ：「ところで前書きも後書きもこんなんでいいの？」

ん？ ああ！ 大丈夫だ！

正直こうしてお茶を濁すのが目的だから（笑）

ツバサ&ナギサ：「そっちの方が酷くない？」

うん……。

今度からはちゃんとやる（汗）

13 出現クルベッコ VS ドスジャギイ (前書き)

どうも、 風の双剣使いです!!

ツバサ：「始まり方前回と一緒だな(汗)」

ナギサ：「これしかないらしいよ(汗)」

失敬な！ これ以外にもありますよ!!

ツバサ：「じゃあ言ってみるよ……」

え〜と〜…… (汗)

ナギサ：「もう諦めたら(汗)」

……うん……、

イナズマ：「ところで今回オレの出番少ないって本当か!？」

うん 本当

イナズマ：「なんでだー!!!!」

ちょっと事情だね……、

でも多分もう少ししたら出番あるかもよ!

イナズマ：「マジか！ ならいいぜー!」

まあ、本当に出番があるかどうかは僕にも分らないけど（汗）

イナズマ：「ハア！？ どー言う事だ！？」

ま、まあ僕はこれからこつちを書いてて読めなかったから他の先生の所に行って来るから……、

イナズマ：「待て！ 逃げるな！！ つつーかコレ前回と同じじゃねーか！！」

13・出現クルペッコ VS ドスジャギイ

現在ツバサ達はリア砂漠地帯を抜けてザボ荒野地帯と呼ばれる所に来ていた。

今居るのはその内の二本の巨大な石柱があり片側が崖のようになっているエリア、そのエリアから隣の荒野地帯エリアに行き来できる出入り口付近に居る。

「ところで運転手、クルペッコは人を食うモンスターじゃないって聞いたんだけど、それならどーしてこの商隊を狙うんだ？」

ツバサが竜車の運転をしているおじさんに聞いた。

「ん？ ああ、それかあ。たすかにクルペッコは人自体は喰わんけえど、オラたつの荷物の中ぬある魚系のアイテムを狙つとるんだあ。」

「魚系のアイテム？」

ナギサも話に入ってくる。

「ほうだあ、魚だあ。具体的にゃはカクスンデメキンとかハレッツ

アロワナとかバクレツアロワナとかだあ。」

竜車の運転手が説明する。

「なるほどそう言う訳か……。」

ツバサが納得したように言う。

そこに……、

バサ、バサ、バサ、バサ

翼が羽ばたく音がした。

「どうやら御出ましのようだぜ！」

イナズマの声と共に一匹の大型モンスター片方の石柱の上にとまる。

「奴がクルペッコか……、」

ツバサがその派手な外見に驚きながら言う。

「クウォー……！！ クルルル……」

甲高い音を一声あげると石柱の上から滑空してきた。

「来るぜ！」

イナズマの掛け声と共に三人は武器振り抜き構える。

バサ、バサ、バサ、バサ……ドスン、

クルペッコは一端空中で急停止し降りてきた。

「運転手さん、アンタは先に行ってくれ！ ナギサ、お前は竜車の援護を頼むぜ！ ここはオレとツバサの二人で喰いとめる！」

イナズマが指示を出した。

「うん！ 任せて！ そつちも気を付けてね。」

そう言つてナギサが竜車と共に走り出し隣のエリアに逃げ込んだ。

それを見ていたクルペッコはおもむろに頭を持ち上げ、

「ワオーー！ ウオウ、ウオウ、ウオウ！」

とドスジャギイの遠吠えの様な音で鳴きはじめる。

「ヤバイ！ ツバサ音爆弾持つてねーか！？」

イナズマが切羽詰まった様に聞いてくる。

しかし、

「悪い、二人とも持たなくても大丈夫だろうって言つてたからナギサしか持つてない……。」「

ツバサがすまなそうに言う。

「となると厄介だぜ……。 ツバサ！ 念の為お前もナギサの方に行つてくれ！」

イナズマがそう指示を出す。

「分かった！ でも気を付けろよ？」

そう言つてツバサはジャギイファンクスをしまつて走り出す。

一方ナギサは……、

「ハア……ハア……ここまでくれば大丈夫ね……。」「
隣のエリアに着いていた。

このエリアは岩や木などがあり草食竜・リノプロスがよく出て来る事で有名なエリアだ。

他にもアプトノスなどもよくこのエリアにやってくる。

しかし今はそのどちらも見当たらない。

「助かったであ〜ハンターさん、いんや〜危な^かがった〜……。」「
竜車の運転手がお礼の言葉を述べる。

「いえいえ、お礼ならあの二人が帰って来てからでいいって。」「

ナギサが少し照れながら言う。

しかし、

「え！？ 今の鳴き声って……。」

二人がいたエリアの方から微かにドスジャギイの遠吠えが聞こえたのだ。

「大丈夫かなあ……？」

ナギサが不安そうに言う。

「ううん、あたしの役目は商隊のみんなを無事送り届ける事。それに今ドスジャギイがツバサ達の所に居るって事は、こっちには来ないって事だからむしろチャンス！ よーし、がんばるぞー！！」

ナギサがそう言うって自分を鼓舞していると……、

「グオ、グオ、ギアアアアア！！」

突然ドスジャギイが数頭のジャギイを引き連れて現れてナギサ達に向かつて威嚇してきた。

ちなみにジャギイの数は三頭だ。

「うそ！！ なんで！？」

ナギサが驚きの声を上げる。

「おい、ナギサ！ 大丈夫か！？」

そう言うってツバサも現れる。

「ツバサ！ でも何で！？ ドスジャギイはあっちに居るんじゃ……」

……

「話は後だ！ とりあえずまずはペイントしよう。」「

ナギサの言葉を遮ってツバサが言う。

「えーとー……うん、確かにまずはペイントしなきゃ。」「

そう言うってナギサはルドロスボウ？を展開しポーチの中からピンク色の液体が入った小ビンを数本取り出す。

「あつた！ ペイントビン！」

そう言うと展開してあつたルドロスボウ1の真ん中にある矢を番える部分にある装着口にビンをセットし、矢を番えて引絞る。

「シュート！」

その声と共にナギサは矢を放つ。

「ギャウ!？」

放つた矢が当たり突然の衝撃にドスギャギイは戸惑う。

その瞬間強烈で独特の臭気が辺りに広がる。

今ナギサが放つた矢にはペイント能力があつたのだ。

ペイントとは戦闘から離脱し他のエリアに向かった大型モンスターの行方を匂いにより探す為の行為だ。

このペイントビンの他にもボウガン用のペイント弾や全ハンターが使用可能なペイントボールなどでも可能だ。

「よし！ ペイント完了だな！ ナギサはジャギイのから竜車を守ってくれ！ 俺はドスジャギイの相手をする！」

「うん！ 分かった！ 終わったら援護するから！」

ナギサがそう言って弦を引絞り出した。

「クルペッコがこつちに来る前に何とかしなきゃな……。しかねーから一氣に決める!!！」

そう言つてツバサはポーチの中を漁り黄色いビンを取り出す。

そしてそのビンの中身を一息で飲み走り出す。

今飲んだ物は強走薬だ。

強走薬とは飲んだ者の脳に作用しアドレナリンを限界まで体中に行渡らせる薬だ。

それにより一定時間の間息が上がらなくなりスタミナの消費をしなくなる。

さらに双剣使いにとっては鬼人化時の脳への負担を軽減……。ではなく麻痺させる効果もある。

ツバサはドスジャギイの元へ着く少し手前でジャギイファンクスを抜き放ち、それ天高く掲げ シャラン と二つの刃を擦り合わせ

る。

「鬼人化……」

そう呟くとツバサの全身から赤いオーラが溢れてきた。

「おりゃー!!」

その掛け声と共に右の刃を袈裟掛けに振り下ろし左へ右へと刃を流れる様に躍らせる。

「ギャウー!!」

この連撃に耐えかねドスジャギイのが思わず仰け反る。

「まだまだー!!」

二回転斬りの直後二本の刃を胸の前で構え斬り払いを放ち、そこから先ほどの連撃に繋げる。

するとドスジャギイに数本の矢が降り注ぐ。

「こつちは終わったよー!」

今の矢はナギサが放った物だったようだ。

竜車から少し近づいて来ている。

「一気に決めたいから麻痺ビンで頼む!」

「うん! 分かったー!!」

そう言うとナギサがポーチから今度は黄色い液体が入った小ビンを取り出す。

それを弓にセットして矢を放ち始める。

「ハッ、ヤッ、ハッ、シュート!」

掛け声と共に放った矢がドスジャギイに突き刺さる。

「よし! 俺も!」

そう言ってツバサも連撃を再開する。

「ギャー!? ギャアアアアア……!!?」

突然ドスジャギイの動きが止まりピクピクと痙攣しだす。麻痺ビンの効果が効いた様だ。

「今だよツバサー!!」

「言われなくても分かってる!!」

そう言うとジャギイファンクスを握る手にさらに力を込め、左右の

腕を限界速で動かし斬りつける。

「まだだ!!」

そう言うとツバサは再び乱舞を放つ。

「ギヤアアア!」

ドスジャギイが吹っ飛んで行った。

(やったか……?)

しかしツバサ予想裏切りドスジャギイは再び起き上がった。
麻痺状態からも脱して痙攣も止まっているようだ。

「どんだけ体力あるんだよ……。つーか前倒した奴はこの位で倒せたよな……?」

ツバサが少し辛そうに呟く。

強走薬の効果は少し前に切れていたからだ。

その上、

「ワオーーー! ウオウ、ウオウ、ウオウ!」

ドスジャギイは頭を持ち上げて鳴き出した。

その鳴き声を聞きつけて新たに十頭以上のジャギイが現れた。

「こんなに……、」

ナギサが啞然とした様子で呟く。

バサ、バサ、バサ、バサ

これだけ酷い状況で奴は狙いすました様に現れた。

「クオーーー! クルルル……」

「「彩鳥……クルペッコ……」」

ツバサとナギサの絶望の声が重なる。

「クオーーー!」

クルペッコが竜車の方へ走り出す。

「マズイ!!」

竜車の中には荷物の他にも多数の人が乗っている。

クルペッコがもし人を襲わなくても今度はジャギイ達が襲い出すだろう。

「クルアーーー!!」

クルペッコが竜車に襲いかかる。

しかし、

ザシユ

「クアーイー!!?」

何かがクルペッコ翼をを斬り裂いた。

よく見ると紅い大剣のようだ。

「ガツはツはツは!! 大丈夫かい? 嬢ちゃん達?」

そう言っ出て来たのは白のシャツに深緑色のズボンに先ほどクルペッコを斬った大剣と言う格好で、髪は白髪交じり筋骨隆隆と言った人物だ。

13・出現クルペッコ VS ドスジャギイ（後書き）

Z Z Z Z Z ……、

ナギサ：「寝てるね（汗）」

ツバサ：「学校で寝ないように今寝ろって親に怒られたそうだ（汗）」

ナギサ：「なるほど（汗）」

ツバサ：「っつーかイナズマの奴何処行ったんだ？」

ナギサ：「あれ？ ダメ作者がなんかメモみたいの持ってる？」

ツバサ：「ん？ どれどれ……、」

イナズマはこの次の話のネタバレをする可能性があった為強制送還した

ツバサ&ナギサ：「……………」（汗）」

14・V S クルペッコ 遂に決着？（前書き）

今回は急いでいるので前書きは省きます!!

ツバサ：「？ なんでだ？」

究極神団先生に今日中（1日）更新するって言っちゃたから!!

それでは本編どうぞ！

早く後書き書かなきゃ（焦）

ツバサ：「……………」（汗）

14・VSクルペッコ遂に決着？

「がッはッはッは！！ 大丈夫かい？ 嬢ちゃん達？」

そう言いながら竜車から暑苦しい雰囲気の壮年の男が降りて来た。

「おう！ そのクルペッコ！！ お前なかなかいい面してるな！
しかーし、ワシが居るからにはこの竜車には指一本触れさせん！
！」

謎の男はクルペッコに向き直りドスの効いた声で突然啖呵たんかを切った。
クルペッコも謎の男を暫し見つけ返し

「クルアアアアアア！！！」

と一声あげて徐おもむきに飛び上がり逃げていった。

「誰??」

ツバサ達の第一声はそれだった。

さすがにいきなり現れてあんな風にされてはこの位しか返す言葉はない。

「ん？ ワシか？ ワシはツv……」

男が言おうとしたその時、

「師匠!？」

ツバサ達の後ろから驚いた様な声が聞こえた。

二人が振り返るとそこにはイナズマがいた。

「え？ 今何て言ったの？」

ナギサが確認しようとする。

「は？ いや、オレは普通に師匠って……。 つつーか二人共どー
したんだ？ 口開きっぱなしだぜ？」

イナズマの言う通り二人共眼を見開き開いた口が塞がらなくなっていた。

「えっと……今、あのオッサンの事師匠って言ったのか？」

ツバサが眼を見開いたまま聞く。

「ああ、そうだぜ……って、そんな場合じゃねーだろ！！ 来るぜ！！」

イナズマの声によって正気に戻り二人共再度武器を構える。
ツバサ達の目前にドスジャギイが迫ってくる。

「おりゃ！」

ツバサがジャギイフアングスを胸の前で構え斬り払いを放った。

「まだまだー！！」

そのまま右の刃を袈裟掛けに振り下ろす。

さらに左を回る様に斬り下げ右で突き勢いよく斬り下ろす。

「グ、ギアアアア……。」

これによりドスジャギイが絶命した。

「おし！ 一丁上がり！ さて後はジャギイだけが……。」

しかしジャギイ達はリーダーがやられた事にキョロキョロと周りを見回しうろたえているようだ。

「ギヤウ！」

「……ギアア！」「……」

一匹のジャギイが逃げを決め込むと同時に他のジャギイも逃げた。
った。

「よし！ 師匠！ そろそろこっち来てくださいッス！ こ

れからの作戦を練ろうと思うんで！」

とイナズマが師匠（？）に向かって声を掛ける。

「おう！ 待つてる！ 今行く！」

とドスの効いた声で返す。

「さて……まずはどうする？」

と師匠（？）が聞く。

「ちよつと待て！ アンタは一体何者なんだ？ まだイナズマの師

匠って事しか分かってねーんだけど……。」

師匠（？）の質問を遮ってツバサが聞いた。

「ん？ ああ説明がまだだったな……ワシはツヴァイ村漁業団体・

大漁団の頭をやっておる者だ！ 名前はゴードン・ブレイブと言っ
のだが……まあ、ワシの事は親方とでも呼んでくれ！！」
親方が名乗る。

「へ……。 って事はあたし達と入れ替わりでロックラックの街
に行ったって言うのは親方なんだ！」

とナギサが頷きながら言う。

「ああ！ ワシがそうだ！」

実は二人とも村長から親方の存在は聞かされていた。

しかしその話を聞いたのは村に着いてすぐに聞いたのですっかり忘
れていたのだ。

「ところで親方、その大剣は一体何なんだ？ クルペッコが一撃
で仰け反った様だったけど？」

ツバサがもう一つの疑問を聞く。

「おう！ こいつは 焰剣リオレウス ワシの自慢の一振りだ！！」
親方が自信満々で言う。

「焰剣リオレウス！？」

ツバサが驚く。

「え？ な、何？ 何なの？」

ナギサも驚く。

しかし此方はツバサが突然大きな声を出した事にのようだが。

「あのな、ナギサ、焰剣リオレウスって言ったらリオレウスの素材
を使った上位武器だぞ！」

ツバサが説明する。

「え〜！！ 上位リオレウス！？ 通りで強い訳だ！」
どうやらナギサもやっと話を理解したようだ。

「ガッはッはッは！！ まあ、ある程度はこのバカ弟子の与えたダ
メージもあるだろうがな！！」

そう言っってイナズマの背中をバンバンと叩く。

「痛いッスよ、師匠……。」

そう言いながらも誉められて嬉しい様になっているイナズマ。

「ところでそろそろ作戦について話さないツスか？ 師匠。」

話を元に戻そうとイナズマが言った。

「おお！ そうだったな！ で、どーするんだ？」

親方が聞いてくる。

「まずはオレとツバサでクルペッコを何とかした方がいいと思うんす。 奴は童車もとい積荷の魚が目的っぽいから、もしかしたらこの狩場を通り過ぎてても執拗に追っかけて来る可能性が高いと思うんすよ。」

イナズマが説明をする。

「なるほど……でもモンスターがそこまでするか？ むしろ誰か一人が足止めだけに徹して商隊の護衛に人数を割いた方がいいんじゃないか？」

ツバサが自分の意見を言う。

「いや、何でかはわかんね けど奴は他のクルペッコより知能が高いっぽいんだ。 奴なら追いかけて来ても不思議じゃねーぜ。」

イナズマがツバサの意見を否定する。

「そっか……じゃーどうする？ さっきは仕方なかったからナギサ一人に任せただけ俺もナギサも一人で護衛できる技術は持ってない、イナズマのアサルトアックスも動きが鈍いから護衛にはあまり向かない、となると護衛には最低二人は必要だ。 けどイナズマ、お前一人であるのクルペッコの相手は出来るか？」

ツバサが聞く。

「うーん……いつもクルペッコならともかく奴相手じゃさすがに自信ないぜ……。」

イナズマが言葉通り自信なさげに言う。

「はあ……となると……。」

「だったらワシが代わりに商隊の護衛をやるっか？」

ツバサが悩んでいると親方が突然声を上げる。

「え！？ いいの！？ でもまずいんじゃない……。」

これまで話に参加しなかった……いや、出来なかったナギサが聞い

てきた。

「問題ない！！　ワシもあの商隊にはずいぶん世話になったしこれなら丁度いい恩返しになる！！」

親方が相変わらず自信満々で言う。

その自信は一体どこから出てくるのだろうか？

「分かった、じゃあ作戦通りいくぜ！　頼むツスよ、師匠！！」

「おう！　ワシに任せとけ！！」

親方が自信満々で答える。

「なあイナズマ、本当に任せて大丈夫なのか？」

ツバサが少し不安そうに聞いてきた。

現在ツバサ達は先ほど荒れ地から泥沼があるエリアに向かっていた。ここはその二つのエリアを結ぶ細い道だ。

ちなみにペイントはしてなかったが親方が自分の持っていた　千里眼の薬　を分けてくれたのでそれを使って調べた。

「確かに焰剣リオレウスは強いけど大剣じゃお前より動きが鈍い。

となると危険だと思うんだが……。」

ツバサがもつともな意見を言う。

確かに大剣は一撃の破壊力がある代わりに動きが鈍い。

それならば護衛などの場合は相手の動きに付いていくだけでも難しいはずだ。

しかし、

「ツバサ、お前そんな事心配してのか？　だったら問題ねーぜ！

今は現役引退しちまったが昔は大陸一の大剣使いとして結構有名だったんだぜ！！　護衛だって何回もこなしたんだ、まったく問題ねーよ！」

と、自分の事の様に嬉しそう言う。

「へ〜……。大陸一ねえ……。それなら大丈夫なんじゃない？　ツバサ。」

ナギサもその言葉に追従する。

「うん……まあ、それなら安心だな！」
ツバサもやっとな安心したように頷いた。

「クウオー……！！　クルルル……」

クルペッコが今日何度目かの威嚇をしてくる。

「いくぜ！」

「うん！」

「ああ！」

三人はそれを合図にそれぞれの武器を構えて動き出した。

「シユート！」

まずはナギサがルドロスボウ？を引絞り矢を放つ。

「クアア！！！」

全て命中した。

「おりゃ！」

続いてツバサがクルペッコに走り寄り斬り払いを放つ。

「まだまだ！」

そのまま斬り上げ　斬り下ろし1・2・3　回転斬りと連携を繋げる。

「俺もいくぜ！！！」

イナズマもクルペッコのもとに着き、ツバサの連撃と入れ替わりにアサルトアックスを振りかぶって縦斬りを放つ。

「オラアア！！！」

そのまま横斬り　斬り上げと連携する。

「クアア！」

そこまで喰らってからクルペッコも慌てて後ろへ飛び上がる。

「こいつ動きにさつきまでキレがない！　もしかしたらそろそろイケるかもしれないぜ！」

イナズマの言葉でツバサ達の顔に笑顔が見える。

「よし、ナギサ！　さっきの麻痺ビンまだ残ってるか？」
ツバサが聞く。

「え？ うん、幾つかは……。でもさっきので何本が使ったから効くかどうか分かんないよ！」

ナギサが少し焦ったように言答える。

「なんでもいい！ 今はとにかくなんでもやってみる！」

「うん、分かった！ やってみる！」

そう言っただけでナギサはポーチから麻痺ビンを取り出しルドロスボウ？ にセツトする。

「ハッ、ヤッ、ハッ、シユート！」

ナギサが弦を引絞り矢を放つ。

「よし！ オレ達もいくぜ！」

そう言っただけでイナズマが再び攻撃を開始し始める。

「こうなったらここで一気に決めるか……。」

そう言っただけでツバサはポーチから再び強走薬を取り出し一気に飲み込む。

そこからジャギイファンクスを抜き、天高く掲げ シャラン と擦り合わせる。

「鬼人化……。」

そう言っただけでツバサは再び赤いオーラに包まれる。

「おりゃあああ……！」

そこからすぐさまジャギイファンクスを胸の前に構え斬り払いを放つ。

「うりやりやりやりやー……！」

そこから流れる様に連携を繋げていく。

「ク、クア！？ クアアア……。」

その時突然クルペッコの動きが止まる。

「やった最後のビンで上手く麻痺した！」

ナギサの喜びの声が聞こえる。

「ナイスだナギサ！！ イナズマ頼む……！」

ツバサが声を上げる。

「任せろ！……いくぜ……！」

そう言つてイナズマが前へ突進しアサルトアックスを勢いよく力チ上げる。

「いっくぜー!!!」

突進斬りの勢いそのままアサルトアックスを振り下ろす。

ガチャ、ガチャ…ガコン

斬り下げると同時にアサルトアックスが変形した。

「ヤッ!!! ハッ!!!」

そこから斬り上げ 縦斬りと連携する。

「ラストー!!!」

その掛け声ともクルペッコの頭目掛けて突きを放つ。

「ハアアアアア……」

アサルトアックスの剣身が輝き ギュウンギュウン と音が響く。

「ハアッ!!!」

雄叫びと共にアサルトアックスから ドカン と言う轟音が響き何かが打ち出された。

「クルアアアアア!!!」

その一撃が決まると共にクルペッコは麻痺から脱する。

嘴の先端には星型の傷が見える。

「ク、クア、クルアアア!!!」

クルペッコは翼を大きく広げた。

逃げる気のような。

「逃がすか!!!」

そう言つてツバサはポーチからペイントボールを取り出しクルペッコに向かって投げつける。

ベチャ と言う音がして周囲に独特の臭気が漂う。

クルペッコは気にした様子もなく翼を羽ばたいて逃げ出した。

そのまま飛んで行き見えなくなる。

「よし! 追おうぜ!!!」

イナズマが走り出そうとする。

しかし、

「待って！」

ナギサがそれを遮る。

「どうしたんだ？」

ツバサが頭に疑問符を浮かべながら聞く。

「今まで自動マーキングのスキルを使ってたから分かるんだけど…

…クルペッコは何処のエリアにも向かってないよ！」

ナギサがそう言った。

「ど、どう言う事だナギサ！？」

イナズマが聞く。

「この感じだと……多分そろそろ臭気が追えなくなるよ。」

ナギサの言う通りそれから数分後ペイントの臭気が無くなった。

「コレは……？」

ツバサが不思議そうに言う。

「多分もうこの狩場から逃げたんじゃない？」

ナギサが言う。

「くっそ〜……逃げられたぜ！でも……まあ、いいか商隊は守れ

たし。」

イナズマのその一言で三人は親方と商隊の人達が待っているであろうベースキャンプへ向かった。

しかしその背中少しさびしげだった。

14・V S クルペッコ遂に決着？（後書き）

と言っ訳でどうでしたか!?

親方：「がッはッはッは!! 結局決着はつかんかったか!」

イナズマ：「そうなんスよ（汗） てか変な所で終わってるじゃねーか? どう言っ事だ作者!」

いやー……それは次回に話を繋げる為さ!

イナズマ：「? 何でだ?」

いや、実はまだこの話・クルペッコ編は終わってないんだよ（ニヤニヤ）

親方：「まあ、次回もお楽しみにって事だな!」

あ! それ僕の台詞だっ。

15・ヒウチ!? (前書き)

今回でクルペッコ編遂に完結!!

ツバサ：「今回は早いな。」

ナギサ：「ホントダメ作者にしては凄い早いね。」

イナズマ：「今までで一番早いんじゃないか?」

今回アイディアがほぼ完ぺきにあっ、たし、色々な邪魔も入らなかったしね

ツバサ：「ふん。まあいいや、じゃあアレ言っか!」

全員：「「「それでは最新第15話どうぞ!」「」「」

PS・

今更ですが究極神団先生の「モンスター達の心情」でこのシリーズのスピノフもやっているの、そちらもご覧ください!!

15・ヒウチ！？

「ガツはツはッは！！ そうかそうか、奴には逃げられたか！ まあ、何とかなつたんだしいいじゃないか！！」

親方がツバサ達に「見そうとは思えない慰めなぐさの言葉をかけている。現在ツバサ達は親方と共にツヴァイ村へ戻る船の中にいた。

「でもあんな決着じゃ納得なんてできないッスよ！」
イナズマがそう言う。

それにはツバサとナギサ同じ気持ちだった。

今回はあくまで護衛が目的だったので依頼事態は達成した事になる。しかしツバサ達にとって初めてモンスターを倒す事に失敗したのだ。悔しくない筈がない。

「まあ、しかたあるまい！ 今回駄目でもまた次があるじゃないか！！」

親方が尚も慰めようと奮闘する。

まったくそうは観えないが。

それから三人は一言も口を開かず重い空気のまま（親方以外）ツヴァイ村まで帰って行った。

それから一週間後

「フウ……今度こそクルペッコ倒せたな！」

一週間前と同じ船には、あの時とは違い笑顔の三人が居た。

実は三日前にギルドからカラクルト砂原で再びクルペッコが出現したとの報告があり、早速狩りに行って見事討伐に成功したからだ。

「でも今回は楽勝だったぜ！ 此間のクルペッコみたいのじゃなく普通の奴だったしな！」

イナズマが楽しそうに言う。

「まあ、此間の奴じゃなかったけど倒せたから満足したよ！ やっ

ぱり狩れると嬉しいね!」

ナギサも無邪気にはしゃいでいる。

それだけ嬉しかったのだろう。

「よし! これで俺も新しい武器が作れる! シャルナ姐ねえさんに早速素材持ってこう!」

ツバサは二人ほどはしゃぎはしなかったが一番嬉しそうだ。

新しい装備を手に出れると言うハンターとしてはこれ以上ないほど状況だからだろう。

「アレ? ちょっと待って、二人とも! 港に何かいるよ!」?

そろそろ村に着くと言う時になってナギサが声を上げた。

「ん? 本当だ! ってかアレって……、」

〽それから数十分後〽

「師匠——!! 大丈夫ツスカ——!!」

イナズマが船から駆け降りて行った。

先ほど観えたのはなんとクルペッコと親方がにらみ合っている様子だったのだ。

良く見ると嘴くちばしに星型の傷がある、此間のクルペッコだ!

しかし、

「おう! イナズマか! どうした? そんなに慌てて?」

親方がそう言って手を振ってくる。

その親方の方にクルペッコが走り寄った。

「師匠!! 危ない!!」

イナズマが怒声を上げる。
だが、

「クアアアア」

クルペッコがそう鳴きながら親方にすり寄る。

「は!」?

「何コレ!」?

船から降りて来たツバサとナギサもこの状況を戸惑った様に見てい

る。

「クルルルル……」

クルペッコは尚も親方にスリ寄る。

「し、師匠？ コレは一体どういう事ツスカ!?」

イナズマが目を見開いたまま聞く。

「ん？ ああ！ こいつの事か！ こいつはヒウチ！ これからワ

シと一緒に暮らす事になった!!」

親方がサラっととんでもない事を言い出した。

「一緒について……なんでツスカ!?」

イナズマが口をパクパクとさせながら聞く。

「いや、丁度お前らが狩りに出て行った日にな……、」

そう言っつて親方が話し出す。

三日前

「クオー……!!」 クルルルル……」

ツヴァイ村の港にクルペッコが現れた。

そして何かを漁り出した。

「クアア!!」

港に水揚げされた魚を狙っているようだ。

「ガツはツはツは!! お前あの時のクルペッコだな!」

クルペッコが振り向くと親方が高笑いをしていた。

「我が弟子の話では相当ダメージを負ったと聞いていたが……、お

前なかなか根性あるな!!」

親方が楽しそうに言う。

「気に入った!! お前今からワシと一緒に漁にこんか?」

そう言っつて親方はクルペッコの尻尾をむんずと掴み船に乗り込んだ。

時間は現在に戻る

「……と言っつてだ!」

親方が自信あり気に話した。

相変わらずこの自信はどこから出てくるのか。

「え〜と〜……つまりどう言う事だ？」

ツバサが頭に疑問符を浮かべながら聞く。

まあ、当然の反応だろう。

「まあ、いいんじゃない。どっちも嬉しそうだし。」

ナギサが若干諦め気味に言う。

「ん……まあ、そうだな……。」

結局ツバサも諦めたようだ。

15・ヒウチ!? (後書き)

と言う訳で今回仲間になったヒウチです! どうぞ!!

ヒウチ:「こんにちは! 僕ちゃんクルペッコのヒウチです」

でもなんで親方と仲良くなったの?

ヒウチ:「それは……まだ秘密だよ」

え? なんで?

ヒウチ:「作者さんが考えてないからでしょ (汗) 究極神団先生に丸投げして!」

うっ……それは…… (大汗)

え〜と〜……と言う訳で究極先生!

お願いします!!

ヒウチ:「僕ちゃんの為にもお願いします (ペッコ)」

16・工房と姐(ねえ)さん(前書き)

新シリーズ突入です

ツバサ：「前回とは打って変わって少し遅れ気味だな。ダメ作者。」

「

ナギサ：「なんで今回は遅めなの？　ダメ作者！」

グフツ、さすがに両方に言われると堪えるな(汗)

で、今回遅れたのは丁度シリーズの境だから今の内に新たに読もうとしていた小説を讀んでいて執筆してなかったからだ！

でも執筆自体は今日中にやった！

イナズマ：「ふん……。ところで今回のタイトルからして、もしかしてあの人が出てくるのか？」

うん！　まあね

エドガー：「ちなみに僕も久々に出るニヤ！」

ツバサ：「エドガー！　俺達は良く会ってるけど本編に出てくるのは久々だな！」

エドガー：「そうニヤ！　なんで僕の出番はこんなに少ないのニヤ！　酷いニヤ！（涙目）」

はう……。ちよつと可愛い。

ごめんよ〜エドガー(焦)

でもキツチンアイルーだから書く機会があんまりないんだよ（謝）

エドガー：「とにかく次回からはもっと僕の出番を増やすニヤー！」

ま、まあそれはどうなるか分からないけど（汗）

エドガー：「ニヤ、ニヤんだと！？ 何でニヤー！！」

え〜と……、

では第16話始まりま〜す（汗）

エドガー：「コラー！！ 逃げるんじゃニヤ〜い！！！」

イナズマ：「てかこの作者逃げてばっかだぜ（汗）」

16・工房と姐(ねえ)さん

ヒウチがツヴァイ村に来てから三日後。

いや、正確にはヒウチがツヴァイ村に来た事をここの村のハンター達が知ってから三日後。

早朝のツヴァイ村に、

トンテンカン、カーンカーン、トンテンカン、カーンカーンと軽快な音が響く。

ここはツヴァイ村の隅の方にある鍛冶屋の小屋だ。

まあ、小屋と言っても結構な広さがあり村の中でも酒場の次に大きな建物なのだが。

「おーい！ シャルナ姐^{ねえ}ー！」

そこに少年と少女が元気良く入ってきた。

二人とも防具を着ている。

少年の方が紫色の防具、少女の方は青と白の服のドレスのような見た目の防具だ。

「おや？ ツバサ君にナギサちゃんかい？ ちょっと待ってね、ツバサ君のはもう少し掛かるから……。」

この工房の主である女性……シャルナは炉の方を見たまま答える。

「……よし！ 最終調整完了！ 後はそこに置いて自然に冷えるのを待つだけだね。」

そう言いながらシャルナは炉から二本の剣を取り出した。

まだ熱を帯びて赤く輝いている為どんな色をしているか分からないが、剣の先が峰^{みね}ではなく刃の方に向かって反り返っている。

使い方はおそらく獲物に当てる時に引っ掛けるようにして斬りつけるのだろう。

「ツバサ君のは冷めるまでもう少しだけ待っててね。」

シャルナが額の汗を拭いながらそう言う。

「分かった。」

「いつもありがとうね、シャルナ姐！」

ナギサとツバサが感謝の気持ちを入れて言う。

「いやいや、これはアタイの仕事だし礼には及ばないよ。」

そう言いつつも少し照れ気味のシャルナ。

「あ！ そうだった！ ナギサちゃん、あなたの武器はちゃんとできてるわよ！ 今、持つてくるわね！」

そう言つてシャルナは工房の奥の方に取つて返す。

それから数分後

「お待たせー！ 少し中散らかつてたから見つけるのに手間取っちゃったのよ。」

シャルナがそう言いながら大きな風呂敷に包まれた物を持つてくる。「待つてました！ いやー楽しみー」

ナギサが嬉しそうに軽くスキップしながらシャルナに近づいていく。ツバサもナギサの様子に苦笑しながらついていく。

「じゃあお披露目するわよ！ じゃーん！！」
そう言つて風呂敷に包まれた物をテーブルの上に置き包みを外した。

「うわー！ 凄い！ さらにかなり良くなつてるー」

ナギサが包みから出てきた弓を持ち構えてみる。

「……え〜と〜……ナギサ？ どう良くなつてるんだ？ 俺には預けた時と同じに見えるんだが……。」

ツバサが引きつった顔をしながら聞く。

ナギサが持つている武器はどこからどう見てもただのハンターボウだったからだ。

「うふふふ、まあ分からないわよね。 見た目は変わってないんだし。」

聞かれたナギサではなくシャルナがツバサの質問に答えた。

「これはハンターボウ？ だよ！ 確かに見た目は変わってないかもしれないけどあたしには雰囲気とか持ち心地で分かるの！！」

ナギサが追従する。

「分かつた分かつた。」

ツバサは少し面倒くさそうに答えた。

「ところで二人とも、確か村長呼んでたはずだけどいいのかい？」
シャルナが聞く。

「うん、確かに呼ばれてるけどそんなに急ぎじゃないみたいだから大丈夫！」

ナギサが答える。

「でもあんまり遅いのも悪いよな……。シャルナ姐ねえ、俺の武器まだダメか？」

ツバサが少し焦り気味に聞く。

「う〜ん……。まだ少し熱は残ってるけど……。まあ、すぐに使う訳でもないだろうし……。いいよ！ 持ってきな！」

シャルナは先ほどの剣の様子を見てから持つていく事を許可した。そして先ほどの剣を持つてきた。

ある程度冷めた為先ほどは分からなかった姿が見える。

緑と藍あおの二色の羽・彩鳥の羽根や極彩色の羽根で彩ったカラフルな双剣だ。

「ありがとう！ おお！ これが ペッコフェザー か……。」

そう言つて受け取つた剣を軽く構えてみる。

「あ！ 構えるのはいいけど振っちゃダメだよ！ まだ熱が抜け切れてないから少し脆いんだよ！」

シャルナが注意の声を上げる。

「そ、そうか気を付ける。」

そう言つてツバサがペッコフェザーを背中にしまつ。

「じゃあ行ってくるね！ シャルナ姐ねえ、ほんとにありがとう！」

ナギサがそう言つて工房を出ていきツバサもそれに着いていく。

「また武器を作りたくなったらいつでも来なさいよー！」

そう言つてシャルナが送り出してくれた。

それからしばらくして

「おはようございま〜す！ 村長〜、あたし達への用つてなんです

か〜？」

ナギサがそう言いながら元気良く酒場に入っていく。

「ニヤ！ やつと来たニヤ！」

そこに現れたのはアイルーのエドガーだった。

「あれ？ エドガー？ 村長じゃないの？」

ナギサが不思議そうに聞く。

「村長なら他の用事で居ないぜ！」

今度はイナズマが答える。

「と言う訳で僕が代わりに伝令役に任されたのニヤ！」

エドガーがイナズマの言葉に付け足す。

「へ〜……そうなんだ〜。」

ナギサが感心したように言う。

「なんでもいいから早い所その用つてのを教えてくれないか？」

ツバサが少し焦り気味に言う。

早く先ほど出来たばかりのペッコフェザーを試したいのだろう。

「ツバサ、少し落ち着くニヤ！ では……まずはここ最近ガルベ

ルト熱帯林にロアルドロスが出現したのは知ってるニヤ？」

エドガーが話し始めた。

「ああ、俺達も早く討伐に行こうと話していた所だ！」

ツバサが答える。

実は今回作ったペッコフェザーもロアルドロス討伐の為に作ったものだ。

ロアルド罗斯は火の属性に弱いのだ。

「そりゃそうだニヤ、ツバサは前々から狩りたいと言ってたしニヤ！」

ロアルドロスから取れる素材の中に「狂走エキス」と言う物がある。

狂走エキスとは、先日ヒウチと対峙した時にも使ったアイテム「強走薬」の強化版である「強走薬グレード」を作る為の素材だ。

その為ツバサは以前よりロアルドロスの討伐を考えていたのだ。

「そのロアルドロス狩りなんだけどニヤ……出発を少し待って欲しいのニヤ。」

エドガーが少し言わずらそうに言う。

「え？　なんで？」

ナギサが聞く。

「それがだニヤ……実はこの依頼は他にも受けたいと言っているハンターがいるらしいのニヤ。」

ツバサ達が酒場で話をしている頃、

ツヴァイ村に一艘いっそうの大きな船が向かって来ていた。

「乗せて頂きありがとうございます、船長。」

一人の女性……いや長身の為分りにくい少女だ。

その少女が目の前にいる竜人族の男にお礼を述べる。

竜人族と言うのは人間に似た姿をしているが大きな尖った耳や大きな鼻などを持ち、人間よりも遥かに広い知識を持っている長寿の一族だ。

「別に礼には及ばんぜヨ！　フッフ、潮風がワシを呼んでいるぜヨ！」

船長と呼ばれた竜人族の男がそう言う。

「ああ、早く「彼」に会いたい。」

少女が呟いた。

16・工房と姐(ねえ)さん(後書き)

と言う訳で久々の登場、シャルナ姐ねえです!!

シャルナ：「アタイの事忘れてた奴は名乗りでな！ 別に怒りはしないから(怒)」

とか言いつつ明らかに怒ってるじゃありませんか(汗)

シャルナ：「ところで最後に出て来た女の子は誰だい？ 船長の方はわかるけどさ」

それは……秘密です

シャルナ：「まあ秘密なら仕方ないけどさ。でもあの子の言った「彼」ってのは誰なのかくらいは教えてくれない？」

フッフッフ……これだけは特別に教えてあげましょう(嫌な笑顔) 耳を貸して下さい。

シャルナ：「ナニナニ………ええええええええ!!! それってマジなの!? てかそれアリ!？」

フッフッフ読者の方々には秘密ですよ(嫌な笑顔)

17 交易船入港！ 陽気な船長と気弱な少女（前書き）

ツバサ：「つつー訳で最新話だ！」

ナギサ：「今回は前回に引き続き村での話だよ！」

ツバサ：「また村の話か……早く狩りに行ってー！！」

ナギサ：「そう言えばまだベッコフェザー試してなかったもんね（汗）」

ツバサ：「そうなんだよ！早く使いてー！！」

イナズマ：「ところで作者はどうした？」

ナギサ：「あ！そう言えばダメ作者が居ない！」

ツバサ：「何でだ？」

イナズマ：「お！なんかメモみたいなものがあるぜ！」

三人：「「「どれどれ……？」」「」」

今回ちょっとテンションが下がってる為、前書きには出ません！
代わりに後書きの新キャラ紹介には復活して出てきます。

風の双

剣使い

三人：「「「……………」（汗）」」「」」

ツバサ：「えっと……（汗） どうする？（汗）」

ナギサ：「え〜と……（汗）じゃあ……（汗）」

イナズマ：「とりあえずいつも通りでいいじゃないか（汗）」

三人：「『『『それでは最新第17話どうぞ……（汗）』』』」

17・交易船入港！ 陽気な船長と気弱な少女

酒場での話から三日後、

「交易船が来たぞ〜！！」

村人の誰かが声を張り上げてそう言う。

その声と共に港に巨大な船が入港してきた。

それから一時間ほどして、

「お〜い！ 船長〜！」

イナズマの声が港に響いた。

「おお！ イナズマかゼヨ！」

その言葉を返したのは竜人族の男だった。

上には空色の淵取りふちどりがある白い着物と布製の赤い籠手こて、下は紺色の袴はかまを履いて背中には長大な太刀を背負っている。

「久しぶりだぜ船長！ ニヶ月ぶり位か？」

イナズマが楽しそうに話しかける。

「今回は特に長かったからな〜……。 そうだ！ お主に頼まれておった「雷光虫」も沢山仕入れておいたゼヨ！ 早速交換するゼヨか？」

船長が言う。

「おお！ マジか！ 雷光虫は「シビレ罨」の素材になるから欲しかったんだよな〜 よし！ 早速交換しようぜ！」

そう言ってイナズマがポーチから何かを取り出そうとしたその時、

「あの〜……… すいません。 貴方はここの村のハンター様ですか………？」

弱々しい声が聞こえてきた。

声がした方を見てみるとそこには金色の目をした一人の少女………と
言うべきかどうか迷う人物がすまなそうな顔をして立っている。

それからさらに一時間ほど後、

「遅いな、イナズマの奴!!」

「ホント遅い! すぐに来るって言って一時間以上待たせてるじゃん!」

酒場には少し怒り気味のツバサとナギサ、他にも二人を不安そうに観ている村長とエドガー、その様子に気付いてか気づかずかニコニコと楽し気なジュディの姿があった。

「みんな〜! 遅くなって悪かったぜ〜!」

そう言いながらイナズマが元気良く酒場に入ってきた。

「イナズマ〜!」

早速文句を言おうとツバサとナギサが席から立ちあがる。しかし、

「は、はじめまして! 私、ワカバ・アクエリアと申します。」

そう言いながら先ほど港に居た少女が酒場の中に入ってきた。

ツバサ達は突然少女……ワカバの登場に戸惑って動きが止まる。

ワカバの姿は黄色い厚手のコートの様な防具 ルドロスシリーズ、背中には防具と同じ色の柔らかそうな皮……のような物に覆われたハンマー 水鎚ヴォジャーノイ を背負っている。

どちらもツバサ達が狩ろうとしているモンスター、水獣・ロアルドロスの素材を使った装備だ。

見たところどうやらワカバはハンターのようだ。

「もしかすると君がギルドの言っていたロアルドロス専門家のハンターかい?」

村長がワカバに向かって聞く。

「はひっ! えっと……はい……。私がそうです。」

ワカバが弱々しく答える。

話は三日前に遡る

なかのほ

「他にこの依頼を受けたがってる奴だっ!」

ツバサが驚きの声を上げる。

「そうニヤ！ なんでもロアルドロスの専門家だつて話ニヤ！」

エドガーが説明を付け加える。

「ちよつと待つて？ この依頼はこの村で出された依頼でしょ！
なのになんで他の人が受けようとしてるの！？」

ナギサが訳が分からないと言う風に聞く。

本来この村で発生した依頼はこの村でしか受けられない。

その為他の場所にいるハンターは受ける処か依頼の存在すら知らないはずだ。

「それについてはアタシから説明しまゝす！」

そこにジユデイが割り込んできた。

「まず初めに……この依頼はこつちだけで発生した依頼じゃないんですよ！」

ジユデイが空気を無視してテンション高めで言う。

「は？ と言う事だよ？」

ツバサが頭に疑問符を浮かべながら聞く。

「はい！ 実は今回ガルベルト熱帯林に現れたロアルドロスはこの村だけでなくギルド側でも発見されていたらしく、手違いでギルド側もウチの村のものとは別に依頼を出していたそうなんですよ！」
ジユデイがハイテンションのまま言う。

「なるほど、大体分かってきたぜ。つまりこの村とギルド側の両方で依頼が発生して、他の場所のハンターが俺達とは別にギルドから依頼を受けちまった……つて事だな！」

イナズマが ポンツ！ と手を叩いて言った。

「そうなんですよ！ ギルドから依頼を受けたハンターさんはすでにこの話を聞いていて、こつちさえ良ければ一緒に狩りに行きたいと言っているようなんです！」

ジユデイは楽しそうに言う。

何がそんなに楽しいのだろうか？

「なるほど……ちなみにどの位待てばいいんだ？」

ツバサが聞く。

「あ！ それを聞くって事はOKなんですね！」

ジュデイが一層嬉しそうに言った。

「まあな……二人ともいいよな！」

ツバサがナギサとイナズマに問いかける。

「うん！ あたしはいいよ！」

「オレも構わないぜ！」

二人とも素直に頷いてくれたようだ。

「良かった〜！ ちなみにそのハンターさんが来るのは三日後だそうですね！」

ジュデイが最後までハイテンションで話していた。

時間を現在に戻す

つまり現在ツバサ達の前にいるハンター・ワカバがギルドから依頼を受けたハンターなのだ。

しばらく場が凍ったように全員無言になる。

「え〜と〜……。もしかして一緒に狩りに行くのは嫌でしたか……？」

ワカバが残念そうに言う。

その声は今にも泣き出してしまいそうだった。

「あっ、いやそうじゃないって！ OKだから！」

ツバサは焦りながら言う。

さすがに泣かれてはバツが悪い。

「そ、そうだよ！ 別に大丈夫だってば！」

ナギサも焦りながらなだめる。

「そうですね……よかったです。さっきこの方に同じ事を言った時に睨んだように観えたのでもしかしたら嫌なのかと思ひまして……。」

「そう言ってイナズマの方を見る。」

確かにイナズマの力強い瞳は見ようによっては睨んでいるようにも見える。

事の原因がイナズマにあると分かった二人はイナズマの方を睨んだ。「いや……俺は普通にしてたつもりだったんだけどな……。」
イナズマが少し引きつった顔になる。

「まあ、これから一緒に狩りをするんだ……よろしくな！」

ツバサが顔を元に戻してから言い握手を求め。

「はい！ ありがとうございます！ え〜と……。」

ワカバは握手を返そうとして手が止まる。

「……ああ！ 俺はツバサ・ブルーソウルだ！」

「あたしはナギサ・チュリーハート！」

「オレはイナズマ・ライトニングだぜ！」

三人が自己紹介する。

「はい！ では改めて……ツバサ様、ナギサ様、イナズマ様、よろしく願います！」

ワカバが礼儀正しくお辞儀をしてから再度握手に答えた。

17・交易船入港！ 陽気な船長と気弱な少女（後書き）

と言う訳で新キャラのワカバです！！

ワカバ：「は、はじめまして！ ワカバ・アクエリアでしゅ……。」

あ！ 噛んだね

ワカバ：「すみません！ 私こう言つの苦手で……。」

いいよいいよ！ ワカバはそう言うキャラだからさ！

ワカバ：「え？ そうなんですか？」

自分で聞かないでよ（汗）

ところで「彼」の正体についてはまだ言っちゃダメだけど……、
ヒント位は言ってもいいよ

ワカバ：「あ、はい。「彼」の特徴は青い目をしていていつも「
彼女達」と一緒に居て……。」

ハイ、ストップ！

ワカバ：「えつと……、分かりました。」

これで分かったかな？

ではまた次回！

18・ガルベルト熱帯林（前書き）

最新話です

ツバサ：「テンション高めだなあ（汗）」

ナギサ：「更新少し遅めなのにねえ（汗）」

まあまあ、今回は遂に狩場に到着するからさ！

ツバサ：「お！ やつとペッコフェザーを使えるのか！」

ワカバ：「相手は「彼女達」なんですよね」

ワカバは楽しそうだね

でもあんまりネタバレ的な発言はしないでね。

全員：「「「「それでは！ 最新第18話どうぞ……！」」」」

18・ガルベルト熱帯林

降り続く雨のせいでジメジメとした空気が辺りに漂う。

水没林……この狩場は人々にそう呼ばれている。

正式にはガルベルト熱帯林と言う名のこの狩場はマングローブと呼ばれる熱帯林に覆われており、年中降り続く雨により狩場の半分近くが水の中に沈んでる。

ちなみにツヴァイ村から二日ほど掛かる位置にある。

「……「彼」の行動パターンと対策としては大体今話した通りです……。」

ワカバがジメジメしたこの場とは少し不釣合いな感じがする翠色の綺麗な髪を靡なびかせて言う。

ルドロスヘルムを取ったワカバの髪は春の木々を思わせる明るい翠色、その髪を肩の辺りまで伸ばしてあるセミロングのストレートの左右の端だけ結んだツインテールになっている。

年齢は16歳なので実はツバサ・ナギサより一つ年下なのだが身長はかなり高く、ハンターとしては低めの身長であるツバサが軽くシヨックを受けたのは別の話だ。

ちなみに現在ワカバが背負っている武器は一昨日の水鎚ヴォジャノイではなくクルペッコの素材中心に作られた槌頭が巨大な火打石でできたハンマー フリントペッコ を使っている。

現在ツバサ・ナギサ・イナズマ・ワカバの四人はガルベルト熱帯林もとい水没林のベースキャンプに居た。

「他に何か聞きたい事はありますか？」

ワカバが質問する。

「ワカバちゃん……ちょっといい……？」

ナギサがそーっと手を上げる。

「はい、何でしょうか？」

ワカバが少し不思議そうに聞く。

「あのお……何度も聞くけど「彼」って言うのはロアルドrossの事でいいんだよね……。」

ナギサが苦笑しながらその場に居る全員が聞きたいであろう質問をした。

「はい！ その通りです！ ……「彼」は本当に素晴らしいですよ！ あの愛らしいお顔、モフモフとしたタテガミ、それからそれから……。」

ワカバがうつとりとした顔で話す。

実を言うと先ほどまで乗っていた船の中でも同じような話をしていた。

ハンターをしている者には変わり者が多いと言われている。

強大な力を持ったモンスター達に勇敢に立ち向かっていくのだから当然普通の神経ではやっていけない訳がないと言うのが主な理由だ。

変わり者の多いハンターの中でも特に変わっているとされる者達、特定のモンスターへの愛着が異常に強いハンターが稀にいる。

どうやらワカバはその内の一人のようだ。

「……ああ、やっぱり「彼」ほど素晴らしいモンスターはいませぬね。」

話し始めてから約30分、やっと話が終わったようだ。

よくここまで話が続くものだ。

「え」と……ワカバそろそろいいか……？」

ツバサが若干呆れ気味に聞く。

「はい！ それでは行きますか！」

ワカバが元気に応える。

ロアルドrossの話の前後は本当に楽しそうだ。

「じゃあ行くぜ……。」

イナズマの声とともに四人はベースキャンプから出ていく。

「お！ あれは……。」

「どうやら「彼女達」が集まっているようですね……。」「
ツバサとワカバが小声で話している。」

四人は現在ベースキャンプを出てすぐのエリアにいた。
このエリアには今、十数匹のルドロスが密集している。

「……てかワカバちゃんルドロスの事も「彼女」とか言うのか……。」「

ナギサが誰にも聞こえないよう小声で言った。

「確かサブ依頼でルドロスの間引きつてのもあったな……。」「
ツバサが思い出しながらそう言う。

「……じゃあ今の内に狩つちまおうぜ。」「

イナズマの意見の全員が頷く。

その後一度ルドロス達から少し距離を置きコソコソと話し始めた。

四人はルドロス達に気づかれないように足音を忍ばせて近づいていく。

「ギャオー！」

一匹のルドロスがツバサ達の存在に気づいたようだ。

「……ギャオ、ギャオー！」

そこから一気バレたらしくルドロス達が一斉に臨戦態勢になる。

「ちっ、バレたか……。仕方ねーからいくぜ！」

「おう！」

「うん！」

「はい！」

イナズマの掛け声とともに4人はそれぞれの武器を構えた。

「おりゃ！」

まずは四人の中でもっとも機動力のあるツバサが浅く斬りかかりルドロス達の注意を引く。

「シユート！」

その後ろではナギサが援護射撃をしている。

この二人の動きによりルドロス達は混乱して動けずにいるようだ。

「ハアアア……」

ワカバはフロントペッコを腰の辺りで構え気合を溜めている。
ハンマーと言う武器は気合を溜める事で強力な一撃を放つ事ができるのだ。

「いくぜー!!」

そこにイナズマが割って入り斬り上げ 縦斬り 横斬りと連携を繋げる。

これにより数匹のルドロス倒す事に成功した。

「いきます!!」

その掛け声とともに今まで攻撃していたツバサとイナズマはいち早く密集地帯から離脱する。

そこにこれまで気合を溜めていたワカバがルドロスが密集している処へ突っ込んでいき、自分を軸として体ごと回転し始めた。

フロントペッコを放り投げるのではと言うほどの勢いだ。

これは俗に回転攻撃と呼ばれる攻撃だ。

ハンマー使いは本来その重量故連続で攻撃するのを苦手とする武器だが、この様に回転して連続で打撃を叩きこむ事でその弱点を克服した攻撃とも言える。

ワカバとイナズマの活躍で一気のルドロスの匹数が減り残るは四匹だ。

これをそれぞれ一人ずつ相手をして全部倒す事に成功した。

「ふう……何とか上手くいったね〜!」

ナギサが元気良く言う。

実を言うと四人の動きは先ほど話しあつて予めあらかじめこう動く決めておいた動きなのだ。

ツバサが遊撃をしてそれをナギサが援護、その間ワカバが気合を溜めイナズマが斬りかかる、最後にワカバの回転攻撃でルドロスの大部分を倒して残りは各個撃破と言う流れだ。

「本当によくここまで上手くいったな……。」

ツバサが感嘆の声を上げる。

確かに見事なまでに作戦通りに事が運んだ。

「皆さ〜ん 早く剥ぎ取りましようよ〜」

そこにワカバの楽しそうな声が響く。

見てみれば目を輝かせて剥ぎ取り作業をしているワカバの姿が在った。

「……本当に大好きなんだな……。」

ツバサが若干引きつった顔で呟く。

ナギサとイナズマを見ると二人も同じような顔になっている。

「早く剥ぎましようつて〜」

ワカバが再びツバサ達を呼んだ。

「……とりあえず行こうぜ……。」

「……まあそうだな……。」

「……確かにそうだね……。」

そう言つて三人も苦笑しながら剥ぎ取りに取り掛かっていった。

18・ガルベルト熱帯林（後書き）

ヒウチ：「……と言う訳で如何でしたか」

え！？ 何でヒウチ！？

ヒウチ：「たまには僕ちゃんも出るって（汗） それに僕ちゃんの再登場を望んでいる声も結構多いみたいだしさ……。」

でも出演予定は今の所ないからねえ（汗）

ヒウチ：「ところでワカバってハンターが言ってた「彼」ってのはロアルドロスの事だったんだね（汗）」

まあね（汗）

19・出現！ 水獣・ロアルドロス！！（前書き）

うがああああああああああああああああ！！！！！！！！！！

ツバサ：「ど、どうしたダメ作者！？」

ナギサ：「な、何で急に叫び出したの！？」

ごめんなさい！！！！m（――）m

イナズマ：「うわ！ 普段使わない絵文字まで使った……（汗）」

ツバサ：「もしかしてアレか？ 投稿するのに時間が掛かったからか？」

……はい……（凹）

ワカバ：「まあ、今回は一週間も掛かりましたからね……。」

そうなんです……（凹）

ナギサ：「今まで一番遅いしね……（汗）」

グッ……（凹）

ツバサ：「しかも文字数も少ないしな……。」

ガハッ！！（吐血）

ツバサ達：「……………」（汗）「

そ、それでは最新第19話どうぞ……………バタツ……………。

イナズマ：「……………力尽きたな……………」（汗）「

19・出現！ 水獣・ロアルドロス！！

ルドロス軍団撃破からしばらくして……、

「何でまだこんなにいるの〜！！」

ナギサの声を抑えた絶叫が聞こえる。

ツバサ達は現在先ほどルドロス達を倒したエリアから東へ少し進んだエリアにいた。

このエリアは半分が陸地もう半分は水中となっており、時々ルドロスが水中から突然飛びだしてきたりする為注意が必要な場所だ。陸地には現在またしても数匹のルドロスがいた。

数は先ほどではないがそれでも結構多い。

「いくらロアルドロスがいるつつつても数が多すぎるぜ……」。

「か今までロアルドロスがいてもこんなに沢山一つのエリアに集まってるのは見た事ないぜ。いつもはせいぜい3〜5匹位だろ。」
イナズマが少々驚き気味に小声で言う。

ちなみに現在ツバサ達はエリアに入っただけですぐに茂みのようになっている場所に身を潜めている。

「理由は分かりませんがどうやら今回は普段以上に「彼女達」の活動が活発のようですね。」

ワカバが呟く。

「こうしてもまたすぐにバレるかも知れないし早く倒そうよ。」
ナギサが少し慌てた様子いう。

先ほどはうまくいったが今度もそう易々と倒せるとは限らないからだ。

「そう慌てんなって。……さっきと違ってあいつ等が水中に入る可能性があるな。……3人共、エラマスクを用意しとけよ。」

ツバサが小声で注意をする。

その時……、

「ギャオ、ギャオ、ギャオ、ギャオオオオ！！」

突然ルドロス達の様子が変わった。

「バ、バレたの!?!」

ナギサが不安そうな声をあげる。

「いや、大丈夫だ。 あいつ等はこっちじゃなくて水の方を見てる
っぽい……。」

ツバサがそう言う。

「でも……そしたら何で急に……。」

ナギサが慌て気味に言う。

その直後……、

バシヤアアアン……

「ギユオオオオオ!!!」

甲高い声を上げながら水中から黄色と緑の二色の体の巨体が飛びだしてきた。

「ギヤオオオオオオ!!!」

飛びだしてきたモンスターはそのままルドロス達の中心に着地しもう一度声を上げる。

このモンスターの姿は緑色の鱗に覆われた体に鋭い爪の生えた前足、泳ぐ為にヒレの様になった後ろ脚と長い尻尾を持っている。

一見するとルドロスのように見えるがこの巨体とは不釣り合いな小さな頭にはこれまた小さなトサカ、首の周り特徴的な柔らかそうな見える黄色いタテガミを持っており、ルドロス達と明らかに違うのはその巨体である。

ルドロスですら人間の倍近くの大きさに目の前のモンスターはそのルドロスの三倍近くはあるであろう巨体だ。

「遂に会えましたね……。」

ワカバがうつとりとした顔で見つめている。

「……事はアイツが水獣・ロアルドロスか……。」

ツバサが苦笑しながら言った。

「……さて、このまま見ていてもラチが明かねえ! さっきツバサ

が言った様にエラマスク準備しとけよ！」

イナズマはそう言うと自分のエラマスクを口に着けた。

「じゃあ早速いくぜ!!!」

イナズマの掛け声と共に四人は茂みから出て走り出した。

「まずはルドロスを何とかしないか？」

ツバサが走りながら提案する。

「確かに……。よし！ じゃあまずはルドロスだ！ あとペイントはオレに任せとけ！」

イナズマはそう指示すると走りながらポーチの中を探りペイントボールを探す。

ロアルドロスの目前まで来たところ右腕を振り振りペイントボールを投げつける。

ベチャ

ペイントボールは真っ直ぐロアルドロスに向かっていき、当たると同時に独特の臭気を放ちだした。

「ギユオ!?!」

ロアルドロスは自分の体からする変わった臭いに驚きの声を上げた。

「よし！ ペイント完了だぜ！」

イナズマはそう言うと同時にアサルトアックス抜き放ち目の前にいたルドロスに斬り掛かる。

「まだまだー!!!」

そこからアサルトアックスをカチ上げるように斬り上げてから振り回しに移行する。

「『ギヤア!』」

この攻撃で数匹のルドロスを倒す事に成功した。

「ギヤアアアア……」

イナズマが鳴き声のした方を見てみるとそこにはツバサ達と力尽きたルドロス数匹がいた。

どうやら残りのルドロスも倒したらしい。

「ギヤオ、ギヤオ、ギユオアアアア!?!?!」

ロアルドロスが怒りに満ちた声を上げる。
仲間を倒された事に怒ったのだろう。

「さて！　じゃあここからが本番だぜ！」

「おう！」

「うん！」

「はい！」

こうして四人とロアルドロスの戦いの火蓋が切って落とされた……。

19 出現！ 水獣・ロアルドロス！！（後書き）

……………。

イナズマ：「返事がない、ただの屍のようだ……………」（汗）「

ツバサ：「つつーかダメ作者はまだ力尽きたままなのかよ（汗）」

ナギサ：「確かツバサの「文字数少ない」ってのがトドメだったよね（汗）」

ワカバ：「どうしましょうか……………」（汗）「

ツバサ：「ダメ作者が紙か何かでも持つてればいいんだけど……………」

ナギサ：「あれ？ ホントに紙持つてるよ！！」

ツバサ：「え！？ さっきまで持つてなかったハズなのに……………。
まあいいか！ で何だった？」

ナギサ：「え」と……………」

読者の皆様、いつも以上に遅れてすいませんでした……………m（「

—m（「

ワカバ：「えっと……………これだけですか？（汗）」

イナズマ：「そつらしいぜ……………」（汗）」

20・激戦！ 地上のロアルドロス！（前書き）

どうも〜 風の双剣使いです

テスト勉強で執筆が進まず、結局八日と前回よりさらに遅れました
〜

ツバサ：「……………（汗） 遅れたのになんでそんなにニコニコしてんだよ！」

ナギサ：「ってかどーせ勉強なくても遅かったクセに！」

そうなんだよね〜

何でか分かんないけど狩場にツバサ達が狩場に着くとどうしても執筆ペースが落ちるんだよね〜

別に戦闘シーンが時間掛かる訳でもないのにさ〜

イナズマ：「……………で、一体何でそんなにテンション高けーんだ？」

フフフフ……………。

知ってる人もいるとは思いますが実は僕はある作家さんの大ファンでこの小説を書きはじめたのもその人の影響なんですよ！

ツバサ：「MH小説内の人気がブッチギリで一位の黒鉄大和先生だな。」

ちよっ、まだバラさないですよ！

ナギサ：「で、その黒鉄先生がどうかしたの？」

フッフ、以前より弟子入りの志願をしていたのが遂に……三日前に
遂に弟子入りの許可を貰ったんだ~~~~~!!!!

ワカバ：「良かったですね！」

フッフ（嫌な笑み）、ワカバ

あんまり気を抜いてる場合じゃないよ

今回は弟子入りを期に黒鉄師匠の特技にも手を出して……その役目
を君にやって貰ったんだから！

ワカバ：「え！ それってどういう……」

それでは最新第20話！ 始まりま〜す！

ワカバ：「え？ え？ 一体どういう？……」

20・激戦！ 地上のロアルドロス！

「ギユオオオオオオオ！！」

ロアルドロスの唸り声がエリア中に響き渡る。

ロアルドロスはその後すぐにイナズマの方を向き、前足を引きながら身を屈めた^{かが}。

「飛び掛かりが来ます！ 避けてください！！」

ワカバがイナズマに注意の声を飛ばす。

……と、同時にロアルドロスがイナズマに向かって跳躍する。

「おっと！」

イナズマはそれを前転しながら避け、着地したロアルドロスに肉薄する。

「ヤアツ！！」

そのまま無防備に後ろを向いているロアルドロスの尻尾にアサルトアックスを振り下ろした。

「ギユオウツ！」

ロアルドロスがいきなりの一撃に驚き思わずといった様子で仰け反る。

「よし！ まずは一撃だぜ！！」

イナズマが軽くガッツポーズをしながら言う。

「さつきベースキャンプで話し合った通りオレが尻尾の切断、ツバサとナギサはタテガミを中心に狙った援護・遊撃、ワカバは少し危ね！けど頭を狙ってスタンさせてくれ！」

「おう！」

「うん！」

「はい！」

イナズマが指示を飛ばしその指示に合わせて3人も動き出す。

まずはナギサがある程度接近してハンターボウ4を引絞りタテガミに狙いをつける。

「シュート！」

掛け声と共に矢を放った。

放たれた矢は狙い通りタテガミに突き刺さる。

「ヤッ！ ハッ！ シュート！！」

その後も休む事無くハンターボウ？の弦を引絞り矢を放っていく。

「おりゃ！」

その直後、ツバサがロアルドロスに走り寄り踏み込むようにタテガミに向かって斬り払いを放つ。

「うりやりやりやりやー！！」

そのまま左の剣を斬り上げて右の剣を袈裟掛けに振り下ろし軸足を入れ替えながら斬り付ける、そこから再び軸足を入れ替えながら回るように斬り下ろし最後に回転斬りと言う連携叩きこむ。

斬りつける度に剣身から小さな爆発が起こりその炎がロアルドロスを襲う。

「ギユオオウ！」

ツバサとナギサの怒涛の連撃によりロアルドロスが仰け反った。

その瞬間ツバサ一端回転回避でロアルドロスから距離を開けた。

ツバサの役目はあくまで遊撃の為、余り深追いしないようにしたのだらう。

その直後ロアルドロスが頭を小さく振り上げると横向きに一回転した。

その向きは先ほどツバサがいた右（ロアルドロスから見ると左）側だ。

「危ねー！」

ツバサが緊張したように言う。

もし先ほど回転回避をしなければこの転がり攻撃に巻き込まれていたかも知れないからだ。

「ハアアアア……」

そこに腰の辺りでプリントペッコを構えたワカバがロアルドロスに走り寄っていく。

どうやら先ほどまで気合いを溜めていたようだ。

「ヤアアアアア!!」

ワカバは起き上がるうするロアルドロスの目の前に辿り着くと同時にフロントペッコを振り上げ頭部目掛けてカ一杯振り下ろす。

先のルドロス戦の時もそうだがこの細そうな腕の何処にこれだけの力あるのだろうか？

ワカバは少し顔をしか顰めつつも攻撃を無視して起き上がったロアルドロスの頭に向かって更にフロントペッコを振り下ろしてから回転回避で距離を取る。

「グルルルル……」

ロアルドロスはワカバの動きは無視して一鳴きすると突進を開始した。

狙っているの先ほどから矢をタテガミに放ち続けていたナギサだ。

「余裕、余裕」

ナギサはバックステップで突進してきた巨体を難なく避ける。

ロアルドロスの突進は四足突進の為安定感はあるが代わりにスピードはそれほど速い訳ではないのだ。

「シユート!!」

避けると同時再び矢を放ち気を引く。

気合いを溜めて構えているワカバの方へ誘導しようと考えたのだ。

「グルルルル……」

ロアルドロスは再び一声上げると狙い通り突進を始めた。

その先には突進の進行ルートから少しズレた位置で気合いを溜めているワカバがいる。

「ヤアアアアア!!」

ロアルドロスの突進が終わり次の攻撃移ろうと振り向いた瞬間、ワカバが頭に向かってフロントペッコを振り下ろした。

「ギユオウ!!」

ロアルドロスはその一撃堪らず仰け反った。

「ヤアツ!!」

「おりゃ！」

「シユート！」

その瞬間に他の三人それぞれ自分が狙っている部位に向かって攻撃を叩きこむ。

「ギユオアアアアア！」

度重なる攻撃に堪りかねたロアルドは突進をして隣のエリアへと逃げていった。

「それにしても今日はかなり調子いいな！」

ツバサが少し興奮気味に言った。

確かに今回はいつも以上に狩りがしやすかった。

「多分ワカバちゃんが一緒だからじゃない？ 連携も凄くしやすいし」

ナギサも嬉しそうに言う。

「はひっ！ いえいえ私なんかが入ったからそんなに変わりませんよ！ イナズマ様達のチームワークがあつてこそですって！」

ワカバが真っ赤になりながら大慌てで否定する。

「そこまで否定しなくてもいいじゃ〜ん！」

ナギサが軽くふざけ気味に言う。

「いえ……ですから……その……」

すでに真っ赤な顔がさらに赤くなる。

「まあ、なんにしてもワカバが入ってくれて助かったよ。 多分俺

達だけじゃ此処まで簡単にはいかないだろうしな？」

そう言いながらツバサはニカツと笑った。

「いや……はい……」

顔から湯気が出ているかのごとく真っ赤な顔でワカバは小さく頷いた。

それから10分ほどして……、

現在ツバサ達は先ほどのエリアからしばらく進み開けた所に辿り着

いた。

ここは先ほどもロアルドロスと出会ったエリアに行く時に通った場所だ。

このエリアは広い陸地が少ないこの水没林の中でも比較的広いエリアだと言えるだろうエリアだ。

所々に大きな水たまりがあり地面もぬかるんではいるが、その広さ故この狩場の中では比較的動きやすいエリアだと言える。

今は先ほど通る時にも見かけたアイルー達が巨大なモンスターと縄張り争いのような事をしていた。

「ギユオオオオオ！」

アイルー達と交戦中のロアルドロスがこちらに気づき唸り声を上げる。

その砲撃によりアイルー達もツバサ達の存在に気づく。

「ニヤニヤ！」

「ハンターニヤ！ハンターニヤ！」

「やったニヤ！ラッキーニヤ！」

「これであのエリマキ野郎はいいつ等に追い払って貰えるニヤ！」

「じゃあ巻き込まれないように逃げるニヤ！」

「ニヤニヤ〜！」

アイルー達はそう口々に言って地面の中に潜っていく。

「あいつ等好き勝手言いやがって……」

ツバサが呆れ気味に言う。

「つんな事言ってる場合か！突進が来るぜ！」

イナズマの言葉と共にロアルドロスが突進を始めた。

「二手に別れるぜ！」

イナズマの指示と共にツバサとワカバは右にイナズマとナギサは左に向かって回避する。

これでロアルドロスはどちらを狙うか迷って一瞬のスキができるはずだ。

予想通りロアルドスはツバサ達の方へ向き直った後に迷った様に一

瞬止まった。

「今だ！」

イナズマの号令と共に四人が動き出す。

しかし、

「ギユオ！」

ロアルドロスやツバサとワカバの方へ向き直った。

どうやらどちらを狙うか決めたようだ。

「くっ……」

「ひゃっ！」

突然の事に戸惑いながら二人は足を止めた。

その直後ロアルドロスが徐おもむろに上半身を持ち上げる。

「ブレスが来ます！」

ワカバが警告の声を上げる。

「分かった！」

ツバサが返事をして前転した瞬間、先ほどまでツバサ場所で

シュ　　と言う鈍い音がした。

「彼のブレスは着弾点にしばらく影響があるので近づかない下さい。」

「

ワカバがひと言注意する。

「ギユオウ！！」

その直後ロアルドロスが突然仰け反った。

どう言う事かと見てみた所どうやらイナズマ達がブレスのスキに尻尾へ攻撃していたようだ。

「今がチャンスです！」

そう言うツバサはロアルドロスの正面に立ちフロントペッコを振り上げそこから一気に振り下ろす。

その一撃は見事に頭部に命中し続け様にフロントペッコを頭に叩き落とし最後にアッパーを放つ。

だがロアルドロスはそれらの攻撃をモノともせず上半身を持ち上げた。

「ヤバい!!」

ツバサの怒声も虚しくロアルドروسはワカバを潰そうと勢いよく倒れ込んだ。

ロアルドロスが体の叩きつけた所に大きな水しぶき上がる。

「キヤアアアアアアアアアア!!」

「ワカバァー!!」

ワカバがボディプレス喰らい吹っ飛ぶ。

だが吹っ飛んだお陰であの巨体の下敷きにならずにすんだ為、結果的には運が良かったとも言える。

しかしロアルドروسはが吹っ飛んだ方を向くと再び上半身を持ち上げようとする。

「マズイ! プレスだ!」

イナズマの切羽詰まった様な声を上げながらロアルドروسを怯ませようと必死で斬り続けていた。

ナギサも同じように必死でやを放ち続ける。

ワカバを見てみれば吹っ飛んだ先で蹲すくまっていた。

よく見ると顔色も悪い。

先ほどのボディプレスのせいだろうか?

しかし今はそれどころではない。

ロアルドروسはすでにプレスを放とうと身構えていた。

「クソッ! こうなったら……」

そう言っているとツバサは走り出しワカバの正面に立つ。

「……え?」

ワカバが疑問に思った直後　バシユ　という音がした。

「グハッ!」

その音と共にツバサが吹っ飛ぶ。

どうやらロアルドروسの放った水プレスがツバサに直撃したようだ。良く見るとワカバと同じように顔色が悪い。

ロアルドروسはツバサにプレスを当てると満足した様な顔になり再び水陸両方があるエリアへと逃げていく。

「いつつつ……」

ツバサが顔をしかめながらポーチから回復薬を取り出して一気に飲み干す。

ただ顔色まだ悪いままだ。

そこにワカバが近づいてきた。

その顔は先ほどとは違いいつも通りだった。

ワカバはポーチの中から水色の種のような物を取り出してツバサに差し出した。

「……ツバサ様、彼のプレスには水やられ効果があります。……」

なのでこれを使ってください。」

水やられ状態と言うのは属性攻撃に付加された特殊効果《属性やられ状態》の事だ。

属性やられ状態になると体に色々な影響が起きる。

水の属性やられはスタミナの回復が遅くなる効果を持っている。他にも 火 なら体に火が着き体力が徐々に減り、 氷 ならスタミナの消費量が増え、 雷 気絶しやすくなる。

龍属性の属性やられも存在するようだが滅多にない為どんな効果かは知っている者は殆どいないらしい。

「これを…… 水守の種 を使えばすぐに治ります」
ワカバがそう言う。

属性やられにはそれぞれの状態異常を治す効果がある種が存在するらしく 水守の種 の他にも 火消しの種 雷静の種 氷散の種 さらに今まであまり用途の無かった 龍殺しの種 には龍やられ状態を治す効果があるらしいと言う事が最近になって分かったらしい。

「おお！ サンキューな！」

ツバサが礼をする。

しかしワカバは俯むついたままだ。

「どうした？」

ツバサが聞く。

「……ツバサ様、……ツバサ様！　なぜ私の為にあんな危険な事を……」

ワカバは顔を上げ涙目でツバサに聞く。

あのまま逃げてくれたから良かったものの一步間違えれば突進などの追撃を喰らって動けなくなっていたかもしれないからだ。

しかしツバサは少し不思議そうな顔をしてとして、

「……なんでって、そんなの当然じゃんか？　大切な奴（仲間）を守る為なら当然だろ？」

とニカツと笑いながら答えた。

キュン

ワカバの心の中で何かが弾けるような感じがした。そこから急に胸が熱くなる。

（な、なななな何ですか！？　この感じは！？　なんか変な……、と言つか心臓の鼓動が物凄く早く……）

「おーい！二人とも何してるんだ？　一端ベースキャンプに戻るぜー！」

イナズマが二人に声を掛ける。

「おう！　分かった！　ほら、ワカバもいくぞ！」

そう言っつてツバサがワカバの手を掴み走り出す。

「はひいいいいい！　ちよつと……」

ワカバが真っ赤な顔で抗議しようとするが恥ずかしさから声が出なくなってしまう。

「今度こそ絶対にロアルドロスを倒す！　なつ、ワカバ！」

ツバサが振り返らずにそう言っつ。

「……う、うん……。」

ツバサのすぐ後ろには真っ赤なワカバの顔があった。

20・激戦！ 地上のロアルドロス！（後書き）

ワカバ： プシユー

あらら〜……まだ真っ赤だよ（汗）

師匠ならともかく僕にしてはやり過ぎたかなあ（汗）

実際書いてる時も軽く悶えながら書いたからな〜（苦笑）

ワカバ：「……ホ、ホントにこれはやり過ぎですって〜（泣）」

師匠ならこの位フツ〜に書くんだけど僕はそれほど上手くないからねえ。

あ！ 一応気を利かせて他の三人には帰って貰ったから……、

ツバサ：「ワカバ〜、お前は帰らないのか〜？」

ワカバ&作者：「「！！！！！！！！！！」」

ツバサ：「ワカバもダメ作者も固まってどうした？」

いや！ 何でいるの！ 帰ったはずでしょ！！

ツバサ：「ワカバだけ来ないからおかしいなと思って……」

ワカバ：「あ、あの……その……さ、さっきの話き、聞いてましたか！！」

ツバサ：「話って？」

ワカバ&作者：「ホッ……」

21・決着！ ロアルドロスの水中戦！（前書き）

ツバサ：「遅せーよ！！（怒）」

イナズマ：「ああ、確かに今回はいくらなんでも遅いぜ！」

ツバサ：「だよな！ つつーか先週が8日で先々週が7日で今回が9日って……。」

イナズマ：「少しずつ伸びていつてるな……（汗）」

ツバサ：「まったくこんな調子で大丈夫かよ……。」

イナズマ：「ところで作者は？」

ツバサ：「……そー言えばナギサとワカバもいないな？」

イナズマ：「こつ言う時は……やっぱあった、置き手紙だ……。」

ツバサ：「……で、なんて書いてあるんだ？」

イナズマ：「なにになに……。」

今回は女子二人に話があると言われたのでこつち（前書き）には出られません。

ちなみに今回遅くなったのは先週中間テスト（僕の学校は2期制）があったのと水中戦の描写に手間取ったからです。

まあ、結局上手いかわなくてあんまり書けませんでした……（汗）
待っていた読者の皆さま、本当にすみませんm（――）m

イナズマ「……だってよ……（汗）」

ツバサ：「あの二人ダメ作者と何を話そうとしてるんだ……？」

イナズマ：「（多分あの事だな……。）」

21・決着！ ロアルドロスの水中戦！

ここはガルベルト熱帯林……通称・水没林のベースキャンプ。
「さてと……で、この後はどうするんだ？」

ツバサがイナズマにこれからの方針について聞く。

ツバサとナギサも先ほどの戦いでロアルドロスの大体の動きは見切った。

まだ水中戦はしてないので不安は残るがそろそろ道具も絡めた戦闘を始めてもいいのではと考えたのだ。

「そうだな……じゃあそろそろ本格的に仕掛けはじめるぜ！ ちよつとだけ待ってるよ……、」

イナズマはそう言うのと道具入れの方を向き何か取り出し始めた。

「？ ……そー言えばあたし達に内緒で何か持ってきてみたいんだけどもしかしてそれ？」

ナギサが聞く。

「あつたり〜 ほら、これだぜ！」

そう言っつてイナズマは取り出した物を見せる。

それは緑色をした円盤状の缶の様な物だった。

「これつてもしかすると シビレ罫 ですか？」

前回の出来事から立ち直ったワカバが聞く。

「せいかりい 四日前にワカバが来た時に船長から交換して貰った雷光虫と家にあつた トラップツールの 調査して作ってきたんだぜ！」

イナズマが満足気に胸を反らしながら言う。

シビレ罫と言うのは文字通り大型モンスターの体をシビレさせて動きを止める罫の事だ。

そうする事によって反撃を気にせず攻撃をしたり大タル爆弾との併用などで一気に大ダメージを与える事が出来る。

「なるほどな〜、シビレ罫はこの間ドスジャギイを捕獲した時で最

後だって聞いてたから期待してなかったけどこれがあるなら一気に勝負を着けられそうだな！」

ツバサが感心したように頷きながら言う。

「じゃあ早速行こうよ！」

ナギサが元気良く立ち上がり三人を促がした。

「ではコレを使って一気に彼との決着を着けましょう。」

「お〜〜!!！」

ワカバの声と共に全員が立ち上がりベースキャンプから出ていった。

三十分ほどして……、

四人は現在ロアルドロスが初めて現れたエリアに来ていた。

「……う〜ん……この辺りにいると思っただけだなあ……。」

イナズマが首を捻りながら落胆の声を上げる。

「……まさかこのタイミングでペイント効果が切れるとは思いませんでしたね……。」

ワカバがしゅんとした様子で言う。

ワカバの言う通り先ほどベースキャンプを出る時には確実にしていたペイントの臭気は現在まったく感じられない。

「このエリアに来る前までは確かに匂いはしてたのに……。なんで急に消えたの〜!!」

ナギサがあからさまに不満そうな声を漏らす。

そんな時……、

「お〜い!!」

三人がそれぞれ凹んでいると後ろからツバサの声が聞こえた。

「ツバサか……で、どうだったんだ？」

イナズマが珍しく落胆の表情を浮かべたまま聞く。

実は先ほどこのエリアに来てすぐにロアルドロスの気配がない事に気が付いた為、一人だけこれまで通ってきたのとは違うエリアを偵察して残りの三人でこの場をもう一度調べる事にしたのだ。

その偵察役がツバサだったのだが……、

「……いや、結局こつちには居なかった。やっぱり水の中に潜って移動したんじゃないか？」

首を横に振りながらもっとも可能性が高い予想を言う。

「やっぱそうか……。水中はかなり動きが速くなるから面倒くせーんだよなあ……。」

イナズマが明らかに嫌そうな顔で言う。

「ワカバちゃん……。ロアルドロスって水中だとそんなに厄介なの？」

ナギサがイナズマの顔を見て心配になったのか不安そうな声で聞く。

「確かに彼は水中に入ると全体的に動きが素早くなるので厳しいと言えは間違いではないですね……。」

その言葉を聞きナギサが一層不安そうな顔になった。

「えっ！ いや……。でも……。でも動き自体は陸とそれほど大きな差ありませんしナギサ様はこれまでで動きは殆ど見切れています！

だからそんなに落ち込まなくても大丈夫ですって……。」

ワカバがマズイ事言ったと思ひ慌ててナギサを安心させようと努める。

「……うん、そうだね……。分かった、ガンバって今度こそ倒す！……」

ナギサがやっとな安心して頷く。

ワカバもそれを見てホッとした顔になった。

「ハア……。じゃあ仕方ねえしエラマスク着けて水中入るぜ！」

イナズマは未だに面倒くさそうに言いながらエラマスクを口にしっかりと着ける。

他の三人を見ても同じようにエラマスクを着けようとしていた。

「……動きは最悪何とかなるとしても折角のシビレ罠がなあ……。水中じゃ誘導しにくくてしかたがねえしな……。」

イナズマはこのようにブツブツ呟いて最後には盛大な溜息を吐きながら水の中に跳び込んでいった。

「……つまりイナズマの奴は折角披露した秘密兵器が上手く使えな

いかもしれないから凹んでたんだな……。」
ツバサがなるほどと言った感じに納得する。

内心ツバサもイナズマの様子を見て少しだけ不安だったのだが以外と気にしなく良さそうな理由だった為ナギサ同様安心したようだ。

「……確かに水中では誘導する時に上下にも調整しなくてはなりませんし厄介と言えば厄介ですからね……。 ……でも少し厄介なだけであそこまで凹みますかね……。？」

イナズマの咳きは以外と大きな声だったのかワカバがイナズマの言葉に同意しつつも疑問を口にする。

「多分折角のイタズラが上手くいかなかった子供みたいな気持ちなんじゃない？」

ナギサが少し呆れ気味に言う。

三人は苦笑しながらを見合わせると水の中へ飛び込んでいった。

先ほど四人が水中に入ってから二十分ほどして……、
現在四人は水中を泳ぎ続け先ほど居たエリアからさらに2エリア先のエリアに来ていた。

このエリアは先ほどのロアルドロスと初めて会ったエリアと繋がった崖があり、その崖から見える巨大な滝はなかなかの絶景だ。ただしこの狩場の水は基本的に少々濁っている為視界が悪く、正直この狩場で水中戦がしたくないのはこう言う事も理由もあったりする。

ツバサ達がエリアに入った瞬間、

「ギユオオオオオオオ！」

ロアルドロスが威嚇の声を上げる。

先ほどのエリアから此処まで逃げて来ていたようだ。

「よし！ やつと見つけた！ イナズマ、早速シビレ罠だ！！」

ツバサが興奮気味に言う。

「ちよつと待て、あんまり焦んな！ さすがに少し様子を観てからにしようぜ！ ……っつーか来るぞ！」

イナズマがツバサを宥めながら注意の声を飛ばす。
イナズマの言う通りロアルドロス^{なた}は体をうねらせながら突進を繰り返した。

勢いのある突進により周りの水が巻き上げられてロアルドロスを中心に不規則な水流が見える。

四人はその攻撃をそれぞれ上下左右とバラバラの方向に回避する。

「何、今の!? 何か今の突進陸の上の時より早くない?」

ナギサが驚きの声を上げる。

ナギサの言う通り今の突進は陸上で見せたモノよりも明らかに速い。陸上突進の倍……とまではいかないまでも1.5倍ほどの速さはあるだろう。

「先ほども言った通り彼は基本速度が水中では陸よりもかなり速いので注意が必要です。……でも攻撃方法自体は水中・陸上ともに殆ど同じですので見切る事はそれほど難しくもないハズです。」

ワカバがロアルドロスの挙動に注意しながら言う。

「分かった。……ナギサ、お前も気を付けろよ!」

「もちろんだよ! そう言うツバサも気を付けなよ!」

ワカバの言葉を聞きロアルドロスとの水中戦が初めての二人が先ほどより更に気合いを入れる。

「さて、ここからはオレ達も一気に行くぜ!」

イナズマの言葉とともに四人は動き出す。

まずは……、

「シユート!」

ナギサがハンターボウ?の弦を限界まで引絞りタテガミに狙いを付けると勢い良く矢を放った。

「ハアアア……」

ナギサが矢を放つと同時に今度はワカバが泳ぎながらフロントペックを腰に構えて気合いを溜め始める。

「ヤッ! ハッ! ヤッ! シユート!」

ナギサの方は先ほどの力を込めた一撃から続けて何発も矢を放つ。

バキッ

「ギユアッ！」

ナギサの連撃に今までのダメージの蓄積で遂にロアルドロスのタテガミの表面が砕けた。

モフモフとした柔らかさそうなタテガミだが砕けた場所から見える硬そうな組織を見た所どうやら柔らかいのは表面だけで内側は以外と硬いようだ。

「ヤアアアアア！！！」

ワカバが溜めこんだ力を一気に開放し、タテガミが砕けた事に驚き仰け反っていたロアルドロスの頭部に向かってプリントペッコを思いつき叩きつける。

バキンッ！！

「ギユワアアア！！！」

正確に頭に叩きこまれた一撃により今度はトサカも砕け墜ちた。

「ギユワッ！！！」

これだけのダメージを与えた者への怒りからかロアルドロスは砕け散ったタテガミやトサカの破片を無視して突進をする。

その標的はワカバだ。

だが……、

「ハッ」

ワカバは突進が来る事が分かっていたように右斜め下の方へ向って体を捻りながら勢いよく水を蹴り回避する。

「ヤアッ！」

突進が終わったロアルドロスの尻尾にに向かってイナズマがアサルトアックスを勢い良く振り下ろした。

「だりやりやりやー！」

そのすぐ直後今度はツバサがロアルドロスにペッコフェザーを目の前で交差するに構えながら泳ぎ寄り、勢いよく水を蹴りながら斬り払いを放つとそのまま連携を叩きこむ。

「ギユオッ！！！」

ツバサの連撃に耐えかねてロアルドロスは思わずといった様子で仰け反った。

「おりゃー!!」

「ヤアアアアアー!!」

「ラアッ!!」

「シュート!!」

四人はそのスキを突いて一気攻め込む。

「ギユオアアアアア……」

度重なる連撃に堪り兼ねたロアルドロスは一声上げるとフラフラとよろめきながら隣のエリアに向かって泳いでいく。

「待て! 逃げるな〜!」

ツバサが追いかけてようと急ぎ気味に泳ぎ出した。

ツバサの動きに触発されたのかナギサとイナズマも追いかけて始めた。

「待つて下さい!」

しかし三人の行動をワカバが制止する。

ツバサ達はワカバの言葉を不思議に思いながらも動きを止めた。

「どうしたんだワカバ? 此処は一気に攻めた方がいいんじゃないかね?」

イナズマが不思議そうな顔で聞く。

「確かに普通に考えたらそうかも知れませんが……ですが私の推測が正しければきつと……。」

ワカバはそう言うと三人を近くに呼び寄せ何か耳打ちしだした。

数分後

ツバサ達は先ほど水中戦を繰り広げたエリアの隣……洞窟エリアに来ていた。

ここのエリアは地底湖の様な水辺にゴツゴツとした岩肌の陸地がある洞窟になっている。

他のエリアと違い水がかなり澄んでおり水中でも視界良く、洞窟の入り口から入る日や月の明かりが水に反射しているのかほのかに明

るいのだ。

このエリアに入った瞬間ルドロスがざつと八匹ほど見えた為四人ともやや疲れた顔をしながらそれぞれ二匹ずつ倒した。

そしてやつとの事でに陸地に上がるとそこにはロアルドロスが眠っていた。

「ホントだ〜！ ホントにワカバちゃんの言う通り眠ってる！」

ナギサが少々興奮気味に言う。

「おい！ あんまり大声出すな！ 折角寝てるのに起きちまうだろうが！」

ツバサが声を抑えながらナギサを叱りつける。

その瞬間ロアルドロスの体がピクツと動いた。

ツバサ達はその様子に驚き体を強張こわばらせる……が、どうやら何事も起きない様なので四人共ホツと胸を撫で下ろす。

「……フウ……今のはマジで焦ったぜ……。」

イナズマが思わずといった様子で呟いた。

「先ほど彼が逃げる時によるめいていたので多分そうだと思ったのですが……予想通りに事が運んで良かったです。」

ワカバも先ほどの事があつたから元々小さな声をさらに抑えて言う。

「じゃあ今度こそシビレ罫仕掛けねーか？ 俺も一気に決める為に鬼人化するからさ……。」

イナズマがツバサの言葉に頷きながら少し離れた場所にシビレ罫を仕掛けに行く。

「……では、彼を起こす一撃は私の溜攻撃でいいんですね？」

ワカバがツバサとナギサの二人に確認を取ろうと聞く。

「うん、眠っているモンスターは普段と違って力が抜けているから初撃のダメージが大きくなるんだよ。だから起こすのは一撃の威力が一番高いワカバちゃんが一番いい……でいいんだよね、ツバサ？」

ナギサが理由を言おうとして自信を無くしてツバサに確認を取る。

ちなみにさつき怒られたせいもあって声はいつもの10分の1程度の大きさだ。

「ああ、それで合ってる。」

ツバサが少々呆れ気味にナギサの言葉を肯定する。

そうこうしている内にイナズマがシビレ罫を仕掛け終え戻ってきた。

「……っつー訳でワカバ、頼んだぜ。」

「……はい。」

イナズマの声と共にワカバがフロントペッコを腰に構えて気合いを溜める。

「ヤアアアアア!!」

掛け声とともにフロントペッコを振り上げると限界まで溜めた力を一気に開放して頭部に向かって振り下ろす。

「ギユオツ!?!」

ロアルドロスは突然自分の脳天を叩きつけられた事に驚きながら跳び起きた。

それを見た四人はすぐさまイナズマが仕掛けたシビレ罫とロアルドロスを結ぶ位置に回り込み待ち構える。

ただしナギサだけは狙撃しやすいように他の三人より少し離れ気味だが。

「ギユオウ!!」

起き上がったロアルドロスは軽く頭を振るとハンターの姿を見つけて突進を開始する。

しかし……、

「ギユワっ!?!」

ツバサ達のすぐ目の前に来た所で突然動きが止まる。

シビレ罫の効果が発動したのだ。

ツバサはロアルドロスがシビレ罫に掛かった瞬間にペッコフェザーを頭の上で擦り合わせると、

「鬼人化……」

と呟く。

すると赤いオーラがツバサの体から溢れ出る。

「うおらああああ!!」

そこから動けずにいるロアルドロスに駆け寄りタテガミに向かって
2本の刃を神速で叩きこむ。

「乱舞だな!」

イナズマが呟いた。

「……これが鬼人化ですか……行きの船の中で聞いてはいましたけどまさかここまで攻撃的な状態だとは……。」

ワカバが思わず感嘆の声を上げる。

ツバサとナギサの武器はこの大陸には存在しない為どんな特性なのか予め話を聞いてはいたのだが、まさか此処までのモノとは思ってなかったのだ。

「ツバサとナギサが頑張ってるんだからオレ達も頑張るぜ!」

そう言ってイナズマもロアルドロスに駆け寄ってアサルトアックスを振り下ろした。

ツバサの動きの迫力で気がつかなかったがよく見るとナギサもツバサが狙っているのは反対側のタテガミに矢を放ち続けている。

「わ、私も!」

ワカバも慌ててロアルドロスに駆け寄りフロントペッコを叩きつける。

「おりやりやりやりやりやー!!」

シビレ罨が切れた瞬間にツバサがもう一度乱舞を叩きこむ。

「ギユワアアアア……」

その怒涛の攻撃によりロアルドロスが軽くフラついたかと思うと

ドシーン　　と言う地響き鳴らして倒れ込みそのまま動かなくなる。

「……やった……のか……?」

ツバサが実感が湧かないのか不思議そうに言う。

その時ツバサの肩誰かの手が乗せられた。

ツバサが振り向くとそこにはワカバがおり、

「ええ、遂に倒しましたよ。」
と笑顔で言った。

「そうか……遂に倒せたのか……オッシャーー!!」
ツバサはそう雄叫びを上げると何を思ったのかワカバに抱きついてきた。

「~~~~~!!! ツ、ツバサ様!? な、何を……」
声にならない悲鳴を上げながらワカバの顔はドンドン茹であがった
タコのように真っ赤になる。

「おいおい、それはちよつとやり過ぎじゃね〜か？」
イナズマが苦笑しながら呟く。

ちなみに少し離れたところに唇を軽く尖らせてふくれっ面になった
少女がいたのは別の話だ。

21・決着！ ロアルドロスの水中戦！（後書き）

……と、言っ訳でどうでしたか……。

ワカバ：「~~~~~!!!!!!」

ワカバ……ごめん……。
ちよっと勢いで……。

ところでナギサはなんで怒ってるんだ？

ナギサ：「知らないって!!」（怒）　なんか分かんないけどイライラするの!!」（怒）「」

それはワカバに対して、それともツバ……

ナギサ：「ツバサに対して!!」

ああ……こっちが言い切る前に言ったよ……。
でも何で？

ナギサ：「だから知らないって!!」

あっそう……（……）他の奴の事には敏感なのに自分の事は分かってないんだな（汗）（

22・村の新たなハンター（前書き）

大海の剣最新話投稿）

双剣以外：「「「「遅い!!!」（怒）」「」「」

ごめんごめん。

ツバサ：「しかも今回遅くなったのってゲームやってたからだろ！
」（怒）」

うん　此間買ったばかりの奴

ナギサ：「ゲームで遅くなってどうすんの!!!」（怒）」

だからごめんって……（焦）

イナズマ：「つつーかこんな事してないで早く投稿しよーぜ!」

ちよ、ちよつと待って!

今回は読む前のお知らせがあるから……。

ワカバ：「お知らせってなんですか?」

今回はこの小説の中では初のコラボがあるんだよ!」

ナギサ：「え!　コラボ!?!」

しかも二人の先生とのコラボです!

ツバサ：「誰と誰だ？」

それは見てからの楽しみみて事だ！

22・村の新たなハンター

最初にロアルドロスと出会った水陸両用のエリアにて……、
「……なあナギサ、お前何でそんなに機嫌悪そうにしてるんだ……。」

ツバサが少しバツが悪そうに聞く。

「だからあたしに聞かないでよ！ あたしだって何でか分かんないんだからさ！」

ツバサの問いかけに唇を尖らせて膨れっ面というあからさまに不機嫌そうな顔をしたナギサが答えた。

本当は前回のラストのツバサがワカバに抱きつくシーンを見たのが原因なのだが、ナギサ自身その事が原因だと言う事にまったく気が付いていないようだ。

「なら何で俺の事睨んでんだよ？ 別に俺がお前に何か余計な事したからって訳じゃないんだろ？」

ツバサがさきほどと同じ調子で聞く。

先ほどからのバツが悪そうな様子を見た所、どうやらナギサの怒りが自分に向かっている事だけは理解してるように見える。

「何か分かんないけどツバサに対して怒りが込み上げてくるの！！」
ナギサは相変わらずプンプンと怒ったままだ。

ツバサも訳が分からないと言う様子でジャギイヘルムの上から頭を掻いている。

二人の間に若干険悪なムードが流れる。

ちなみにワカバは現在の状態に陥った原因である事件のせいで軽く放心状態のまま歩いている。

ここまで来る途中にも何度か木などにぶつかっているほどだ。

その頃四人の中で一番後ろにいたイナズマはこの状況に少々ウンザリしていた。

（……っつーか何でこんな事になってるんだっけな？ いやいや、

そんな事より今の状況何とかした方がいいか……。手っ取り早く三人を落ち着かせる手はねーかな……。？）
イナズマは首捻りながらを少し考えてみた。

……すると最良とはいかないまでもそれなりにいい手が思いついた。
「……なあ、帰る前に何か食べねーか？ 例えば……。ツバサの焼いた肉とか！」

イナズマが提案する。

「ツバサが焼いた肉か……。」

「え！？ ツバサ様が焼いてくれた肉ですか。」

イナズマの言葉に女子二人が素早く反応した。

まあ同じような言葉でもナギサは純粋にツバサの肉焼きの技術を考えて、ワカバはツバサが焼いてくれた肉（手料理）が食べれると考えて……。と、意味はまったく違ったりするのだが……。

「じゃあ……。そうする？」

ナギサが怒りを少し緩めて言った。

「是非！ 是非そうしてください！」

ワカバも先ほどまで上の空と言った様子は何処へやらと言った風に元気に言う。

どうやらイナズマの思惑通り二人とも上手く食い付いたようだ。

「……。っつー訳だから頼むぜツバサ！」

イナズマがニヤニヤとしながら言った。

「いや……。今回俺は高級肉焼きセットは持ってきてないんだk……」

「じゃあオレの肉焼きセット貸してやるぜ！ お前は普通の肉焼き

セットでもこんがり肉Gが焼けるらしいしさ！」

ツバサが諦めさせようと弁解するがすぐに却下されてしまった。

「んあ……。まあ確かに狩りが終わったばかりで小腹も空いてるからなあ……。気は乗らないけどやるか……。」

面倒くさそうに頭を掻きながら（もちろん頭防具はつけたまま）ツバサも仕方なくと言った様子で頷いた。

「……タンタンタタン……ウルトラ上手に焼けました」
ツバサがそう言って勢いよく肉焼きセットで焼いていた肉を振り上げる。

すると辺りに食欲そそる香ばしい匂いが広がる。

「おし！ やつとオレの番だぜ」

そういうとイナズマはツバサが掲げていたこんがり肉Gを素早く奪い取った。

「おいおい奪い取るなよ！ 焦らなくても肉は逃げないんだからさ」

ツバサがイナズマに小言を言う。

「まああんまり気にするなっ〜 じゃあ、いただきます」

イナズマはそう言ってこんがり肉Gにカブリ付こうした。

すると……、

「グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

少し離れた所から何かの唸り声が鳴り響いた。

その唸り声に驚いてイナズマは肉にカブリ付こうとしていた手を止める。

「な、なんなの今の……。」

ナギサの不安そうな声で言った。

ズシン……ズシン……ズシン、ズシン

すると今度は何か巨大な者が練り歩くかのような音が響く。

「……あ、あの……ももも、もしかすると……この音……こちらの方にきてません……？」

ワカバが少々震え気味に言う。

ズシン、ズシン、ズシン、ズシン、ズシン、ズシン

その言葉を聞き付けたかの如く足音が早くなる。

さらに足音の様子からすると……、

「……来てるっばい……かな……？」

ツバサの首を一筋の汗が流れ落ちる。

その瞬間……、

「ちえずとー！ー！ー！！！」

と言う叫び声と共にくすんだ緑色の恐竜が姿を現した。

口元から大量の唾液を滴らせながら……。

「に、逃げるー！ー！ー！！！！！！！」

イナズマが大声で叫ぶと四人は一目散に走り出した。

「待てー！ー！！ 逃げるなー！ー！！！」

恐竜のようなモンスターが四人に呼び掛ける。

普通はモンスターが喋るなどあり得る訳がないのだが今の四人にそんな事を考える余裕は無い。

四人はそのままベースキャンプの辿り着くと大急ぎで荷物を纏めてガルベルト熱帯林から逃げるように帰っていった。

ロアルドロス討伐から2日後のツヴァイ村の港……、

「ふう、やっと帰って来れたか……。何か何週間も帰ってきてない気がするなあ……。」

ツバサが港に到着するなり軽く愚痴を溢す。

「まあ今回は確かに色々大変だったかな……。特に最後のイビルジョー！」

イナズマが少しうんざりとした様子で言う。

「……って何かアイツが喋ってるように聞こえたのって本当に気のせいなのかなあ？ 何か附に落ちないだよね……。」

ナギサがうん……。と首を捻りながら言う。

「いや、普通に考えてモンスターが喋るなんてありえないだろ？

……確かに四人全員が聞こえたって言ったのは気になるけど……。

……でもやっぱり気のせいかもしれない。もしくは極限状態で聞こえた幻聴って言う方が自然だろ？」

ツバサが正論を述べる。

だが言い回しからしてツバサ自身も自分の言ってる事に違和感を感じてるようだ。

「うん……やっぱりそう考えるべきかなあ？」
ナギサは納得はしてないようだが結局考えるのは諦めたようだ。

そんな談笑をしているとツバサ達三人の楽しげな後ろ姿を見つめている人物が一人いた。

ワカバだ。

「ん？　そう言えばワカバ、お前何か暗いけどどうしたんだ？」

ツバサがワカバの様子に気づいて振り返る。

「……いえ、これで皆さんとはお別れだと思いますと……できればもう少し一緒に狩りがしたかったです……」

ワカバが残念そうに言う。

元々今回の狩りは三人でやる予定だった物に突然ワカバも一緒に行く事になったものだ。

「……へ？　ワカバちゃんもう帰っちゃうの？　折角これから一緒に狩りしていいこうと思っていたのに。」

ナギサが少し悔しそうな感じに言う。

「……え？」

ワカバは小さく驚く。

「ナギサ、少し落ち着け。　ワカバにも事情があるんだから仕方ないだろ！」

ツバサがナギサをたしなめる。

「でも折角仲間が増えると思ったのに。」

ナギサはツバサに尚も喰い下がろうとする。

相手を間違えてるような気もするが……。

「……えっと……あの……私ここにいってもいいんですか？」

ワカバがしどろもどろしながら言う。

「え？　ってか何かやらなきゃいけない事があるとかじゃないのか？」

ツバサも驚きながら言う。

だが見た所話あまり噛み合って無いように見える。

「私はこの後の予定などはないですしやるべき事もないですよ？
それよりも私はこの村にまだ居てもいいのですか？」
ワカバが少々必死な様子で聞く。

「ここに居てくれていいのか？ そっちがOKならもちろん……っ
っ！か寧ろ居てほしい！ 頼む！」
ツバサが笑顔で言う。

「はひっ！ いえいえ此方こそ宜しくお願いします！」
ワカバが少々慌て気味に言う。

「おう！ 今の話聞いてたぞ！ お前これからウチの村のハンタ
ーになるんだな！」
そう言いいながら親方が突然現れた。

「はひ！？ えっと……どちら様でしょうか？」
ワカバは親方の突然の登場に戸惑いながら言う。

「おう！ ワシはこの村の漁業団体の頭をやってるものだ！ ……
まあ、ワシの事は親方と呼んでくれ！」
親方は相変わらず高いテンションで自己紹介する。

「あ！ 漁師の方でしたか……私はワカバ・アクエリアスです。
これからよろしく願います。」
ワカバも戸惑いながらも自己紹介する。

親方のテンションについていけずに戸惑ってはいるもののそれでも
律儀にあいさつする所は彼女らしい。

「さて、じゃあ早速村長に話して来て宴の準備でもするか！」
親方はそう言うのと張り切って酒場の方へ走って行った。

「ま、待って下さい！ 別に私などの為にそこまでしなくてもいい
ですっ……！」

ワカバの慌てた声が港に木魂する。

ちなみにワカバの遠慮はすぐに却下されその日の夜にはツバサと
ナギサが村に来た時と同じように歓迎パーティーが行われた。

その時にワカバが酒場の中で普通に食事していたヒウチの姿を見
つけて驚きのあまり気絶したのは別の話だ。

その頃ドンドルマ近くの港町にて……、

現在この町にはとある豪華客船が沈没する某映画に出てきたものにそっくりな巨大な船が停泊していた。

「ひゃっほ〜」

その船に一人の少女が元気良く駆け込んでいく。

「まったくミッシェルの奴……あんだけハシヤがれると同行する俺達が恥ずかしいじゃねえか……。」

少し離れた所にいた少年がその少女……名前はミッシェルと言つらしい少女の様子を見てやれやれと言つ感じで軽く頭を抱えた。

「まあまあ、今回あたし達がこんな豪華な船で船旅が出来るのはミッシェルのお陰なんだから少し位はガマンしてあげない？」

そう言ったのは少年の隣にいたミッシェルと比べると少し大人しきうに見える少女だ。

まあ、ミッシェルが元気すぎるだけの様にも見えるが……。

「テッド〜、アン〜！二人とも何してるの〜？ はやくはやく〜」

ミッシェルの様子を見てテッドと呼ばれた少年とアンと呼ばれた少女はお互いの顔を見合わせると苦笑し合い、駆け足で某夕から始まる名前の豪華客船にそっくりな船に乗り込んでいった。

22・村の新たなハンター（後書き）

と、言う訳でSIBA 翔太郎先生のアン・ミッシェル・テッドで
す

ミッシェル：「やつほ」

アン：「こんにちは。」

テッド：「ようっ！」

SIBA 翔太郎先生、今回はこの三人貸して頂き誠にありがとう
ございます！

テッド：「まあ、今回はあんまり出番無かったけどな。」

いやいや三人には次回からの新シリーズで活躍してもらっから安心
して！

では、次は究極神団先生の極^{アル}です！

極：「ちえすとっ！」

アン：「うわっっ！」

ミッシェル：「何なの！？」

極：「ってかさっきのなんだよ！ 折角一緒に肉焼きパーティーし
ようと思って出てきたのに逃げる事ないだろ？」

まあまあちよつと落ち着いて……。

……。

テッド：「俺達忘れられてねーか？（汗）」

アン：「とりあえずそろそろ閉めますか……（汗）」

ミッシェル：「また次回」

く大海の剣くキャラクター紹介(前書き)

今回はキャラクター紹介です!!

ナギサ：「なんでこのタイミングでやるの?」

いや……そのね……(汗)

ツバサ：「どうやらこれから先は新キャラが出る予定が無いからワカバが出てきた時点でやっとこさって魂胆らしい。」

ナギサ：「なるほどね……。」

ま、まあそう言う事です(苦笑)

ツバサ：「っー訳でキャラクター紹介スタート……。」

ツバサ！そこはもっとこっつテンション上げて行こつって!

……あ、言い忘れたけど二人共帰ってくれない?

ツバサ&ナギサ：「はい!? なんで??」「」

いや……本人達には見せたくない設定もあるからさ。

っつー訳で……強制送還!!

ツバサ&ナギサ：「ちよっ、待っ……」「」

ヒュン

では改めて……キャラ紹介スタート!!

く大海の剣くキャラクター紹介

まずはハンターキャラから！

名前：ツバサ・ブルーソウル

種族：人間

年齢：17歳

身長：162cm

見た目：後ろが髪が少しハネた海のように深い蒼色の髪（P2G：レウスレイヤー）に森林のように深い碧の眼^{みどり}。身長は男ハンターとして少し低め。

武器の種類：双剣

武器：・ペッコフェザー（○） ・ジャギイファンゲ（○） ・ロアルエッジ（○）

防具：ジャギイシリーズ+お守り（気絶+2）

スキル：攻撃力UP【中】 ・気絶無効 ・まんぷく

備考：ドンドルマ出身の本作主人公。

両親はドンドルマでもトップクラスの実力を持つハンターチーム「撃龍の風」と言うチームのメンバー（チーム構成はツバサとナギサの両親の四人）。

基本的に真面目でしっかり者だが若干ぶっきらぼうな性格。恋愛

関連はほぼ知識ゼロの為そう言う事にはとことん疎い。

ツヴァイ村に来る前まではドンドルマにあるハンター養成学校に通っていた。学校にいた時はモンスターの生態などを調べるのが好きでよく図書室で調べ物をしていた。勉強は割とできる方で学校時の成績はなかなか優秀。

ちなみに肉焼きが特技で普通の肉焼きセットでもこんがり肉Gを作る事ができたりする。

一人称は俺。

名前：ナギサ・チュリーハート

種族：人間

年齢：17歳

身長：159cm

見た目：少しピンク掛った紅色のポニーテール（P2G：ガウシカテール）と大空のように澄んだ青色の眼。 体型はごく標準的。

武器の種類：弓

武器：・ハンターボウ？ ・ロアルドロスボウ？（○）

防具：増弾のピアス+ブナハシリーズ+ハンターガード+お守り（

装填+6 回復速度-10）

スキル：・装填数UP ・状態異常攻撃強化 ・装填速度+2 ・

回復速度-1

備考：本作ヒロインにしてツバサの幼馴染。

明るく元気な性格をしていて少々天然気味、頭は弱い方（苦笑）

ツバサとは生まれた時からずっと一緒にいる。 恋愛関連の話は大

好きですぐに反応するが自分自身の事だと疎いようだ。

ツバサと一緒にハンター養成学校に通っていたが勉強ギライの為成績はそれほど良くなかった（テスト点数そこまで悪くなかったがツバサが勉強見ないと赤点ぎりぎりレベル）。

一人称はあたし。

名前：イナズマ・ライトニング

種族：人間

年齢：19歳

身長：184cm

見た目：さらりとした長くもなく短くもない金髪（P2G：ギルドシヨート）に少し吊り上がった炎のような灼眼。 顔は鼻筋の通った整った顔立ち（つまりイケメン）。

筋肉は付き過ぎず無さ過ぎずの丁度いい感じ。

武器の種類：スラッシュアックス

武器：・アサルトアックス

防具：ボロスシリーズ+お守り（攻撃+8 気絶-10）

スキル：・攻撃力UP【大】 ・ランナー ・火事場力+2 ・見切り-1 ・気絶倍化

備考：ツヴァイ村で一番最初のハンター。

性格は明るく活発な兄貴分的な感じ。 語尾は比較的「〜だぜ。」となり易いが目上の人が相手の場合は「〜ッス。」となる。

少々調子に乗り易いがハンターとしての実力はなかなか優秀。 ちなみに装備は全身ボルボロスだがワカバの様にボルボロス好きと言う訳ではない。

現在はスラッシュアックス使いたが親方の弟子をしていた時は大剣を使っていた。

一人称はオレ。

名前：ワカバ・アクエリア

種族：人間

年齢：16歳

身長：178cm

見た目：春の木々を思わせる明るい翠をした肩まで伸びた髪の左右の端を結んだツインテール（P2G：ザザミ結び）で眼は金色。

長身でルドロスシリーズの下の胸は大きめ（隠れ巨乳）。

武器の種類：ハンマー

武器：・水鎚すいづいヴォジャノイ ・フリントペッコ

防具：ルドロスシリーズ+お守り（水流+5 睡眠-10）

スキル：・体術+2 ・水流【大】無効 ・精霊の加護 ・攻撃力UP【小】 ・睡眠倍化

備考：ロアルドロスの事ならなんでも知ってるロアルドロス専門家。ロアルドロスが大好きでロアルドロスの事を「彼」ルドロスの事を「彼女」「彼女達」と呼んでおり、装備も基本的にはロアルドロス

装備一式（ルドロスシリーズ＋水鎚ウオジャーノイ）で固めている。
ただし武器は相性次第で変える。　ちなみに私服もルドロスシリーズである。

元々は色々な街や村を渡り歩く流れのハンターだったが、ツバサ達と一緒にロアルドロスを討伐して以降ツヴァイ村に移住してツバサ達と共に狩りに出ている。

現在はツバサの事が気になる様子。
一人称は私。

続いて村人などのハンター以外のキャラの紹介です！

名前：エドガー

種族：アイルー（アイルー毛並み）

備考：キッチンアイルーで服装は板前スーツ。

元々はツバサの家でキッチンで副料理長をやっていたが、遠い場所に移住するツバサ達を心配してついて来た（ちなみにツバサの家のキッチンは父親と母親がそれぞれ5匹ずつキッチンアイルーを雇っている為計10匹いた）。

料理の腕は超一流でその腕を村長に見込まれ、現在はツヴァイ村の酒場の料理人（料理猫？）をやっている。

現在雑貨屋のツミキに一目惚れ中。
一人称は僕。

名前：村長（名前を決める予定は無し）

種族：竜人族

年齢：不明（見た目は25歳前後に見えるが実際はもっと上）

身長：181cm

見た目：ちょんまげの様な感じの黒髪に活発そうに見える明るい紫色の瞳。　竜人族独特の大きく尖った耳とワシ鼻が特徴。

備考：ツヴァイ村の村長。

十数年前に何も無かったツヴァイ島の開拓を始めて、10年前に遂にツヴァイ村を作り上げた人物。

ここだけの話だがキャラ（性格）のモデルはMH3のモガの村の村長の倅せがれである。

一人称は俺。

名前：シャルナ・クリフオード

種族：人間

年齢：掲載拒絶（20代前半ではあるがそれ以上書くと作者が殺されます）

身長：179cm

見た目：作業の邪魔にならない様に短めに切った銀髪と気の強そうなサファイア色の瞳をしている。

服装は基本的に工房の仕事用の赤く煤だらけの作業服を着ている。

備考：ツヴァイ村の工房に住んでいる鍛冶屋。

元々はドンドルマの工房で働いていたが此方の大陸独自の技術（スラッシュアックスなど）を学ぶ為にロツクラックへ行き、その後ツヴァイ村に移住してきた。

姐あねさん肌で若干ずぼらな性格をしている。実は料理はそれなりに出来るのだがそれ以外の家事や掃除などは苦手な為、家の中はかなり散らかっている。

一人称はアタイ。

名前：ジユデイ

種族：人間

身長：161cm

年齢：18歳

見た目：髪は赤み掛かった茶色で瞳は大きな黒目。

服装の印象は全体的に青い感じ。具体的には青い縁取りがあるク

リム色のベストに青いスカート、頭にはスカートと同色のベレー帽みたいのを被っている（つまり3のモガ村で受付をしてもらっている看板娘の服装の赤い部分を青くした感じ）

備考：ハンターズギルドツヴァイ村出張所受付嬢。

性格は明るく天真爛漫。実はかなりの天然娘でその天然具合はナギサより上だったりする。

ちなみに一緒に暮らしては無いが少し歳が離れた姉がツヴァイ村の近くの村に居たりする。

一人称はアタシ。

名前：ツミキ

種族：メラルー

備考：ツヴァイ村の雑貨屋をしているメラルーの女の子。

一族の中でも飛び抜けて頭がいいのだが代わりに物を盗む事ができない（上手くない）為メラルー族から抜けて人間の町で暮らすうとしていた所、村長に出会ってその計算能力の高さやメラルーとしての器用さから「雑貨屋をやってくれないか？」頼まれて現在に至る。

性格は大人しく物静かで礼儀正しい。

一人称は私^{わたくし}。

名前：親方（ゴードン・ブレイブ）

種族：人間

身長：202cm

年齢：48歳

見た目：白髪混じりの短い茶髪に弟子^{イナズマ}に負けず劣らずの力強さを持つた灼眼。

筋骨隆隆で体には数多くのキズがある。

備考：元ハンターで現在はツヴァイ村漁業団体・大漁団の頭をやっている。イナズマに狩りを教えた師匠。

かなり豪快な性格でそれ故時折暴走する事もある。その為大漁団の者達も時々とんでもない目に遭う時がある（ヒウチを仲間に入れると言った時も団員全員が仰天した）が、それでも団員からの信頼は厚い。トレーニングの為に背中には常に 焰剣リオレウス が背負われている（戦闘時と寝る時以外はほぼ常時）。

昔は大陸一のハンターとして有名で《三界の覇者》と言う異名で呼ばれるほどだった（この異名の由来は過去、リオレウス・リオレイア・ラギアクルスの三体のモンスターを同時に倒したと言う実話から来たもの）。

ハンターを辞めたのは在るモンスターに負わされた怪我が原因だそうだが……。

一人称はワシ。

名前：ヒウチ

種族：クルペッコ（種族では無い）

必殺技：業炎大地

備考：超頭のいいクルペッコで人語も理解しているらしい。知能

テストすれば多分親方には勝てる（笑）

親方が漁に出る時はついて行き、漁の邪魔になるモンスターなどを親方と一緒に撃退している。実は現在親方と一緒に住んでいる。

本編では喋れない設定だが、前・後書きや感想などでは喋る事が出来る。喋る時の一人称は僕ちゃん。

名前：農場3ネコトリオ（アイ・ライ・チュイ）

種族：アイルー

備考：ツヴァイ村の農場で働いているアイルー3匹組。

仕事はキツチリこなすがかなりのイタズラ好きなのがタマに傷という困った奴等。

ちなみに毛並みはリーダーのアイが白、ライが黒、チュイは茶。

一人称は3匹ともミャー。

注(○)はオリジナル武器の事

く大海の剣くキャラクター紹介（後書き）

こんな感じでどうでしょうか？

ミ……………：「あれっ？ アタシの紹介はないの？」

おiiiiiiii！！ ちょっと待てー！！！！

何でミk……………お前がいるんだよ！！！！

ミ……………：「だって早く出たいんだもん」

だもん ……………じゃねーよ！！！！

今こつちと並行して執筆中だから待てって……………。

ミ……………：「う……………。 分かったよ……………。 じゃあ早く執筆し

てよね！！！！」

分かった分かった。

……………あ、この今の話が分からない人は僕が以前書いた活動報告をこ
覧ください。

……………と、言う訳でキャラクター紹介でした

ちなみにしばらくは無いでしょうが新しいキャラが出て来る度にこ
こに追加していきます！！

オリジナル武器紹介(前書き)

今回は僕が考えたオリ武器の解説&派生表を公表します

ツバサ：「おい(怒) 本編はどおした?(怒)」

ひっ……大丈夫大丈夫、ちゃんと進んでるからね……(焦)
ほらこの感じなら多分今日中に投稿できると思うしさ……(焦)

ワカバ：「でも何故急に本編ではなくこう言うモノを書いたんですか?」

ナギサ：「ホントだよ! ってか一ヶ月位ほっとしてやっと投稿したのがコレってどういう事?(怒)」

いや……その……。

イナズマ：「何か昨日執筆してる時に急に思いついたらしいぜ(汗)
その上武器の設定とかは大体考えていたから1日で簡単にできた
って訳らしい……(汗)」

うんうん! そう言う事!

……という訳でオリジナル武器紹介スタート!

ツバサ：「……こつちの話無視して勝手に始めやがった(汗)」

オリジナル武器紹介

〔双剣武器解説〕

・名前：ジャギイフアング

レア度：1

攻撃力・切れ味：132 黄色

属性・会心率：無し（覚醒毒：100）

・名前：ジャギイフアング改

レア度：2

攻撃力・切れ味：164 緑

属性・会心率：無し（覚醒毒：130）

見た目：形はランポスクロウズやギアノスクロウズと同じ。

色は持ち手の部分がドスジャギイの皮そのままの色（薄紫色）で刃（爪みたいな部分）はオレンジ色。

備考：ジャギイの素材を中心にした双剣。他の大陸にいるランポスの素材を使った双剣をモデルにしており使い易さはバツグン。

・名前：ペッコフェザー

レア度：2

攻撃力・切れ味：196 緑

属性・会心率：火：240

見た目：片手剣のフェザーナイフの盾無しを2本持った感じの形。ヒブノックの朱色の羽毛の代わりにクルペッコ特有の黄緑色を基調としたカラフルな羽毛に彩られている。

備考：彩鳥の羽毛などをふんだんに使った鋭いナイフのような双剣。刃の一部に火打ち石の構造を取り入れおり相手を斬り付ける度に刀身から炎が舞い上がるようになっている。

・名前：ルドルシックル

レア度：1

攻撃力・切れ味：164 黄色

属性・会心率：無し（覚醒水：100）

見た目：チーフシッケルに少し肉付けしてそこにルドロスの皮をそのまま巻き付けたような見た目。

色はもちろん黄緑色で左右非対象の双剣。

備考：骨にルドロスの身を付けて生前の力強さを再現した武器。

このままでは得に何かの効果を持つ訳ではないが強化をすれば優秀な双剣になる。

・名前：ロアルエツジ

レア度2

攻撃力・切れ味：168 緑

属性・会心率：水140

見た目：左右で形が異なり2本の内の小さい方である右の剣は水生獣の皮を貼り付けてだけなのに対し左は更にその上から海綿質の皮を巻き付けたような感じになっている。

備考：ルドロスの素材を使った双剣を更に強化した武器。 水を大量に含んだ海綿質を素材として使用する事によって斬り付ける度水しぶきが噴き上がる。

（双剣派生表）

ツインダガー

? ツインダガー改

?

—

? ジャギイフアング

— ? ジャギイフアング改

— ?

?

ボーンシツクル

?ボーンシツクル改

?チーフシツクル

—?ペッコフェザー

—?—?

—?

?ルドルシツクル

?ロアルエツジ

?

〈弓武器解説〉

・名前：ルドロスボウ?

レア度：1

攻撃力：112

属性・会心率：無し（覚醒水：80）

ビン：強撃ビン 接撃ビン 水中ビン 毒ビン 睡眠ビン ペイン

トビン

・名前：ロアルドロスボウ?

レア度：2

攻撃力：126

属性・会心率：無し（覚醒水：100）

ビン：強撃ビン 接撃ビン 水中ビン 毒ビン 睡眠ビン ペイン

トビン

見た目：形は基本的な弓のフォルム。色は薄くなめしたルドロスの皮をそのまま貼り付けたので黄緑色。

備考：なめしたルドロスの皮を貼り付けただけの弓。皮は滑らかで肌触りも良い。威力などに不安が残る為、更なる強化に期待が掛かる。

・名前：ロアルドロスポウ？
レア度2

攻撃力：132

属性・会心率：水210

ビン：強撃ビン 水中ビン 毒ビン 麻痺ビン 睡眠ビン ペイン
トビン

見た目：ルドロスポウの矢を番える場所と糸の接続部分に海綿質の皮を被せて補強した感じ。

備考：水獣の素材使って強化された弓。 吸水性の高い海綿質を発射口に使用したお陰で放った矢は常に強い水の属性が付加される。

↳弓派生表

ハンターボウ？

？ハンターボウ？

？ハンターボウ？

？ハンターボウ？

？

？

ルドロスポウ？

？ルドロスポウ？

？ロアルドロスポウ？

？

↳狩猟笛解説

↳狩猟笛派生表

↳ガンランス解説

↳ガンランス派生表

オリジナル武器紹介（後書き）

……と言う感じですよ！

ツバサ：「派生表とか思ってたよりはちゃんと考えてたんだな（汗）」

「

ナギサ：「まあダメ作者の技術不足で少し見づらいけど（汗）」

そ、それは仕方ないじゃん！

ワカバ：「……ところで派生先が書いてない場所がありましたか？」

…アレは何なんでしょうか？」

ああ！ アレはまだ登場してないかツバサ達が持ってない武器の派生予定部分だ！

イナズマ：「つまりアノ何も武器が書いてない所に何か新しい武器が追加されるんだな？」

まあ、そう言う事！

あ、そうそう。 属性の所の 無し（覚醒○…??） っとなってる部分は上位以上のとある防具に付く《覚醒》ってスキルがあると追加される属性値の事だから。

まあ、本編で覚醒スキルが使われる事は多分ないだろうけど（苦笑）

PS 読者の皆様へ、

新しい武器が登場したらキャラ紹介と同じようにここに追加してい

く予定でです。

23 (コラボ編1) ・某豪華客船「風の船と村の農場」(前書き)

コラボ編執筆完了！

そして予定通り今日中に投稿！！

ツバサ：「一週間丸々掛けた割には文字数少なくてねーか？」

うん……でもいつものシリーズ初めの話と比べたら結構文字数多いからいいだろ？

ツバサ：「ん……まあ間違っただけじゃないしいいか……。」

ところでツバサしかいないのは何で？

ツバサ：「さあ？ 何か分かんねーけどいないんだよ？」

ふん……まあ後で探しに行くか……。

ツバサ：「っつー訳で最新23話どうぞ！」

あっ！ それ僕の台詞！

23 (コラボ編1) ・某豪華客船T風の船と村の農場

何処までも続く真つ青な空と海。

その海の上を大型で豪華な船が進んでいく。

その船の甲板に三人ほどの人影が出てきた。

「……………ん、ん…………… 潮風が気持ちいい」

その人影の内の一人・ミッシェルが甲板に出てくると同時に駆け出し、船首辺りで立ち止まるとそこから大きく伸びをした。

「……………ハア……………。……………ミッシェルの奴相変わらず周りの目とかまったく気にしてねえ。今は俺達以外誰もいないからいいモノのもう少し大人しくしてくれないモンかなあ……………？」

テッドが物凄く眠たそうな様子で頭をポリポリと掻きながら重々しく言う。

明らかに今さつき起きたばかりといった感じだ。

実際どうだったかは定かではないが多分気持ちよく寝ていた所にミッシェルがやってきて無理やり起こされるか何かがあったのだろう。

「まあ昨日までは嵐のせいですつと船の中に居たからね。あんな風にハシヤぎたくなるのも分かる気はするよ。」

テッドの隣で一緒にゆっくりと歩いてあげていたアンが言った。

実を言うとアンの言う通り今日までの数日間は嵐続きと言うかなり悪天候だったのだ。

しかし今日になってやっと空は快晴になり海も落ち着きを取り戻したのだ。

ちなみに船自体はスグに沈没しそうなデザインの上アレだけの悪天候の状態にも関わらず揺れすら殆どさずに安全に進んでいたようだった。

「いや、アイツはそんなの関係なくいつでもハイテンションじゃねえか。」

テッドが疲れたような顔でそう言った。

アンもその言葉を聞くとまずテッドの顔を見て次に苦笑いのした。

「テッド、アン！ 目的の場所が見えてきたよ！」

二人でそんな話をしているとミッシェルが船から身を乗り出して目的地らしき島を発見し振り返って大声で二人の事を呼んだ。

「おつ、マジで！ やったね」

その言葉を聞いたテッドはガッツポーズをするとすぐさまミッシェルのもとへと駆け寄っていく。

「ホント！ 見せて見せて」

そう言うとアンもテッドと一緒にミッシェルの所へと駆け寄った。

「おお……アレがそうなのか……。腕が鳴るぜ！」

テッドが目的地を確認すると嬉しそうに言う。

「ま、予定通りならあそこがアタシ達にとってこの船旅最大の目的の場所よ！」

ミッシェルがフフンと鼻を鳴らしながら言う。

「へ……。じゃああの島……ツヴァイ島で狩りをするってことね。」

アンがしみじみといった様子で言った。

実はアン達3人はこの船旅で海外の見たこともないモンスターを狩るといふ目的で来ていたのだ。

まあ、その理由はミッシェルがポケ村及びドンドルマ周辺に出現するモンスター以外の素材を使った防具を考えてみたいと言い出したからなのだが。

「ウチの仕入れルートでもなかなか手に入らない海外モンスターの素材……絶対手に入れるわよー！！ オオー！！！」

ミッシェルが気合十分といった様子で奮起する。

「どんなモンスターがいるのかな」

アンはまだ見ぬ未知のモンスターに思いを馳せて楽しそうに笑っていた。

ところ変わってツヴァイ村では……、

「……ふあゝゝ……。今日は天気がいいな……。……。」
青っぽい色のジャージを着たツバサが大きなあくびをしながら村の中を歩いていった。

ちなみになぜツバサはジャージ姿なのかと言うと今日はこれから大
体週に1回ペースでしている農場の手伝いをするからだ。

農場の仕事は土を掘り返したりするなどの汚れやすい仕事ばかりな
ので、なるべく身軽で動きやすく汚れても問題にならないジャージ
がやり易いのだ。

「……そう言えばワカバがこの村に来てそろそろ1ヶ月位経ったん
だよな？ ホント時が経つのは早いね……。……。」
ツバサはしみじみといった様子で言う。
そんな風に独り言を言っている内に農場に到着した。

中には広さが100？位しかない少々小さめの畑と藁屋根クラの小屋ら
しきモノ、後は色々な虫を育てている茂みがあるビニールハウ
ス位しかない。

ちなみに中の様子が分かるのはツバサの腰辺り位の高さの低木の茂
みが続いている困いみたいなもの以外は境界のようなモノは無く視
界を遮るモノがないからだ。

ツバサは入口の前に突っ立っていた。

まあ、入口と言っても農場を囲っている茂みの一部が開けて通り易
くなってる所に、『ツヴァイ農場』と書かれた木でできた簡単な看
板を立てているだけなのだが。

(……何か入るの面倒くさいなあ……。多分またアイツ等が何かして
くるだろうし……。……)

ツバサはそんな事を考えながらも入らずにはいかないと諦めたよう
に農場の敷地に踏み込んでいった。

「……ニヤニヤニヤニヤ……。……！」

直後、ツバサの前に3つの影が飛び出してきた。

跳び出してきたのは真っ白・真っ黒・真っ茶色の毛並みをした3匹

のアイルーだ。

しかも良く見てみると3匹とも手には墨汁が滴り落ちるほどたっぷり墨を吸った筆が握られている。

飛び出してきたアイルー達はそのまますばさの顔目掛けて跳びかかる。

「……………」

ツバサは突っ込んでくる3つの影を面倒くさそうな顔で無言のまま体を捻って避ける。

「フギヤツ!!」

「ニイツ!!」

「ニヤブシツ!!」

ツバサに突撃を回避されたアイルー達は3匹同時に顔面を地面に激突させてこれまた3匹同時に呻き声を上げた。

「おいお前ら、いい加減諦めたらどうなんだ？ 俺にその手はもう

通じないって何回言われれば気が済むんだ？」

ツバサが後ろを振り向いて蔑むひげような目つきでアイルー達に言う。

「ミヤー達だつてその位分かつてるニヤ。」

白いアイルーが打ちつけた顔を痛そうに押さえながら言う。

「だからミヤー達も策を考えたんだニヤア……………」

白いアイルーはそう言うのと口の端を上げてニヤリとする。

ツバサその反応を見て危機感を慌てて後ろを振り向く。

その瞬間今度は赤っぽいジャージを着た何者かがツバサに向かって跳びかかってきた。

「なっ……………」

そのままツバサ赤ジャージの奴に勢い良く押し倒される。

「今だニヤ!!」

白アイルーが号令をかける。

「ニヤニヤツ!!」

黒・茶色アイルーが返事をするると3匹は筆を握る手をギュッと握り直して勢い良くツバサの顔目掛けて跳びかかった。

そのまま筆を使って勢い良くツバサの顔にイタズラ描きをする。
口に泥棒ヒゲ、ほつぺたには猫ヒゲ、極め付けに額に『肉』という
字まで描かれていた。

「やったニヤー!!」

「ニヤ〜!!」

アイルー達がツバサの顔の上でガッツポーズをする。

ちなみにツバサは倒れこむ時に頭を打ち付けて軽く脳震盪を起こし
ている為動けない。

「……イタタタ……。」

ツバサと一緒に倒れ込んだ赤ジャージを着た者が薄い赤色のポニー
テールを揺らしながら体を少し起こす。

赤ジャージはナギサだったのだ。

「ん?……キ、キキキ、キャー……!!」

ナギサは自分がツバサを押し倒して上に乗っかっていると気付くな否
や一緒にいたアイルー諸共勢い良く吹っ飛ばす。

「……ん?……ってオワツ!」

やっと意識がハッキリしてきたツバサが突然ナギサに吹っ飛ばされ
てアイルー達共々農場にたまたまあった岩に激突して気絶した。

ちなみにどうやって吹っ飛ばしたのかは突然過ぎて吹っ飛ばした本
人であるナギサすら分からなかったそうだ。

それから一時間ほどして……、

「……っつー訳だからこういうイタズラをするのはするんじゃない
ぞ!! 分かったか!!」

ツバサがイライラとした口調で説教をしている。

現在この場には顔の墨を拭き取って説教をしているツバサ、正座し
て説教を聞いているナギサとアイルー達、その様子を困惑顔で見
ている緑のジャージを着たワカバといった面々がいた。

ワカバは普段は厚手のコートのような防具であるルドロスシリーズ
に隠れている為判らないが、ジャージのように体のラインが判りづ

らくない服を着ているとその見事なプロポーションがハツキリと分かる。

ちなみにワカバが来たのは大体30分ほど前で、その時に気絶していたツバサを揺り起こして顔を拭く為にタオルを渡した。

その後ツバサがすぐさまナギサとアイルー達を正座させて説教を始めたのだ。

その為30分ほどの間ずっとこのままの状況なのだ。

「……ふう……。ま、今日の所はこれ位でいいだろ……。……だよね？」

ツバサがナギサとアイルー達をギロリと睨みつける。

正座をした1人と3匹は固まったままコクコクと頷く。

先ほどまで説教がよほど堪えたようだ……。

この自業自得ながらも可哀そうな気がするアイルー達は《農場3ネコトリオ》と呼ばれるこの農場で働いているアイルー3匹組なのだ。仕事はキツチリこなすがかなりのイタズラ好きなのがタマに傷という困った奴らだ。

ちなみに白いリーダー的な奴の名前がアイ、黒いのがライ、そして茶色いのがチュイだ。

「……ところでイナズマ様がいらっしやらないようなんです……。」
ワカバが桑で畑を掘り返しながら不思議そうな顔で聞く。

農場長である竜人族の老人、通称「農場のじつちゃん」と呼ばれている人に聞いた所「とりあえず畑を耕してくれんかの？」と言われたからだ。

「え〜？ ワカバちゃん聞いてなかったの？ イナズマなら今日は親方が漁を手伝うように頼んできたから来ないって昨日酒場で言っていたじゃん？」

ナギサはワカバの顔をいかぶし気に見ながら言う。
もちろん畑を耕しながらだ。

「え？ え〜と……そう言えばそんな事を言がありましたっただけ……？」

ナギサの反応に焦ったワカバは苦笑いをしながら言った。

実を言くとツバサの言う通り昨日依頼が終わって酒場で打ち上げをしている時にイナズマが話していたのだが……ワカバ自身はその話の前にツバサがした気恥かしいトンデモ発言のせいで真っ赤になっ
ていた為聞いてなかったのだ。

ナギサはワカバの反応を見た後に昨日の事を思い出して納得したように頷く。

「ん〜？ もしかして覚えてないのか？ ……って事はこの後の話も忘れてるか？」

ツバサは自分のせいでワカバが話を聞いてなかったとは思っていない為まだいかぶしい顔をしている。

「あ！ それは大丈夫です！」

ワカバが先ほどまでとは打って変わって元気に言う。

「えっと……確かこの村に豪華客船が来て物資の補給をしていくからその手伝いをするって話ですよね？」

ワカバが淡々とした感じにそう答えた……。

23 (コラボ編1) ・某豪華客船「風の船と村の農場」(後書き)

……ん？ ああ、読み終わりましたか……。

ナギサ達さがしてる内に読み終わったんですね？

ナギサ：「アレツ？ ダメ作者！」

おお！ ナギサ達発見！

イナズマ：「結局約1ヶ月ぶりの本編投稿なのに出版のないオレって……。」

あゝ……イナズマ悪い…… (汗)

ところで話は変わるけどワカバが聞いたトンデモ発言ってどんななの？

ワカバ：「そ、それは……~~~~~!!」

あゝあ……また真っ赤になっちゃったよ (苦笑)

ではまた次回

24 (コラボ編2) ・対面!! (前書き)

最新話投k……、

ツバサ&ナギサ：「遅いつ!! (怒)」「

ふははははっ!!

双剣以外全員：「????????」「」

イナズマ：「遂に壊れたか…… (汗)」「

もう今回だけは遅いとか早いとかもうどーでもいいんじやー!!

双剣以外：「」「開き直ったー!!?!」「」

自分でも遅せーとは思っけどそれがナンボじゃー!!

ワカバ：「どうでもいいと言っている割には遅いと言っ自覚はある
んですね…… (汗)」「

まあな! それに何の理由も無しに開き直ったりもしてないしな!!

ツバサ：「はあ? どう言っ事だよ?」「

それについては後ほど

ナギサ：「何それっ!!?!?」「

では最新話スタート

ツバサ：「いや話聞けって!!」

24 (コラボ編2) ・対面！！

農場でのゴタゴタから2時間ほど後……、

現在ツヴァイ村のあまり大きくない港には不釣り合いなほどに巨大な船が停泊していた。

この船には今の時代より遥か何千年以上昔に栄えそして滅んだ文明が使っていたとされる『エンジン』と呼ばれる機械を動力としたかなり珍しい船だ。

ちなみに船の側面に書かれた文字を読む限りでは『大型豪華客船T N号』という名前の船らしい。

「凄く大きな船ですね……。私、こんなに大きな船は初めて見ました……。」

ワカバが感嘆の声を上げる。

「あたし達がツヴァイ村に来るまでに乗ってきた船も大きかったけど……コレは流石に凄いね……。」

ナギサも驚愕のあまり口をポカーンと開いたままだ。

そしてツバサ達の後ろを見れば今度は割と背が高いワカバの身長よりも高く積まれた大量の木箱がある。

この木箱は1週間ほど前から周辺の村などにもあたってかき集めた魚やタコ・イカ・貝……などの魚介類を『エンジン』と同じく太古の技術である『急速冷凍』とかいう事をして凍らせた後、溶けないように氷結晶と一緒に箱詰めした物だ。

これらの木箱はは全てこの普通の一般人では到底乗船する事が出来ないであろう船に運び込まれる荷物だ。

なぜこんなに大量の魚介類がツヴァイ村にあるのかとすると全ての船から……延いてはこの船を管理している旅行会社からツヴァイ村へ直々に申し込まれた依頼なのだ。

村長も依頼を伝えられた翌日に「ツヴァイ村始まって以来の大きな仕事だ！ みんな心して準備をするように！」と、2ヶ月半以上先

から張り切って村人達に話していた。

「……にしてもこんだけの魚全部積むのって一体どのぐらい時間があつたら終わるんだろうな……。」
ツバサが目の前の船を見上げその後、後ろの木箱の山を見てからうんざりした様子で言う。

ところ変わってツヴァイ村沖のとある漁場にて……、

「オラアア!!」

「クルアアア!!」

「ぬうおりやあああ!!」

親方・イナズマ・ヒウチの三人(?)が力強い雄叫びを上げながら船にいるロドロス達に攻撃する。

どうやら漁船の近くにロドロスの大群がいたようで、獲ったばかりの魚を狙って船に上がり込んできた奴等を撃退しているようだ。
今回は

親方が最後まで生き残っていた一匹に焰剣リオレウスを勢い良く振り下ろした所でやっと船上に静けさが戻る。

「……ふう〜やつと終わったぜ。」

イナズマが船の上で倒したロドロスからの剥ぎ取りを終えると同時に言う。

ちなみに漁船の上にながってきたロドロスは大体15匹ほどだったが、その内8匹ほどは倒さずに親方が海へと放り投げた。

「いやいやイナズマよ、今回はすまんなあ! 最近この辺りの漁場

はロドロスが増えてきたから困ってたんだ! 現役から何年も離れ

とったワシや水上戦が苦手なヒウチだけでこの数は流石に厳しいか

らなあ……。」

親方が相変わらずのテンションの高さで言った。

「師匠頼みなんだから受けるのは当然ツス! それにそんな事言ってる割には殆ど二人(?)が倒してたじゃないツスか?」

イナズマが親方にテンションに苦笑いしながら言う。

「……それにしても本当にこっちに来て良かったのか？ お前の言う通りワシ等だけでも無理ではないしアッチの手伝ってた方がいいと思うんだが……。」

すると親方が急にマジメな顔になって聞く。

ちなみにアッチと言うのはもちろんツヴァイ村で豪華客船に魚介類を運び込む仕事の事だ。

「うっ……イヤ……その……。」

親方の言葉を聞いた瞬間イナズマの表情が曇る。

「ん？ もしかしてワシに何か話があるとかか？」

親方が片方の眉を意味有り気に吊り上げながら言う。

「えっ！？ 何で解ったんスか？」

イナズマが俯うつむいていた顔を上げながら驚きの声を上げた。

「ぬおっ！？（まさか本当にそうだとは……） ……ぬ……うむ、

ワシ位になると弟子が考えてる事位簡単に分かる物だあ！？」

親方が胸を握り拳でドンと叩きながら言った。

まあ態度とは裏腹に声は裏返っているのだが。

ヒウチの方を見れば明らかに疑ってるようにジト目で親方を見つめている。

「……じゃあ、早速なんすけど……。」

「お、おう……。」

そんなような受け答えが終わるとイナズマが何か話始めた……。

場所は戻ってツヴァイ村の港……、

「……あれっ？ ……ねえツバサ、あの人達の格好……アレって防具じゃない？」

ナギサ船の出入り口から出てきた三人を指差して不思議そうに言う。遠くて判りづらいが三人はそれぞれコンガシリーズ女用の太刀使い・ガンナー用ランゴシリーズのボウガン使い・ザザミシリーズ男用の

太刀使いの様に見える。

「んんんん？ …… ホントだな、しかもそんなにランクも高くない
防具ばつかだ……。 金持ちばつか乗ってるハズなのに何でだ？」
ツバサはよく目を凝らして出てきた三人の姿を確認すると訝しげに
見る。

「すみません……。あの防具は一体……。」

ワカバがおずおずと聞いてきた。

どの防具もこの大陸には存在しない防具だからだ。

「？ ああ……。あの防具の事だろ？ アレはコンガシリーズ・ラン
ゴシリーズ・ザザミシリーズって言う防具だ。 それぞれババコン
ガ・ランゴスタ・ダイミヨウザミって言う俺達がいた大陸に生息
するモンスターの素材を使った防具だ。 まあそれぞれ作るの
はそんなに難しくは無かったハズだ。」
ツバサが説明した。

「なるほど、そう言う事ですか。」

ワカバが納得したように頷く。

「とりあえずアツチに行って話しかけてみない？」

ナギサが提案する。

「うん……。ま、そうするか……。」

ツバサはナギサの提案に少しだけ考え込んでから頷く。

ハンター三人組にはすぐ追いついた。

三人は酒場に向かっているようだった。

まあハンターなのだから当然と言えば当然だが。

「ねえねえ、三人共ちよつといい？」

「おいナギサ！ 初対面なのに失礼だろ！」

ナギサのイキナリの元気かつ不作法なあいさつを見てツバサがツツ
込みを入れる。

その様子を見ていたハンター三人組はその様子を不思議そうな顔で
見ていた。

近くで見ると三人の姿が良く分かった。

顔を見た感じ（ザザミシリーズの少年は頭防具を外していた）ではツバサ達と大体同じ位の歳に見える。

更に良く見てみると防具の外見がそれぞれ既存のモノとは違っていいようだ。

「あの〜……一体なんの御用でしょうか……？」

コンガシリーズを纏っている少女がおどおどとした様子で質問してきた。

「ん？ ああ、悪い悪い。 ちょっと聞きたい事があってさ……。

悪いんだけど聞いて貰えないかな？」

ツバサができる限り声色良くなるように注意しながら言う。

「俺達に聞きたい事？ まあ構わねーけどそう言うアンタ達は何者なんだ？」

ザザミシリーズの少年が聞き返す。

「俺達はこの村のハンターだ。 まあ今をこんな格好だから分かんないかもしれないけど……。」

ツバサが苦笑しながら答える。

ちなみにツバサ達は先ほどまで農場でしていた為ジャージ姿のままだ。

「ふーん……なるほどね……。 だったら丁度いいからアタシの質

問にも答えてくれる？」

ランゴシリーズを着た少女が言ってきた。

「ああ、構わない。」

その言葉をツバサは快く承諾した。

「まあ立ち話も何ですから酒場に入りませんか？」

するとワカバの酒場で離さないかと提案してきた。

六人はその提案に全員が納得して酒場の中に入っていった。

酒場の中にて……、

「……じゃあ改めて……。 俺の名前はツバサだ。 でこっちの二

人が……、」

「あたしはナギサ！ 宜しく！」

「ワカバです。 宜しくお願いします。」

ツバサ達側の三人が自己紹介をした。

「私は名前はアンです。」

「俺はテッドだ！」

「ミッシェルよ！ 宜しく。」

アン達側も自己紹介をした。

「……で、アタシ達に聞きたい事って何？」

ミッシェルがノリノリな様子で聞く。

なぜか質問されるのが嬉しそうだ。

「ああ、まずはその装備だ。 その防具……」

「やっぱりその事ね！ コレはアタシがデザインしたオリジナルの防具なの。」

ツバサが言葉を続けようとしたらミッシェルがハイテンションで言葉を割り込ませた。

どうやらツバサ達がこの事に気付いて驚いていると思って嬉しがっていたようだ。

「……あの、その事じゃないんだけど……。」

ナギサがミッシェルの勢いに少々気押されながらも小さく言う。

「……えっ……その事じゃないって……？」

ミッシェルはナギサの言葉を聞いた瞬間急に固まる。

「イヤ……つまり俺達が言いたいのは何でその位装備のハンターなのにあんなスゲー船に乗っているかが気になったって事だよ。 普通に考えたらその位の装備のハンターがあんな船に乗れるだけの金を持ってるとは思えないからな……。」

ツバサが申し訳なさそうに言う。

ミッシェルの方を見てみると顔を下に向けて明らかにションボリとしている。

「……え、えっと……その……。 このミッシェルの家が結構なお

金持ちで私達はミッシェルに連れて来て貰ったんです……。」「
アンが親友の珍しく凹んでいる姿に動揺しながらも律儀に質問に答える。

「な、なるほどね……。」「
ナギサも動揺しながら言う。

「……………だとしても何でわざわざ……。いくら金持ちでもそう簡単にあれだけの船には乗らねーだろ？」

ツバサが思わずと言った様子で言った。

「……………モンスターの素材……。」「
ツバサの言葉を聞いたミッシェルが膨れっ面で言う。

期待通りの展開にならなかった事に段々腹が立ってきたのだろうか？

「モンスターの素材……………ですか？」

その言葉をワカバが相変わらざるの遠慮がちなながらも不思議そうな顔で聞き返した。

「そ、そうそうそれだよ！ コイツが今まで使った事のない素材の防具をデザインしたいって言うから俺達は来たんだよ！ アンタ達が知ってたら教えてくれねーか？」

テッドがこの悪い空気を断とうと精一杯の空元気をしながら言う。

「ど、どのモンスターの素材？」

ナギサもテッドの思惑おもむくを理解したのか我先にといった様子で聞く。

「え、え〜と……………確かク……………クラ……………クリ……………。」「

テッドが必死になって思い出そうとしていると……………、

「彩鳥・クルペッコの素材よ！」

ミッシェルが膨れっ面のまま吐き捨てるように言った。

「……………クルペッコお！？」

ですか！？「……………」

予想外の答えにツバサ達三人の驚きの声が重る。

ちなみに一人だけ言い回しが違うのが誰かは言わずとも分かるであろう。

24 (コラボ編2) ・対面!! (後書き)

ツバサ：「終わったぞ！ 早速説明しろ！」

ん？ ああ、そう言えばそうだったな……。……。

ナギサ：「開き直った理由って何なの？」

いや、実は来週から2週間ほど高校入試関係で授業が殆ど午前だけになったり、家庭学習になったりで時間がかなり取れるから、そのウチに沢山執筆すればいいと思ったんだよ。

イナズマ：「つまり次回からの更新は少しは早くなるかもって事か？」

そゆ事

ワカバ：「なるほど。」

……と言う訳なので次回もお楽しみに〜

25 (コラボ編3) ・戦鬪前の日常? (前書き)

ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああ

ツバサ：「!?!? また壊れたのか? (汗)」

やっちまった……かなり酷い…… (汗)

特に最後の方がかなりヒドスな事に…… (汗)

ワカバ：「…… (汗)」

書き直した方がいいのかな…… (汗)

ナギサ：「……じゃあ直したら? (汗)」

いや、内容が思いつかないから無理!

ツバサ：「じゃあ言うなよっ!!!」

それにこの話は絶対にないといけないから仕方ないしね

ナギサ：「何かウザい (汗)」

……と言う訳で最新25話更新!

ツバサ：「もうどうでもいいや…… (汗)」

「コラボクルペッコお！？」

「ですか！？」

ツヴァイ村の酒場にツバサ・ナギサ・ワカバの3人の絶叫が響く。

「な、何よ？ アタシ何か変な事言った？」

ミッシェルは3人の声に驚き自分が怒っていたのも忘れて目を丸くする。

「あ……いや、別にそう言う訳じゃんだけど……。 ちょっとゴメン、少し待ってて！！」

ナギサはそう言うのと隣に座っていたツバサとワカバの首根っこ掴んで席から離れて行く。

アン達3人は呆気にとられてそのまま座っていた。

「……ねえねえ、どうする？」

ナギサは酒場の隅までツバサ達を引っ張っていくと小声で話し始めた。

「ヒウチの事だろ？ ……丁度いい事に今は親方とイナズマと一緒に漁に出てるから問題無いだろうが……帰ってきたら何か面倒な事になりそうだな。」

ナギサの問いかけにツバサが疲れたような顔で答える。

「……やっぱりそうですよね……。」

ワカバも困ったような顔で言う。

「……あっ！ そう言えばこの間ジュディがクルペッコの依頼があるからやってほしいとか言って言ってなかったっけ！？」

突然ナギサが思い出したように大きな声で言った。

「……すると、」

「おいおいどうしたんだよ？」

「何の話なんですか？」

「ってか今クルペッコの依頼があるとか言わなかった？」

ナギサの声を聞いたアン達がそれぞれの疑問を口にしながら近づいてきた。

「うえっ!? イヤ……そのう……。」

ナギサの方を見てみれば3人が詰め寄ってきた事に驚いてパニックになっている。

うまく頭が回らないのかまともな言葉が出てきていない。

「え〜と〜……つまり……そのう……。」

「確かに俺達はクルペッコの依頼があるって話をしていた。つつ

ーか今俺達が話し合っていたのはその依頼をお前達に任せる事にするかどうかって話だ。」

するとツバサがあたふたしているナギサを見かねて助け舟を出してやった。

しかし半分以上は口から出まかせな為ナギサとワカバはキョトンとしている。

「……………だよな?」

ツバサはキョントンとしている2人に視線を向けながら言う。

その顔には「話が拗れるのも面倒だからコレでいいよな?」と言う気持ちがありありと浮かんでいた。

「うんうん、そうだよ! ね、ワカバちゃん!」

「へっ? ……あ、はい! そうです!」

ツバサの考えをいち早く理解したナギサと少し遅れて理解をしたワカバがそれぞれ頷き合う。

……………少し……いやかなり不自然なようにも見えるが。

「うん……何か附に落ちないけど……ま、いいや! アン、テッド! 早速依頼受けるわよ!」

ミッシェルはそう言う。

ただしまだ若干納得のいつてないような表情だが。

「おい! ちょっと待てミッシェル、その前にあの話はどーすんだ?」

テッドはそう言ってカウンターに向かっているミッシェルを引きと

める。

「その……あの話って何でしょうか？」

ワカバがそくと手を上げながら言う。

表情は心なしが安心したような顔にも見える。

「ん？ ああ、話つてのは狩り場の案内と狩りの手伝いをしてくれる奴が必要だつて話だ。」

ワカバの問いにテッドがそう答えた。

「なるほどね……別に構わないよ？ ツバサとワカバも構わな

いよね？」

ナギサが気楽そうに問う。

「うん……まあ構わないか……。ワカバは？」

「えっと……私も特に問題はありませんか？」

ツバサとワカバは少しだけ考えるような素振りをしたものの結局は快諾した。

「ありとがとうございます!!」

アンが嬉しそうにお礼を言った。

「手伝ってくれるつても決まった訳だし早速契約しよつと」

ミッシェルはそう言うのとスキップしながらカウンターへと向って行った。

それから30分ほど後……、

ツバサ達6人は先ほどの荷物の前に来ていた。

ただ、先ほどとは違い現在は村人の1/3近くと船員らしき人達と一緒にになって荷物運びをやっていた。

「はあ……結局荷物運びはしなきゃなんねのか……。」

ツバサが船に運び込む荷物を抱えながら面倒くさそうにぼやく。

クルペッコ狩りの手続き自体は簡単にできた。

だがその途中にエドガー近寄ってきて村長が呼んでると言われたのだ。

アン達が手続きを終わらせ後に早速行ってみたら村長がカンカンに

怒っており、村長曰く「村の一大事に何をしてるんだ！ 早く運んでくれ！」との事だった。

明らかに普段とは人格が変わっている。

ちなみに事情を説明しようとはしたが、ツバサ達が話そうとする前に慌てて荷物運びの仕事をしにいった為説明はできなかった。

まあ仕事を受けた時から相当張り切っていたようだし周りが見えなくなるのも領けない事は無いとも言えるが……。

かくして再び此処で荷物を運びこむのを手伝う事になったのだ。

「まあ俺達も手伝ってやってるんだから少しぐらい我慢しろって……。」

ツバサの呟きにテッドが苦笑しながら返す。

初めはこんな状態だった為狩り場の案内はできないかもしれないと言う話になっていたのだがアンが「それだったら私達も手伝えばいいじゃないかな？」と言った為アン達も手伝ってくれる事になったのだ。

ただミツシエルだけは運び始めて早々に重さで動けなくなった為ちよっと休憩しているようだ。

「でもいいの？ 船が出るまえにクルペッコ狩らないとまずいんじゃない？」

ナギサが横で運んでいたアンに話しかける。

「うーん……まあ確かにそうなんだけど……。でも此処の島の狩り場って村から1・2時間歩いていけば着くんじゃ？ だったら大丈夫、船が出港するのは明日のお昼頃らしいし……。」

アンが少し考えながら答える。

ちなみに先ほどまでは敬語で話していたがテッドに「アン、お前そろそろ敬語は辞めていつも通り話したらどうだ？ ツバサ達は別に何歳も年上って訳でもないしこれから一緒に狩りするだからそんなによそよそしい話かたする必要ねーだろ？」と言われた為普通に話している。

「まあ確かに夜も狩りはできますしね……。」

ワカバも荷物を運びながら納得したように頷く。

そろから更に数十分後……、

ツバサ達は荷物の前に集まって休憩していた。

「……ところで誰が案内する事にします？」

ワカバが唐突に言い出した。

「じゃあ私がやるよ……」

「いや、俺がやる。」

ナギサがやる気満々といった様子で名乗り出ようとしている所にツバサが割り込んだ。

「ちよつ、何で！？ あたしがやるって言ってるじゃん！！」

ナギサがツバサの突然の発言に怒りながら言う。

「まあ待て！ コレにはちゃんと理由がある！」

ツバサがナギサを宥めながら言い始めた。

「まず一応確認したいんだけどお前ら3人は狩りの手伝いだけじゃなくて狩り場の案内もして欲しいんだよね？」

ツバサがアン達に聞く。

「まあね、この辺りの狩場は見るのも初めてだからできる限り詳しく教えてほしいから。」

ミッシェルが代表して答える。

「ならこの村に来てから一ヶ月弱しか経ってないワカバはないだろう？」

ツバサがキツパリと言い切る。

これにはワカバ本人も頷かざる得なかった。

「次にナギサだ。」

ツバサがナギサをビシッ！と指差しながら言った。

「そんな事しないで早くあたしが駄目な理由を利かせて貰いましょうか……。」

ナギサが不機嫌そうに言う。

アレだけだけバツサリと否定されたからかなり機嫌が悪いらしい。

「まあそんなに焦るな。ナギサ、お前ベースキャンプの前のエリアで何処に何のアイテムがあるかとか覚えてるか？」

ツバサはナギサの不機嫌そうな顔など気にも留めずに言う。

「うえっ？ ……えっと……確か……うーんと……確かキノコの採取場所が3箇所ぐらいあつて……」

「残念、いきなりハズレだ。キノコの採取場所は2箇所だろ？」

ナギサは突然の問題に驚きつつも何とか答える。

だが案の定不正解だった。

その後もツバサはナギサに他にも4問ほど質問を続けた。

しかし結果は全問不正解となった。

「……こんな感じで狩り場の事はナギサより俺の方が詳しい。それにコイツはちょっと抜けてる所があるから重要な所を説明し忘れる可能性が高い……っつー訳だ。」

ツバサがそう言つて説明を締めくくる。

しかし……、

「ちよつと！！ 誰が抜けてるって!？」

ナギサが怒りだした。

まあ突然バカ宣言されたような物だし当然と言えば当然だろう。

「別に間違つた事言つてないだろ！」

「だからって酷過ぎでしょ！」

どうやらケンカが始まつたようだ。

もちろん他のアン達3人の手伝いをすると言つた話は完全に忘れている。

「……何か俺達忘れられてねーか……。」

テッドはそう呟きながら何となく荷物の上の方を見た。

よく見ると荷物の上の方がグラついている。

その下には丁度アンが座つていた。

「ヤバツ！ 逃げるアン!!」

テッドはそう叫びながらアンを助けようと駆け寄っていく。

アンは「え？」と言いながら振り向いた。

と、同時に荷物が崩れて落ちていく。

(くっ、何とか間に合え！)

テッドはそう考えるとアンを突き飛ばそうと勢い良く跳躍する。しかし……、

「よつと、危ないな。」

そう言いながらアンが軽く座っている位置をずらした。

「え？」

ガラガラドゥッシャーン!!!

テッドの驚きの声があると同時に数個の荷物がテッドの上に落下していった。

「がっ……ぐふっ……」

テッドはピクピクと小刻みに震えたかと思うとピタリと止まり動かなくなった。

「アレ？ テッド？ テ、テッド……!!」

「テッド？ ちょ、大丈夫!? テッド、テッド……!!」

「テッド様!? だ、大丈夫ですか？」

「オイオイ何があつたんだよ!？」

「……つてか大丈夫!？」

その場にいた5人がそれぞれ心配そうにテッドを見てていた。

25 (コラボ編3) ・戦闘前の日常? (後書き)

うゝん……何か最後の方めちやくちゃだなあ…… (汗)
一応ギャグのつもりで書いたけどコレ下手したらシリアス系っぽくも見えるよなあ (汗)

ツバサ:「何だよコレ…… (汗)」

うゝん……ちょっとコレはやっちまったって感じですかね (汗)
ちなみにネタバレになっちゃいますが、一応テッドはそれほど酷い怪我ではありません。

それではまた次回

ツバサ:「今回はホント酷いな…… (汗)」

今回は書きたい場面だし頑張りまゝ

26 (コラボ編4) ・夜空やらラブコメやらクルペッコやら…… (前書き)

読者の皆様お久しぶりです！
遂に更新しました！

キャラ全員：「……遅い！！！」 (怒) 「……」

ツバサ：「ってか何時ぶりの投稿だ？」

ナギサ：「えつと……」

イナズマ：「前回の投稿が1月30日で今が2月20日のだから……」

ワカバ：「大体3週間ぐらいですかね？」

つ………すいません……… (汗)
毎度おなじみの言い訳コーナーはこの後活動報告にて書こうと思っ
てます (汗)

ちなみに遅くなったお詫びとしては何ですが今回はタイトル通りい
つもよりは色々と盛り沢山になっています。

では最新第26話、どうぞ……。

ツヴァイ島の狩場・通称孤島にて……、

上を見上げれば一面綺麗な星空、更に眼前には鹿型のモンスター・ケルビ数匹が小川の水を飲み草を食^はんでいる光景が見える。

ここは先ほどツバサがナギサに出した問題にも出てきたベースキャンプから出てすぐの河原がある広いエリアだ。

「ふう……此処は相変わらず平和だな。 ホントモンスターの相手何かしてないで寝転がってゆっくりと過ごしてたくなるなあ……」

ツバサがあくびをしながらそんなのん気な事を呟く。

ツヴァイ島は比較的熱帯に近い気候の為夜だと言うのに殆ど寒さはない。

「ツバサ、よくそんなのん気な事言ってる余裕があるね。 幾ら一回か狩った事がある相手だからって気い抜き過ぎじゃない？」

ナギサがツバサののん気な発言に怒りながら言う。

流石に狩り場でコレを気を抜き過ぎだろうと思ったようだ。

「いやいや冗談だって、そんな本気で睨むなよ。」

ツバサがすまなそうに答える。

「俺だってその時になったら結構本気でやるつもりだよ。 じゃないと今回狩りに出れなかったテッドに悪いもんなあ。」

と、ツバサは苦笑交じりの顔をナギサの方に向けながら言った。

同刻、ツヴァイ村の酒場にて……、

「ハア……俺は一体何でこんな事になってるかね？」

席に座っているテッドがやれやれと言った様子で首をすくめながら言う。

その腕を見ると少々粗めに包帯が巻かれていた。

すると……、

「まったく、何が「なんでこんな事になってるかね？」よ。半分
以上は自分のせいじゃない。」

そう言いながらミッシェルがテッドの後ろから歩いてきた。

見てみると此方の腕には大量の薬草と新しい包帯を抱えられている。
「落下してきた荷物の下敷きになって左腕怪我して狩りに行けなく
なるとか何なのよ？」

ミッシェルがテッドに蔑むくばような視線を向けながら言う。

どうやらテッドはあの事件の時に左腕を捻挫してしまっただけらしい。
ちなみになぜミッシェルが此処に居るかと言うとあの後狩りをどう
するかと言う話になった時、ミッシェルが「テッドの看病とかする
人が必要だからアタシはこっちに残る！ って訳だからアンはクル
ペッコの素材入手宜しく！」と言ってそのまま酒場に残ったからだ。
「うぐっ……け、けど仕方ねーだろ？ あの時はかなり危なかった
し……。」

テッドはなんとか反撃を試みしてみる。

「でも結局アンは簡単に避けれたじゃない？」

「ぐっ……。」

しかしミッシェルによって呆気なく迎撃された。

「ま、まあアタシがそんなんになっているテッドの為に此処にいて
あげてるんだから感謝しなさいよ！」

ミッシェルが突然先ほどまでとは打って変わって「ゴニョゴニョと小
さく言っ。」

よく見ると頬が多少赤らんでいた。

するとテッドが少し考え込むような仕草をして、

「……うん、そうだな……ほんと悪かった。……ゴメンな。」

テッドは少し俯きながらもミッシェルの事を見据えると、徐おもむろに口を
開いて静かで優しい感じに言う。

「……！ そ、そんな事いいから早く腕出しなさいって！ 包帯巻
き直してあげるから！」

普段は比較的強気なテッドがいきなりこんな雰囲気で言いだした事に虚をつかれたミッシェルが上擦った声で叫ぶ。
顔など真っ赤になってる。

「？ まあいいや。頼むぜミッシェル。」

テッドは急に顔が真っ赤になったミッシェルを不思議に思いながらもとりあえずその事は気にせず、元々あった包帯を口と捻挫してない右手を器用に使いながら外すとそのまま左腕を差し出した。

ミッシェルはというと多少慌てたように包帯を掴みテッドの腕に乱暴な感じで包帯を巻いていく。

テッドは当然、「いててっ！ ちょ、ミッシェル！ もうちょっと優しく巻いてくれ。」と頼むが、「うっさい、少しぐらい我慢してよ！」と少々ヤケクソ気味にミッシェルが言い返す為テッドは暫くの間痛みに耐える羽目にあった。

ちなみにその二人の様子を酒場のカウンターの中からジューデイがニコニコと面白そうに見守っていた事は言わなくても構わない事だろう。

ところ変わって再びツヴァイ島、

此処は先ほどまでいた河原のエリアのすぐ隣のエリアだ。

目の前に見える河口は隣のエリアの川から地続きで繋がっており更に先に進んでいけば海に行きつく。

このエリアは此処ツヴァイ島の中でもクルペッコが比較的沢山見かけられている為、まずはこのエリアで様子を見ようと言う話になったのだ。

補足だがなゼクルペッコがこのエリアでよく見かけられるかという
と奴等の主食は魚なので食事をしに来ていると言われている。

ただ、初めにこのエリアに来た時にはすでに数匹のジャギイが群れている姿があった。

なのでエリアに入ってすぐに4人はそれぞれの武器を構えて戦い始

めた。

それぞれが使っている武器だがワカバは初めてツヴァイ村に来た時にも見せた《水鎚ヴォジャノイ》、アンが一般的な鉾系太刀である《鉄刀【楔】》と普通の武器だったがツバサとナギサの武器だけは違っていた。

まずツバサの武器は見た目が左右で異なりどちらも骨製の双剣の上にロドロス種の素材を巻き付けたものだが2本の内の小さい方である右の剣は水生獣の皮を貼り付けてだけなのに対し左は更にその上から海綿質の皮を巻き付けたような感じになっている。

名前は《ロアルエツジ》と言い、以前造った《ルドルシツクル》にロアルドロスの素材を使って強化した水属性を持つ双剣だ。

普段は《ジャギイファンク》や《ペッコフェザー》のように左右対象な形をした双剣を好むツバサには珍しく右と左でかなり形が違う双剣である。

そしてナギサの方はと言うと此方もロアルドロスの素材を中心に作った弓だった。

此方も以前造った《ルドロスボウ?》を海綿質の皮で補強し水の属性を付加した弓で名前を《ロアルドロスボウ?》と言う。

ちなみにジャギイを狩っている時や素材を剥ぎ取る時にジャギイの事を始めて見るアンが終始目を見開いて驚きの声を出していたのは言うまでもない。

そんな事があってから約数十分後……、

「……へへ、つまりその武器がロアルドロスってモンスターから取れる素材を使って造った防具と武器なんだ。」
アンが感心したような声で言う。

このエリアで待ち伏せする事に決めていた為、ジャギイを狩ってから暇を持て余していた女子三人が一緒になって談笑していたのだ。ちなみにツバサは話をしているスキにクルペッコが現れてもいいように見張りをするといい三人から少し離れた場所に居る。

まあそうは言っても本音は自分では女子の話に入り込むスキなどな

いと思つて自重しただけだと思われるが。

「はい！ 先ほども話した様に彼等は本当に素晴らしいモンスターですよ。今回は出会う事はないですがもし再びこっちに来た時には是非狩られる事をお勧めします！」

アンの言葉にワカバは目を輝かせて返す。

内容は元々それぞれの装備の話についてなのだったがワカバの装備の話をしている内にロアルドロスの話に移行していたらしい。

ナギサはワカバの様子に苦笑してからふと女子の話に混ざれずに離れた場所のツバサの方をしてみる。

するとツバサもやはりナギサと同じような苦笑を浮かべていた。

それにしても相変わらずワカバはロアルドロスの話をする時が一番楽しそうに見える。

その様に暫し談笑を楽しんでいると、

(ん？ 風の流れが変わった？ ……もしかして！)

ツバサがそう考えた直後、

バサ、バサ

と言う何かが羽ばたくような音が聞こえた。

「ナギサ、ワカバ、アン！ 来たぞ！」

ツバサはそう叫ぶと同時に背中からロアルエッジを抜き放った。

ナギサ達もツバサの声に反応して素早く武器を構えると上を振り仰ぐ。

すると月明りを遮る何か巨大な影が地面に降り立とうとする姿があった。

バサ、バサ、バサ……ドスン

と言う音がしたと同時に夜の暗がりの中でもハッキリと分かるほど鮮やかな色合いをした彩鳥が降り立つ。

「コイツが……クルペッコ……。」

アン今日何度目か分からなくなるほどしてきた驚愕の色が見える顔で呟く。

やはり初めて見るモンスターなのだからこのようになるのは当然だろう。

加えてすでにイヤンクツクを知っているハンターなら尚の事、同じ大型鳥竜種であるハズなのにあまりにも違うその姿を見れば驚くと言うモノだ。

降り立ったクルペッコは最初ツバサ達の事を不思議そうに見渡してから突然特徴的な形のクチバシを前につき出して「クルルルル…、クウォー…！」と鳴き声を上げて身構える。

ツバサ達が自分にとって敵であると判断したのだろう。

クルペッコはまず自身の翼を体の前に出し翼に付いた火打石のような部分をガチガチと打ち鳴らし始めた。

「火打ち攻撃来るぞ！」

ツバサの怒声と共にクルペッコが火打石を打ち鳴らしながら跳びかかってきた。

「クアツ、クアア！」

狙いは一番近くに居たツバサだ。

ツバサの直前着地すると同時に再び翼の火打石を打ち鳴らす。

すると　ボシュ！　と言う音と共にクルペッコの目の前で小さな爆発が起きる。

「クツ……。」

ツバサは爆発を体を捻ってどうにか避ける。

しかしクルペッコはツバサがかわした事に気付いてか気付かずか今度は固まっていたナギサ達に向かってそのまま二回三回と連続で跳びかかっていく。

「みんな、散らばるよ！」

クルペッコが三度目の火打ち攻撃をしようと身構えた瞬間アンがそう叫ぶ。

「クアア!？」

アンの指示どうり女子三人はバラバラの方向に回避行動をすると、クルペッコは誰を狙えばいいのか分からなくなったんか突然力を抜

いた。

「おりゃ！」

クルペッコが気を抜いた瞬間ツバサは駆け寄り斬り払いで胸の辺りを斬りつけた。

「まだまだ〜！」

「クアツ！」

ツバサがそのまま続けて右で斬りつけてから更に連撃を続けようと体を捻りながら軸足を入れ替えた直後、クルペッコは羽ばたきながら後ろに向かつて飛び退る。

そしてそのまま羽ばたいて滞空している。

ツバサの方はと言うとクルペッコの起こした風圧で吹き飛ばされ攻撃が中断させられていた。

その直後、

「シユート！」

ナギサが掛け声と共にロアルドロスボウから矢を放つ。

狙いはツバサと同じでかなり目立つ朱い色をした胸だ

「ヤツ、ハツ、ヤツ、シユート！」

そのまま連続して矢を放ち続ける。

「クワアツ!？」

一カ所に集中して攻撃を続けたお陰かクルペッコは驚いたような声を上げて墜落した。

「ラツキー」

ナギサがそう言うと同時に体制を立て直したツバサがクルペッコに駆け寄って胴体を斬りつける。

ナギサが矢を放ちはじめると同時に駆け出していたワカバとアンもツバサに少し遅れながらも駆け寄って攻撃を始める。

アンがツバサとは逆サイドから胴体を攻撃してワカバは頭部を狙っている。

「私も！」

ナギサもそう呟くと再び攻撃を再開した。

それから数分後……、

「クワアアアアアア!!」

四人の連撃により早くも消耗の色が見え始めたクルペッコは大きな声を上げるとそこから勢いよく翼を羽ばたかせながら後ろに向かって飛ぶ。

今度は最初の時のように滞空はせずすぐさま着地した。

その直後グイツと頭を持ち上げると……、

「ウォー！ ウォウ、ウォウ、ウォウ！」

クチバシの先端をラツパのように広げ朱かい胸を大きく膨らませながら大きな音で鳴き始めた。

「!! アイツドスジャギイでも呼び寄せるつもりか？」

ツバサが少し焦ったような声で言う。

クルペッコには自分とはまったく異なるモンスターの鳴き声をマネてそのモンスターを呼び寄せる能力がある。

今回の鳴き声はドスジャギイの鳴き声だ。

「ギヤア、ギヤア！」

案の定鳥竜種独特の鳴き声が聞こえてきた。

鳴き声はどうやらエリアを囲む岩壁の隙間の方から聞こえたらしくそこから五匹ほどのジャギイが現れた。

四人はその後に出てくるであろうドスジャギイを警戒して身構える。

……しかし、

「アレ？ ドスジャギイは出てこないね？」

ナギサが不思議そうに呟く。

ナギサの言う通りドスジャギイはいつまで経っても出てくる気配がない。

「そう言えばあの声マネって時々ドスジャギイは来ないでジャギイだけが出てくる事もあるんですね？ 今回もそうだったんでしょ
うか？」

ワカバも手を顎の辺りに当てながら不思議そうに言う。

「今そんな場合じゃないだろ！ ホラ、来たぞ！」

ツバサがジャギイとはいえモンスターが現れたのにのん気に話しているナギサとワカバに注意の声を飛ばす。

「ギャウ」

「ギャア、ガア」

ジャギイ達がひとしきり鳴くとツバサの言う通り此方に向かって突っ込んできた。

「うわっ！ ……あつぶな〜。」

ナギサが驚いた様子で跳びかかってきたジャギイをかわす。

「つつーかクルペッコは何処行つた？」

ツバサはナギサの事は一端無視する事にして辺りを見渡す。

どうやらジャギイの襲来で知らず知らずの内に視界が狭まっていたようだ。

「クアア！」

ツバサの後ろからクルペッコの鳴き声が響く。

その声に反応してツバサは反転した。

「あの野郎、いつの間にあんなとこまで……。」

ツバサがにが虫を十匹ほどまとめて噛み潰したような顔で言う。

ツバサの視界が捉えたクルペッコは予想以上に遠くにいた。

目測だがツバサとの距離は大体15mでナギサとワカバからは13m、一番近くにいるアンでも8m以上は離れているように見える。

ツバサ達がジャギイの事を気にしてクルペッコを視界から外したのはほんの数秒ほどのハズだ。

それでも目の前にいるクルペッコはその数秒の内に飛ぶか何かして移動したのだろう。

鳥竜種とはいえさすが空を飛ぶ力を持ったモンスターだ。

「アン、今奴に一番近いのはお前だ！ 悪いがクルペッコの相手をしてってくれ！ 俺達はジャギイを片づける」

ツバサがアンに指示を出す。

全部まとめて相手にするよりは小型モンスターを先に倒して一気に

攻め込む方がいいと判断したのだろう。

アンはその指示に無言で頷くとクルペッコに駆け出した。しかしその指示が失敗だった。

アンが鉄刀【楔】の斬撃が届く範囲に着くよりも早くクルペッコは勢い良く息を吸い天を振り仰ぐ。

ツバサはまた声マネでジャギイが何かでも呼ぶ気かと怪訝そうな顔をしたが今回はそんな簡単な話ではなかったのだ。

「ゴオアアアアアアアアアアア！！！！」

クルペッコのクチバシからとてつもなく大きな音が鳴り響く。

「この声は……アン様マズイです！ 音爆弾を投げ……」

ワカバがそこまで言ってお八ツとなる。

クルペッコの声マネは音爆弾で中断させる事が出来る。

なのでツバサ達ツヴアイ村の面々は一応用心して持ってきていた。

しかしアンだけは狩りの直前までそんな事は知らなかった為準備が間に合わず持ってきてなかったのだ。

「ゴオアアアアアアアアアア！！！！」

クルペッコは音が少しでも広い範囲に届くようにと考えたのか、声マネを続けながら上半身は右へ左へとを振り回すようにする。

その姿は巨大なモンスターを呼ぶ為の舞のようにも見える。

ヒュオオオオオオ

クルペッコが声マネを止めるとほぼ同時上空から何か夜風を切り裂くような音がエリア中に響き渡った。

26 (コラボ編4) ・夜空やらラブコメやらクルベッコやら…… (後書き)

久しぶりの投稿になる今回はこんな感じになりました。

ツバサ：「今回は俺達の新武器登場の回にもなってんだな？」

ええまあ……。

ちなみに今回のお披露目に伴って武器の紹介コーナーにも追加しました。

ついでに一緒にキャラ紹介コーナーにも今まで書き忘れていたシャルナ・3ネコトリオの情報も加えたので其方の方もお楽しみに。

27 (コラボ編5) ・襲撃！ 陸の女王！（前書き）

最新話更新！

ツバサ：「やつぱ、1日オーバーしたじゃねえか？」

ナギサ：「それに今回文字数も少ないし……、」

うっ、……悪い（汗）

ツバサ：「まあ分かった事だからいいけどよ。」

ホントゴメン（汗）

ナギサ：「じゃあ早速、最新27話どうぞ……！」

あ、セリフ取られた！

バサリ、バサリ、バサリ、バサリ

ツバサ達の上空から翼を羽ばたかせる音がする。

ただし今度のは先ほどクルペッコが来た時とは比べ物にならない力強い音だ。

「……冗談だろ？」

「嘘……でしょ……。」

「ア、アレって……アレ、だよねえ……。」

その強大な存在にツバサ・ナギサ・アンの3人はそれぞれ絶望染みた声で呟く。

「まさか……今出てくるなんて……。」

もちろんワカバも同じく絶望の声を上げる。

ただし唯一クルペッコが鳴き声を出し始めた瞬間からどうなるかを理解していたワカバだけは他の3人とは同じ絶望の声でも少し違った印象だ。

ドスン

同じような音でもクルペッコが降りた時とは比べ物にならないような重々しい音が辺りに鳴り響く。

降りた瞬間、先ほどまで暗闇のせいで輪郭しか見えなかった姿が月明りに照らされてハッキリと現れた。

それは現在目の前にいる人と比べて何倍もの大きさを誇るクルペッコよりも更に巨大な飛竜だ。

飛竜の名の通り大空を飛び回る為の巨大な翼、地上での戦闘に特化する為に筋肉の塊と化した強靱な脚、その先端に強力な毒を持つ長大な尻尾。

それらすべては夜の暗がりの中でもよく分かるような鮮やかな緑に彩られている。

飛竜の中の飛竜と呼ばれるモンスター。

「クルアアアアア！」

するとクルペッコは一声上げて飛び上がるところだった。

この場はリオレイアに任せて自分は逃げる気らしい。

「くっ、……ま、待てえ……。」

ツバサの小さな叫びも虚しくクルペッコは何処かへ飛んでいった。
まった。

「くそ……。」

ツバサの力ないちいさな声を上げた。

そうこうしているうちにリオレイアの砲撃が鳴りやんだ。

砲撃の直後はツバサ達だけではなくリオレイアも一瞬だが動けない。
流星のリオレイアもこれだけ大音量を自らの体から発するのは簡単
ではないらしく、叫び終わった直後はホンの一瞬だけ体が硬直して
動かせないのだ。

ただしそれでも動き出すのはリオレイアの方が早い。

「グウオウウウウ！」

リオレイアは雄叫びと共に突進を開始する。

狙いは一番近くに居たツバサだ。

「ツバサ！」

ナギサの絶叫がエリアに木魂する。

だがツバサはナギサの声には気付いてない。

何を考えているのか逃げずにやや緊張した面持ちでその場に突っ立
っている。

「くう……はっ！」

ツバサはリオレイアの突進を敢えてギリギリまで引き付けると勢い
よく横っ跳びに跳んで突進をさせた。

（あ、あつぶね〜）

ツバサは何とか上手く回避した事に胸を撫で下ろす。

女子三人を見ると其方も安心したように息を吐き出していた。

ツバサの趣味の一つにモンスターの生態を調べると言うモノが

ある。

特にドンドルマのハンター養成学校時代にはよく学校の図書室でモンスターの状態を調べていた。

その為ツバサはリオレイアの攻撃パターンがほぼ頭の中に入っている。

そこから考えて今一番ベストな動きを選択して行動したのだ。

「チャンスだ！」

ツバサはそう言うや否や反転してまだ突進中のリオレイアを追いかける。

リオレイアは基本的に突進するとその勢いを殺しきれずに体を投げ出すようして倒れ込んで止まる。

ツバサの考えとはそのスキを追撃する事なのだ。

……しかし、

ズザザ……

短い地響きと共にリオレイアの突進が止まった。

二本の脚でしっかりと大地を踏みしめて。

「は？」

ツバサの表情が驚愕の色をしたまま硬直する。

理由はもちろんリオレイアが倒れこまずに二本の脚で立ったまま突進を停止させたからだ。

（なんで倒れこまないんだ！？ 短距離突進なら倒れこまない事もあるって書いてたけどコレだけ進んでもまだ倒れこまない物なのか？）

？

ツバサが少々パニックになった頭で必死に考え込む。

先ほどリオレイアが突進を開始したのがツバサから大体5mは離れた場所でツバサが回避した後も大体同じぐらいの距離は進んでいた。つまり単純計算で10mは進んだ事になる。

10mもの距離なら流石に短距離と呼ぶはずがない。

ツバサがそんな事を考えているスキに倒れこまなかったリオレイアはすぐさまゆっくりと反転して大きく息を吸い込む。

「ヤバッ、ブレス！」

ツバサはリオレイアが何をする気か一早く気付き考える事を一端中断すると、ブレスの射線から転がるようにして慌てながら抜け出す。ツバサが回避した瞬間リオレイアは口から勢い良く火球を吐き出す。しかしその射線には誰もいなく、ブレスは爆音を上げながら岩壁に激突してそのまま消えた。

「ハアアアア……」

気合いを溜めたワカバがリオレイアの駆け寄っていく。更にそこから少し離れた所でアンも走り出していた。

二人ともブレス終わりのスキを狙って攻撃を加えようとしているのだろう。

「ヤッ、ハッ、ヤッ、シュート！」

ナギサも少しでもダメージを蓄積させてスキを作ろうと矢を連続して放ち続ける。

「クッ、俺も……」

ワカバ達の行動を見てツバサも自分も攻撃しようと急いで反転する。

「おりゃ！」

「ハアッ！」

ツバサは脚を斬り払い、アンは翼を袈裟掛けに斬り付ける。

「ヤアアアア……」

ワカバも2人に少し遅れて水鎚ヴォジャノイを振り下ろす。

狙いは無論頭部だ。

「グルルル……」

リオレイアは4人の攻撃など意に介してないように半歩下がった。

「コレは……マズイです！」

ワカバが驚いたよう声を上げると慌てて回避をする。

「ゴワアア！」

直後リオレイアがその状態から勢いよく宙返りした。

サマーソルト攻撃だ。

「うお！」

「ひゃっ！」

サマーソルト攻撃が来る事に気付けなかったツバサとアンもどうにか体を捻って避ける。

それぞれ比較的回避しやすい所に居たのが功を相したようだ。

しかし……、

「へ？」

「え？」

「はぁ！？」

ツバサ、ナギサ、アンの3人はサマーソルトをした直後のリオレイアを見てまたもや驚愕の声を上げた。

なんとリオレイアは自らの翼をためかせて体を地面スレスレの場所まで停止させているのだ。

「何だよ……コレ……？」

ツバサは目の前の光景が信じられないと言う顔で小さく呟いた。

ツバサの……いや、ツバサ達の知識の中のリオレイアは飛行能力が飛竜の中でも極めて高いと言っイメージはない。

その為もちろんこのような低空ホバリングなど出来るなど考えた事もない。

「ゴワア！」

リオレイアは短く鳴き声を上げるとまだ宙に浮いた状態から滑空するように勢い良く突進を開始した。

「ひっ、」

狙っているのは狙撃の為に一番離れた場所にいたナギサだ。

恐怖で体が固まってる。

「横に跳べ！」

ツバサが切羽詰まった様子で叫ぶ。

その声でハツとなったナギサは体を投げ出すようにして前に向かって飛んでどうにか避ける。

ナギサとリオレイアの体がギリギリの距離をすれ違う。

「痛ったあ」

顔面から落ちた為顔の何処かを痛めたようだがどうにか回避する事ができたようだ。

「ゴワツ！」

だがリオレイアは着地してすぐにナギサを向き直る。

「ナギサ様！！」

今度はワカバの絶叫が木魂する。

その直後……、

「目を瞑って！」

アンの声が響く。

アンが何をする気なのか気付いたツバサとワカバは言われた通り目を瞑った。

その瞬間エリア全体を光が包み込む。

「グオオオオオオ……」

リオレイアはその光が進ると同時に悲鳴を上げる。

アンは閃光玉を使ったのだ。

リオレイアはその光で眼を焼かれて悲鳴を上げたのだ。

ちなみにナギサは後ろを向いていた為閃光玉の影響はない。

「ここは退避しよう！」

アンが叫ぶ。

「分かった。ワカバ、ナギサ、一端逃げるぞ。」

ツバサが指示する。

「はい。」

ワカバが素直に頷く。

「う、うん。」

ナギサも鼻を押さえながら頷く。

「一応やつとかなきゃな。」

ツバサはそう言うところから何かを取り出し、それをリオレイアに向って投げつけた。

直後辺りに強力な匂いが発せられた。

どうやらツバサが投げたのペイントボールだったようだ。

「よし！」

ツバサがペイントがしっかりなされた事を確認すると同時に4人はベースキャンプに向かって走り出した。

27 (コラボ編5) ・襲撃！ 陸の女王！（後書き）

今回はこんな感じになりました。

ツバサ：「何なんだよあのリオレイア？」

ナギサ：「何か聞いた事もないような動きばかりしてたもんね」

ああ、アレね。

どうだった？ かなり厄介だったろ？

ナギサ：「うん、……てかアレってホントにリオレイア？」

まあ……そうだけど……。

ちなみに今回の話の中で誰かツバサ達とは違う反応している人がいたけど二人は気付いた？

ナギサ：「え？ だ、誰？」

ツバサ：「……」

ん？

そのもしかすると様子だとツバサは気付いてる？

ツバサ：「……まあな。」

ナギサ：「え！ だったら教えて！」

ツバサ：「それは……」

はいストーップ！

今回はここまで！

では次回をお楽しみに〜

ナギサ：「ええ〜〜」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0273i/>

モンスターハンター～大海の剣～

2010年10月8日12時59分発行